

2020年度 横浜市ESD推進コンソーシアム実践報告書

横浜市 ユネスコスクール ESD推進校実践報告

令和2年度 文部科学省SDGs 達成の担い手育成(ESD)推進事業



横浜市では、2016年度の文部科学省「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」の採択を受けて以来、全ての横浜市内立学校で、ESDの理念に基づく教育が広がるような取組を展開してきました。事業の推進においては、多様な組織が参加・連携した「横浜市ESD推進コンソーシアム」を立ち上げ、以下のようなESDに関連するキーワードのもとで、取組が展開されてきました。

表:「横浜市ESD推進コンソーシアム」で活用されてきたESD関連のキーワード

- 持続可能な開発のための教育(ESD)
- ホールスクール・アプローチ
- 多様な主体とのパートナーシップ
- ESDのレンズ:見直す(批判的)、つなげる(統合的)、変わる(変容的)、地域で世界へ(文脈的)
- SDGsの特徴:普遍性、包摂性、参画性、統合性、透明性
- SDGsを学ぶ、SDGsに学ぶ、SDGsと学ぶ
- カリキュラムデザインと学校運営の連関
- 未来につながる、未来につなげる
- 「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会
- 学びの可視化、プログラムの評価

本取組では、当初からESDを学校全体で取り組むこと(ホールスクール・アプローチ)を軸に据え、展開してきました。「ホールスクール・アプローチ」は、(1)学校におけるガバナンスと能力開発、(2)学校施設の運営、(3)カリキュラムの編成・実施と教授・学習活動、(4)学社連携の4領域に配慮をしたものであり、その相互性が強調されたアプローチと言えるでしょう。本取組においても、カリキュラムデザインと学校運営を連関させたアプローチを採用し、さまざまな取組を「見直す、つなげる、変わる、地域で・世界で」のレンズで考えることを、教職員、学校関係者、保護者、児童生徒とともに深めてきました。地域と世界、学級・学年と学校、教科と総合、能力と態度などのように、一見、異なる文脈で語られることが多い用語を関連づけ、学校全体が持続可能性に向き合う取組を深めてきました。

令和元年度においては、文部科学省「SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業」(教育(学習)効果の評価・普及)の採択を受け、学びの可視化やプログラムの評価に挑んできました。とりわけ、この数年の「変容」は、教職員、児童生徒らが、持続可能な未来に向けた教育・学習について主体的に考え、関わることにより、各々の学校の個性や文脈が活かされた取組が多く見られるようになってきました。日々の授業研究や教員研修、年度末の報告会などを通して、自身の取組を発表・共有するだけでなく、お互いのいいところを尊重し合いながら、さらに学校の個性や文脈を活かした取組として「変容」させてきている点に特徴が見られるようになってきました。これらの個性ある学校の変容は、当初からESDを学校全体で取り組むことを軸に据えるという「ホールスクール・アプローチ」によるものだと思っています。今日では、ESDは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成を可能にさせるもの(enabler)であると言われています。さらに、2020年にユネスコにより発表された“ESD for 2030”では、個人の変容と社会の変容の連動性が今まで以上に強く言われています。

この冊子に見出される知見が、横浜の、国内各地の、ひいては世界各国の持続可能な未来に向けた教育のさらなる展開の一助になれば幸いです。

横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター
東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授

佐藤 真久

本書について

昨年度に引き続き、今年度も文部科学省の「SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業」の指定を受け、中でも「教育（学習）効果の評価・普及」の分野で、研究を推進しています。横浜市教育委員会として、2020年度はユネスコスクール4校を含む、ESD推進校を23校指定し、SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業を実施してきました。

この事業を進めようとした時点では、既にCOVID-19拡大防止のため、全国的に緊急事態宣言が発出され、約3か月もの間、全国の学校が一斉休業になりました。再開後も通常の学校運営が難しい中、「本当にESDの推進ができるのだろうか」、様々な制限があるなかで、「ESDの推進といっても何をしたら良いのだろうか」という懸念もあり手探りの状態でした。しかし、各校で取り組んだ実践報告を見ると、「誰もが経験したことがない事態の中での実践ではあったが、長年に渡り、ESD推進を行っている本校ならではの取組ができた」「コロナ禍で活動が制限されている中でも自分たちの考えや行動を積極的に発信し、広げていこうとする生徒の意識や行動力の高まりが感じられた」といった記述が随所に見られ、ESDを推進してきた強み（価値）を改めて感じました。

換言すれば、COVID-19という「持続不可能な状況」の中でも、できないことよりも、できることを見つけ、教育活動全体を見直し、児童生徒にとって何が大切かを考える1年になったのだと思います。推進校の取組から教職員が自発的に学校経営に関わったり、教育的価値を問い直したりする場面で、「ESDの視点」が有効であったことを、改めて確信することができました。

本報告書の構成は次の通りです。

第1章では、ユネスコスクールを含むESD推進校の取組について掲載しました。「1 学校教育目標とESDを通して育成したい資質・

能力」「2 SDGs達成の担い手（ESD）の視点で取り組んだこと」「3 ESDによる『変容の視覚化』の手法」「4 ESDによって引き出すことができた価値」から、教育活動がどのように学校教育目標に位置付いているかを示すことで、手段と目的の関係を明確にしました。「ESDによって引き出すことができた価値」は「教育（学習）効果の評価」そのものです。また、より詳細な事例として、カリキュラム・マネジメントの視点から、ESDの構成概念と能力態度を研究している横浜市立三保小学校の実践とロジックモデルを用いた協働型プログラム評価の研究をしている横浜市立みなとみらい本町小学校（以下、MM本町小学校）の実践について掲載しています。

第2章では、昨年度に引き続き、東洋大学の米原あき教授のMM本町小を事例とした2年目の取組の分析について掲載しています。「協働型プログラム評価」という考え方を導入し、2年目ならではの課題も含めて検証し、不確実な時代ならではのレジリエントな学校への展望も含め論述されています。

第3章では、2020年10月に各推進校に対して実施した児童・生徒と教職員の「ESDに対する知識・態度・行動」に関する質問紙調査の結果を東京大学の北村友人准教授が分析をしています。この調査は、地球規模課題として広く認識されている諸問題に関して児童・生徒や教職員がどのような知識を有しており、それらの問題に対応するためにいかなる態度や行動をとっているのかという実態を把握し、今後の課題を明らかにすることを目的としており、調査結果と分析の速報を掲載しました。

第4章では、横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会、ESD推進校研修・情報交換会について掲載しました。

最後に、本市のこれまでのESD推進事業をコーディネーターとして支えてくださっている東京都市大学佐藤真久教授に深く感謝し、本研究が広く普及することを願うものであります。

目次

はじめに	横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター 東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久	1
本書について		2
目次		3
第1章 横浜市立 ユネスコスクール・ESD推進校の実践事例		4
1	永田台小学校	5
2	幸ヶ谷小学校	7
3	市ヶ尾中学校	9
4	東高等学校	11
5	三保小学校	13
6	羽沢小学校	15
7	日枝小学校	17
8	恩田小学校	19
9	荏田西小学校	21
10	港南台第三小学校	23
11	南本宿小学校	25
12	みなとみらい本町小学校	27
13	大門小学校	29
14	中和田中学校	31
15	西本郷中学校	33
16	西柴中学校	35
17	神奈川小学校	37
18	白幡小学校	38
19	中尾小学校	39
20	相沢小学校	40
21	本牧中学校	41
22	小田中学校	42
23	中川西中学校	43
	(1～4の学校はユネスコスクール・5～16の学校は継続校・17～23は新規校)	
■カリキュラム・マネジメントをESDで進める実践事例		45
	ESDの指導と評価の研究報告 <三保小学校> 主幹教諭 新海 秀美	
■ESDの視点で学校全体の教育活動を見直す実践事例		47
	ロジックモデルを用いた協働型プログラム評価の実践 ーホールコミュニティで育成する「みな」と「みらい」を創る子ー <みなとみらい本町小> 主幹教諭 高原 洋介	
第2章 協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメント実践に関する 調査研究報告書ver. 2 (理論編)		52
	横浜市ESD推進コンソーシアム委員 東洋大学 教授 米原 あき	
第3章 持続可能な開発のための教育 (ESD) に関する質問紙調査の結果 (速報)		74
	東京大学大学院教育学研究科 准教授 北村 友人 特任助教 佐々木 織恵 特任研究員 八木 恵里子	
	調査質問紙	79
第4章 本年度の横浜市ESD推進コンソーシアムの取組 (教育委員会としてのESD推進)		86
	2020年度横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会	87
	SDGs推進校研修会・情報交換会	92

第1章

横浜市立 ユネスコスクール
E S D推進校の実践事例

1 横浜市立永田台小学校

学校教育目標「一人一人が輝く永田台」

知：学び続ける 徳：ともに豊かに 体：心も体も元気に 公：持続可能な未来を 開：地域と夢

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

学校教育目標「一人一人が輝く永田台」に向けて、「豊かで確かな学び」を実現する。特に3つの視点を大事にしている。「体験」では、試行錯誤を繰り返しながら学ぶことができるようにすること。「言葉」では、自分の思いを表現する言葉を持ち、語り合う豊かな学びをめざすこと。「協働」では、つながり合い、認め合い、協力しあって活動することのよさを実感できるようにすることである。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

自らの問いを大切に、解決に向けて探究的に学習を深める「生活科・総合的な学習の時間（かがやきの時間）」での取組を紹介する。

★全学年のかがやきの時間の活動が11番「住み続けるまちづくり」につながっています。

○幼保小交流つながりプロジェクト（1年）

球根を同じ時期に植えるために、永田台小から幼稚園・保育園に届けた。互いに思いをもって花を育て、緑を大切に作る心を育みたい。



○玉ねぎの皮を使って草木染め（3年）

廃棄される給食の玉ねぎの皮を使ってオリジナルハンカチの草木染めをした。廃棄するものにも価値のあるものがあることに気付いた。



○よもぱん買い物プロジェクト（個別支援学級）

地域のパン屋でお買い物をする活動を通して、生きる力とともに地域への愛着が高まった。



○笑顔を取り戻そう！コロナに負けるな！永田台マラソン（6年）

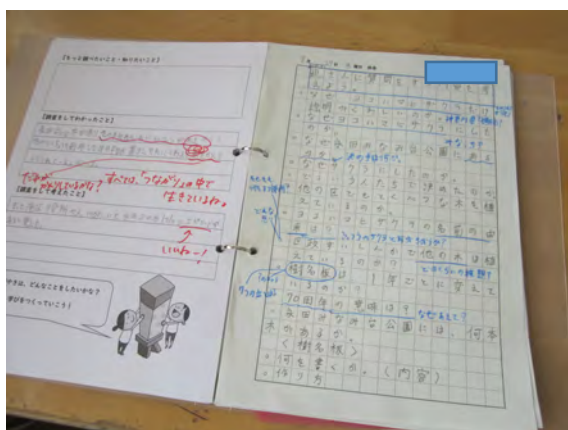
コロナ禍で地域に笑顔と元気を取り戻そうとマラソン大会（運動）を企画した。地域住民、永田台小の子どもたちなどの参加者（自主参加）計50名が笑顔になった。3番の「健康と福祉」につながった。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

○一人ひとりの子どもの気づきや変容をとらえるポートフォリオ評価

全学年にA4 2穴ファイルを配付した。そこにかがやきの時間の活動での学びや気づきを毎時間書き込んでファイルに綴じている。子どもたちのふりかえりには、担任がフィードバックをする。そのフィードバックも気づきを促す問いかけを大事にしたフィードバックを心がけることで、子どもたちが自分の考えを深め、次の問いを生み出すきっかけになっている。



↑自分で気づきや問いを書き込み始める児童



↑全学年に配付しているファイル

○全学年の活動を可視化することができる掲示の工夫「かがやきストリート」の作成

本校には、全学年が通る廊下がある。その廊下の柱を活用し、かがやきの時間の活動の足跡を残している。この取組により、どの学年でどのような活動をしているのか見ることができる。また、ホールスクールアプローチとして、担任や学年の先生だけではなく学校全職員が

「こんな団体とつながってみたい?」「このアイデアどう?」など日常から声をかけ合い、職員間での対話のきっかけを生むことができる。その対話は教職員間だけではなく、児童と職員の話のきっかけにもなるので、ホールスクールアプローチにより学びがより深まっている。



↑学年ごとの柱状に掲示している

○子どもの変容を見取る教職員の育成

子どもの変容を見取る上で、教員一人ひとりの「見取る力」は欠かせない。その力を向上させるために、授業研究会では数名の子どもの45分間の授業の行動観察をし、その子どもの姿を糸口に授業内容や問いを深める研究協議会を行っている。研究協議会を重ねることで、教員の見取る力は確実に上がり、日々の授業にも生かされている。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

- ・予測不能な時代の中でも、ESDに取り組むことで、一人では解決できないことも、誰かに相談をすれば解決することができることや、困っているときは地域や教員などの身近な大人が協力してくれることを、実体験を伴って、実感することで、「自分の小さな力は大きな力になる」という認識をより確かにする事ができた。
- ・ふりかえりを大事にすることで、自分の中の問いを見つめ直すきっかけとなり、思いを言語化することで学びがより豊かになった。また、ESDにおける資質・能力(批判的思考・未来の計画性・多面的総合的に考える力)の高まりにつながり、ESDをより深化させている。

2 横浜市立幸ヶ谷小学校

学校教育目標

自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

新しい学習指導要領には、教育課程全体を通じて教科横断的に育成を目指す資質・能力が問われている。学校教育目標の達成に向けて、どのような資質・能力を本校として育成すべきなのか、その視点に立って協議した結果、「目指すべき子ども像」を昨年度、完成させた（以下、子ども像）。

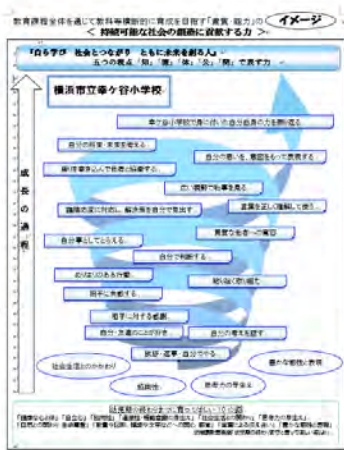


図1「目指すべき子ども像」(2019)

この子ども像を一つの視点として、昨年度の実践では、多くの成果が生まれた。詳しくは昨年度の報告書に譲るが、一方で、子ども像の系統性の理解が課題として上がった。

そこで本年度は、図2の「幸ヶ谷小学校で育てたい資質・能力表」を作成し、系統性を明確にして、各発達段階の目指すべき子ども像を明らかにした。図2は、本校のESD推進部が作成し、各ブロックで育てたい資質・能力を具体ま

発達段階	自ら学ぶ	社会とつながる	ともに未来を創る人
6・5年	学習意欲を高め、自ら学ぶ姿勢を身に付ける。	友達や先生と協力して課題を解決する。	社会貢献活動に参加し、社会の発展に貢献する。
4・3年	学習意欲を高め、自ら学ぶ姿勢を身に付ける。	友達や先生と協力して課題を解決する。	社会貢献活動に参加し、社会の発展に貢献する。
2・1年	学習意欲を高め、自ら学ぶ姿勢を身に付ける。	友達や先生と協力して課題を解決する。	社会貢献活動に参加し、社会の発展に貢献する。

図2「資質・能力表」(2020)

で落とし込んだものである。発達段階が系統立てられていると共に、「学校教育目標」、横浜市の教育が育む力（知徳体公開）の5つの視点、ユネスコが示した「ESDの学習の柱」の3つの視点との整合性が図られている。

本年度は上記を活用しながら重点研究を一つのポイントとしつつ、日々の実践に臨んだ。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

本年度はコロナショックという未曾有の事態の中で、「持続可能な社会の創り手」、「SDGs達成の担い手」の育成にいかに関わり、全教職員で模索する日々であった。様々な実践が行われたが、ここでは、主に重点研究の取組について紹介する。

本年度の重点研究は、先記したように「資質・能力表」を活用しながら、昨年度に続き「子どもと教師の変容を促す効果的なリフレクション研究～自分、友だち、社会の幸せをつくる資質・能力の育成～」とのテーマで児童と教職員のリフレクション（Reflection以下、リフレクション）の実践に取り組んだ。リフレクションは、OECD(Organisation for Economic Cooperation Development 以下、OECD)が定める国際標準の学力であるキー・コンピテンシー（資質・能力）の核心であり（ドミニク：2006）、OECDが定めた「The Learning Framework2030」には、リフレクションが位置付けられている。また、ユネスコの「自分自身と社会を変容させるための学び」の特徴を表すキーワードでもある（曾我：2018）。昨年度の成果を踏まえ、より深いリフレクションを行うため、より深く授業者に問いを重ねる形式で重点研究を進めた。例えば、授業後の研究協議会では、授業者の自評を踏まえつつ、参観者が小グループで話し合い、授業者への問いを一つ決める。出された各グループからの問いをもとに、ファシリテーターが授業者の内省を深めていく。授業者のリフレクションの深まりを聞きながら、参観者は授業者の思いや思考の揺れを意味付けすることで、自身の実践を顧みることを意図した取組である。

授業者からは、「自分では気付かなかった視点を、みなさんからの問いで気付くことができた」また参観者からは「〇〇さん（授業者）の振り返りが、どんどん

深まっていることが分かった。また〇〇さんの授業のこだわりの裏に、子どもたちへの思いがあるのがわかった。」などの声が聞かれた。授業者自身がメタ認知の視点から、内発的に自己を顧みる効果や同僚性の高まりが出ており、一般的に本校で行われてきた反省点を指摘し合う授業研究会では得られなかった成果である。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

(1) 児童の変容～価値変容、行動変容～

「変容の視覚化」の一例として4年生の学級の実践を紹介する。この学級では、児童たちが「横浜の海の大切さを伝えたい」との願いをもち学校の壁画作成の実践に取り組んだ。単元ごとの終末には、「持続可能な横浜の海とは？」との問いへの応答を考えることで、児童の変容を明らかにするリフレクションの試みがされていた。ノートには、定期的に振り返った跡が記されており、児童も自分自身の思考の変容を知ることができる(写真1)。ある児童は、当初、海に対する愛着がなかったが、回を重ねるごとに、「持続可能な横浜の海」の姿について考

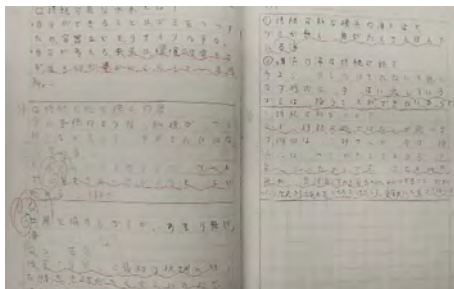


写真1「児童のノート」

察をしていくだけでなく、自主的に海岸の掃除をするようになるなど、価値の変容から行動の変容としてつながる姿が見受けられた。このように、ノートの記述を通して児童の価値の変容が視覚化されるだけでなく、行動に至る変容として視覚化される実践がなされた。

(2) 職場環境の変容

休校期間中、本校のESD推進部を中心に「今こそできることは何か」を考え、昨年度より行っている職員室レイアウト変更をさらに一歩進めた。例えば、文房具類の見える化や物品の整



写真2「文房具の見える化」

理をすることで、職員室内に空間が確保された(写真2)。このことによって、本校の長年の課題である手狭な職員室に、より多くのスペースが生まれ、動線の確保がなされた。この効果は、職員からも大変好評で、持続可能な働き方に大きく寄与している。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本年度は、誰もが経験していない事態の中での実践ではあったが、長年に渡りESD推進を行っている本校ならではの取組ができたと考えている。重点研究はもちろん、運動会をはじめとする諸行事においても大幅な変更が必要とされた。その度に、本校では教職員、地域が一丸となって知恵を出し合い、多くの工夫が施された。それは単に密を避ける、消毒をこまめにする、といったことではない。教育の質や児童の喜びを下げることなく、かつ職員、地域にとっても負担を強いるだけでない取組を一つ一つ実現していった。その評価は、各種のアンケートからも明らかになっている。長年、ユネスコスクールとしてESDを柱に、地域とつながりながら、学校教育目標の実現に取り組んできたからこそ、このような成果が出せたのではないだろうか。



写真3「職員室に飾られた掲示」

休校期間中に、教職員の思いが付箋に書かれたポスターが職員室に飾られた(写真3)。付箋を読むと、教職員一人ひとりが、今回の事態を冷静に受け止めつつ、学校再開に向けて自分自身を取り組めることを前向きに記しているのが分かる。児童の資質・能力の育成が求めら

れるからこそ、こうした職員の資質・能力、そしてつながりを育む職場づくりに向けて、ESDを柱に取り組んでいきたい。

引用文献

曾我幸代(2018)『社会変容をめざすESD:ケアを通じた自己変容をもとに』学文社。

ドミニク・S・ライチェン/立田慶裕監訳(2006)『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』明石書店。

3 横浜市立市ヶ尾中学校

学校教育目標 教育理念 『自立貢献』

- 自分で解決する力を大切にします。(知・公・開)
- 心豊かに生きる力を大切にします。(徳・体)

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

- ・持続可能な社会の創造に貢献する力
- ・グローバル化の中で生きる力
- ・言語能力

2 SDGs達成の担い手育成(ESD)の視点で 取り組んだこと

1. ESDの視点を重視する教育活動の視点

「市中から世界を変えよう」を合言葉に、生徒会本部役員を中心とした各委員会の活動や各教科の授業などでESDに取り組んでいます。



委員会	活動内容	具体的な活動方針
生徒会本部役員	・共同研修 一斉中から世界を変えよう	・共通の課題を共有し、お互いの強みや、得意分野を交流する。 ・自分たちの得意分野を共有する。
3年学習委員会	・ポピュラー音楽を盛り込む	・音楽を通して、SDGsの目標を学ぶ。
2年学習委員会	・創作活動	・SDGsの目標をテーマにした、オリジナルの作品を制作する。
1年学習委員会	・読書活動	・SDGsの目標に関連する書籍を読み、感想を共有する。
生活委員会	・一斉入場	・SDGsの目標に関連する、自分たちの生活にどう活かせるかを考える。
環境委員会		・SDGsの目標に関連する、自分たちの生活にどう活かせるかを考える。

・環境委員会



「石けん教室」

SDGsの目標達成に取り組んでいる「太陽油脂株式会社」から講師を招き、地球環境への影響に配慮した取組として、自分たちができることは何かという視点で学ばせていただきました。「環境にやさしい生活」に気付かされる時間となりました。

・図書委員会



「Life with Reading ～読書の秘訣～ 創造的読書のパターン・ランゲージ」

「株式会社有隣堂」のご協力のもと「ワークショップ」に取り組みました。読書のコツや楽しみ方を「言語化」することで、そこから生まれるコミュニケーションを楽しみながら、活動しました。質の高い読書の方法などについて学びました。

・生徒会本部役員



瀬谷区の相沢小学校とリモート交流を行い、お互いのSDGsの取組について、学びの成果や実践などを伝え合いました。離れていても、人とつながり、情報交換ができたことは、とても良い刺激となりました。交流をもつことの大切さを改めて実感しました。

2 持続可能な社会の実現とSDGs達成に向けて

・市中オリジナルマイバッグ

3年前から「海洋プラスチック問題」について課題意識をもち、中央委員会を中心に学習を進めてきました。まずは、講師を招き、問題について学習したり、「学活」や「総合的な学習の時間」などで学習したことを発信したりして、「海洋プラスチック問題」について全校生徒に伝えました。次に、「自分たちができる」ことを真剣に考え、「マイバッグ」を製作しました。完成した「マイバッグ」を全校生徒に配布し、「自分たちの行動が世界を変えることにつながる」という具体的な行動のきっかけとなりました。

今年度は、「マイバッグを地域に広げる活動」を行いました。自治会や町内会などで生徒会本部役員が「マイバック」の取組を説明しました。



多くの場所で取組に賛同してもらい、「マイバッグ」を購入してもらったり、区役所の協力のもと、地域のイベントでの販売活動を行ったりすることができました。「マイバッグ」について、地域の広報誌や新聞社から取材を受けて、取組を発信することもできました。今年度の活動から、自分たちだけの行動で終わるのではなく、そのことを発信し、広げていこうとする意識や意欲をもった生徒たちが育ってきました。さら

に、「地域」に活動を広げることで、「地域の変容に貢献できる学校」としての役割が「持続可能な社会の創造」において、とても重要となつてくると学ぶことができました。

・各教科

【 国語 】

学校司書と連携し、図書室にある本を1冊選びSDGsとの関連を考え、紹介するポップを作る授業を行いました。SDGsを達成させるヒントが身近にあることを理解できる学びとなりました。



【 英語 】

朝日新聞の「169 ターゲットアイコン日本語版製作プロジェクト」に取り組みました。英語で書かれた原文を読み、自分で調べ学習を行い、具体的行動につながる一人ひとりの心に残る日本語コピーを製作しました。

【 総合的な学習の時間 】

1学年は、「SDGsの理解を深める」、2学年は、「身近な課題解決に向けた考え方や行動力」、3学年は、「日本や世界の問題について考える」など、各学年でテーマをもってSDGsの学習に取り組みました。SDGsの達成に向けた「今」の自分たちの意識や考えの変容に気づき、行動に移していくことの大切さを学ぶ時間となりました。

【 道徳 】

よりよい学校生活、集団生活の充実を目指し、生徒総会の意見としてあがった「自動販売機の導入」のよりよい在り方について、討議を行いました。「便利だから、ただ必要」というだけでなく、他の生徒や教員の意見、SDGsに達成に向けて取組んできた市ヶ尾中学校としての視点等から、熟思し、話し合いが行われ、他者と考えを共有し、自分なりの考えをもつことができました。

した。持続可能な社会に向けて取り組む、生徒たちの意識の変容を見取ることができました。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

「持続可能な社会づくり」を意識した委員会活動を通じた、生徒たちの「ESDを通して育成したい能力・態度」の変容を見取るため、振り返りアンケートを実施し、数値をグラフ化しました。

項目	割合(%)				
	よくできた	できた	どちらともいえない	できなかった	全くできなかった
① 未来像を予測して計画を立てる力	30	52	15	3	1
② 行動力	41	45	12	1	0
③ 多面的・総合的に考える力	30	48	21	2	0
④ コミュニケーションを行う力	41	37	20	3	0
⑤ 他者と協力する態度	64	30	5	0	0
⑥ つながりを尊重する態度	50	36	13	1	0
⑦ 進んで参加する態度	55	38	6	2	0

振り返りアンケートの結果、高い数値なのが、「他者と協力する態度」「進んで参加する態度」で90%以上の生徒が2つの態度の高まりについて実感しています。一番低い数値なのが、「多面的・総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」であることがわかりました。今後、ESDの視点でのアンケートを全校の生徒に実施することを計画し、本校のESDの達成度や理解度を測り、ESDの更なる推進に努めていきたいと考えています。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

ESDを取り組み始め5年が経ち、「持続可能な社会作りの担い手」を育てる教育活動の広がりや様々な学習で感じる1年でした。コロナ禍でSDGsの活動が制限されている中でも、「オンラインでの小学生との交流」や「地域にマイバッグを広める活動」などを通して、「自分たちの考えや行動を積極的に発信し、広げていこう」とする生徒の意識や行動力が高まりました。先輩たちの取組を後輩たちが引継ぎ、発展させてきたからこそその成果でもあります。「地域の変容のために学校が情報発信していくこと」や「次の世代に取組をバトンタッチしていくこと」今後とも大切していきたいと思えます。

4 横浜市立東高等学校

<教育理念>・あたり前のことをあたり前に出来る人間

・物事を正しく判断し、他人に迷惑をかけない人間

<学校教育目標>

・自ら学び、熱心に学習する生徒を育成します。

・豊かな心と健やかな体を育み、他人を思いやる生徒を育成します。

・社会の一員として自らの役割を果たすとともに、国際社会の発展に貢献できる生徒を育成します。

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

○「言葉の力」と「聴く力」を身につけ、論理的な思考力と高いコミュニケーション力

○「主体的な学び」の成果をもとに、より高い進路目標の実現に向けて「挑戦する力」

・多様性を尊重し、それを受け入れる価値観と多様な人々とともに、目標にむかって「協力する力」

・自分の意見をわかりやすく伝える発信力と他者の意見を丁寧に「聴く力」

・現状を分析し、目的や課題を明らかにする「課題発見力」とそれを解決しようとする「行動力」

・物事に進んで取り組む主体性と他人に働きかけ巻き込む力をもったリーダーシップ

☆これらの力を身につけることによって、学校教育目標を達成できる。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

○イーストタイム（総合的な探究の時間）

○イーストタイム プレミアムプログラムⅠ・Ⅱ
Ⅰでは、進路選択に向けた、大学の説明
Ⅱでは、29の企業・団体がそれぞれ取り組んでいるSDGsについて、来校してプレゼンをしていただく。

○グローカリー（有志による地域学習）

○ESD委員会（緑化プロジェクト等）

○サステイナブル研究部（部活動として様々なイベントへの参加）

○グローバル・シチズンシップ・キャンプ
（留学生を交えて、英語でSDGsについて二日間学ぶ）

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

生徒の振り返りを大切にしている。そのため、今年度より、新一年生には、「GCファイル」という「探究」のファイルを各自作っていて、ポートフォリオとしている。



▲グローバル・シチズンシップ・キャンプ

あらゆる取組において振り返りを行っているが、次に、例として、1年生が11月に2日間行った、「グローバル・シチズンシップ・キャンプ」についての振り返りから、いくつかを示してみる。

・世界的な課題は私たちにはまだまだ高校生だから何にも役に立たないと思っていたが、小さなことからでも必ず繋がって少しでも役に立てることを知った。

・世界の問題はたくさん知っていたけど、他人事だと思っていた、でも今回は実施にその国の人たちに直接社会問題を聞いて、改善する重要性に気づけて、助けられたらなと考えるようになりました。

・国ごとで分けられているから他人事になっていたけど、いざ同じ場所にいると自分たちと何も変わらない“一人の人”で、同じ考えを持っていたり、新しい考えを持っていたりしていて決して自分から遠ざけてはいけないと強く感じた。

・今までは**世界**にはSDGsにある通りの問題があると全部を知ったつもりでいたけど、この2日間で**世界**は自分の知らない問題であふれていることを知りました。

・ヨーロッパは裕福だという勝手な偏見が**あったが**、ヨーロッパの国々でも十分に教育を受けられていない人が大勢いることを知る良い機会になりました。

・前から**世界**の問題については少し知ってはいた**たが**、知っていたのがインドくらいしか知らなかった**たが**、今回はタイ、ウズベキスタン、インド（もっと詳しく知れた）パキスタン、ルーマニア、ブラジル（特にその国の問題）について知ることができて、とてもいい経験になり、もう少し視点を広げようと思った。

・SDGsについて考えているのは一部の国だけだと勝手に思っていたから、ほぼ**世界中**の人が考えていてとても驚いた。

・とにかく「伝えたいという強い気持ち」が本当に大切だと思った。

今まで「間違え」を恐れていた**けど**、今は間違えてもいいからとりあえず言葉にしてみたいと思うようになった。

このように、「～だったが、～になった」という表現が多く使われていることと、世界とかグローバルという単語も多くみられ、生徒の視点が「身近なところ」から「世界」に大きく広がったことがよく分かる。



▲グローバル・シチズンシップ・キャンプの成果発表



▲GC ファイル

4 ESDによって引き出すことができた価値

(evaluation=評価)

国際的な広い視野

生徒は、小学校から、中学校を経て、高校生となり、思考のパラダイムを「世界」というレベルに広げている。「身近」→「世界」→「足元」というように、まさに、グローバルに考えて、ローカルに行動するという力が身につけてきている。

多様性の許容

学校以外の人たち、特に企業人や、外国からの留学生などと出会うことで、生徒は、「多様性」についての自分の認識をリアルに変容させている。

問題意識・課題意識

「問題」や「課題」を、身近なこと、自分の生活というまさに「自分事」に引き寄せて、グローバルな事象について考えることができるようになってきている。例えば、気候変動と自分の行動というようにである。

コミュニケーションの大切さ=ツールとしての英語

国際語=コミュニケーションツールとしての英語の必要性を切実に感じる生徒が増えてきている。このことは、単なる「受験勉強」としての学習から、自分自身の成長=自分づくりのための学習に学びが変容してきていることを示している。

シチズンシップ=人権意識

グローバルなシチズンシップを、東高校では、「あたりまえ」にしていこうと考えている。将来の成熟した市民社会の形成にむけて、生徒一人ひとりが、自分なりに考え、行動できるようになってきている。

5 横浜市立三保小学校

学校教育目標



進んで学び、高め合う子 ～元気・勇気・根気～



1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

【学校教育目標】
進んで学び、高め合う子 ～元気・勇気・根気～
【ESDテーマ】

- ㊦ らいをつくる ㊦んきのまなび
＜持続可能な社会づくりを担う力＞
- 興味・関心を広げ、主体的に学び続ける力。
(②未来)
- 他者を思いやる心を持ち、自他を大切にす
る態度。(I 多様性の尊重)
- 社会の一員として、自分の役割を進んで果たす
態度。(⑦参加)

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

本校は、地域の豊かな自然を活用しながら「持続可能な開発のための教育」(ESD)を推進しカリキュラム開発と授業実践を進めてきた。持続可能な社会づくりを担う児童の育成を目指し、環境やキャリアなどの教育課題をクロスカリキュラムにより整理し、全教科等において授業実践を進めてきた。今年度の取組は次の通りである。

I 新たな“授業研究”の形

コロナウイルス感染症の拡大によって、年間8回、全員が行っていた授業研究会を学年で1学級の授業公開に絞った。その分、指導案検討に充てていた時間を利用して、学年ごとに「ESD教材開発」に取り組む時間を確保し、授業のデザイン力や指導力の向上につなげようとした。

またICTの活用も積極的に行った。SDGsの担い手育成(ESD)推進校研修会などのZoomによって行われた研修に参加したり、校内研究会でもZoomを活用し、滋賀県立大学の木村裕先生に「教育評価を意識したESDの実践づくりの方向性」に関する講演を行っていただいたりした。授業でのロイロ・ノートの活用に向けても、夏季から計3回職員研修を行った。

II ESDを通して育成を目指す「構成概念」と 「能力・態度」の学年別重点化

今年度は、ESDを通して育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を学年別に重点化を図り、1年間を通しての変容を探った。

学年	構成概念	能力・態度
1年生	I 多様性 多様性を尊重する態度	⑦(参加) 進んで参加する態度
2年生	II 有限性 ものを大切にする態度	④(伝達) コミュニケーションを行う力
3年生	V 連帯性 互いに連携・協力する態度	⑤(協力) 他者と協力する態度 ③(関連) つながりを尊重する態度
4年生	II 相互性 つながりやかわりを大切にする態度	②(多面) 多面的、総合的に考える力
5年生	VI 責任性 責任と義務を自覚し、自ら進んで行動する態度	①(批判) 批判的に考える力
6年生	IV 公平性 公正・公平に努める態度	②(未来) 未来像を予測して計画を立てる力

▲「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点

例えば、第1学年では、ESDで育成を目指す「構成概念」【多様性】と「能力・態度」【⑦《参加》進んで参加する態度】の重点化を図り、授業研究やESDの教材開発に取り組んだ。学級活動(食育)「はしイーナちゃんになろう」では、世界で使う食器について知ることを入口とし、食事のマナーや上手な箸の持ち方を学んだ。一人ひとりが箸を持ち、歌に合わせて箸を動かしたり、実際に食材を箸で掴んだりと意欲的に学びに向かうことができた。また、栄養職員の専門性を生かして、TTで授業を行ったことで、より質の高い学びになった。



▲ 第1学年 学級活動(食育)
「はしイーナちゃんになろう」

第6学年では、「構成概念」【公平性】と「能力・態度」【②《未来》未来像を予測して計画を立てる力】の重点化を図った。理科「自然とともに生きる」では、構成概念【相互性】も取り入れ、本校の学区にある梅田川的环境と自分たちの暮らしが、生物や環境にどのような影響を与えたり、与えられたりしているのかを相互的に考えようとした。梅田川は、総合的な学習の時間「我がまちふるさと 三保」でも生物調査や自然の写真を撮影する活動を行い、梅田川の緑区遺産への登録を目指している。未来に残していきたいと強く思う場所についての学習ということで、自分事として捉えて学んだり、考えを深めようとしたりする姿が見られた。



▲第6学年 理科「自然とともに生きる」

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

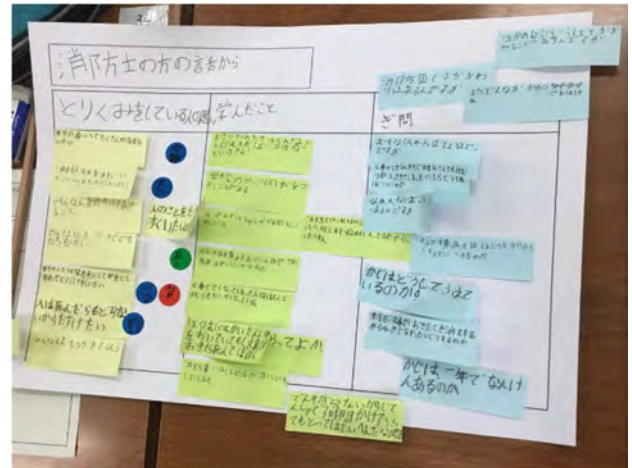
今年度から、授業における児童の思考を「見える化」するために、積極的に思考ツールを取り入れてきた。

第4学年の総合的な学習の時間「だれもが安心・安全 三保のまち」では、これまでに学習してきた内容を整理するために、KWLやPMI、フィッシュボーンといったシンキングツールを活用した授業を行った。

三保のまちを一つの視点で捉えるのではなく、「交通」「防災」「防犯」「福祉」の4つの視点から考え、それらが互いにつながりあって安心・安全なまちが実現されていることに気付くようにするために、シンキングツールを活用

し、互いに話し合いながら学びを整理できるように授業を展開した。

今年度は紙やホワイトボードを活用して、思考ツールを取り入れてきたが、今後はロイロ・ノートのシンキングツールを活用して、児童の思考の視覚化を図っていきたい。



▲第4学年 総合的な学習の時間

「だれもが 安心・安全 三保のまち」

4 ESDによって引き出すことができた価値

(evaluation=評価)

本校はESD研究を始めて9年目となるが、常に新しいものを求めて、研究・研鑽に努めてきた。今年度も、「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点化をはじめ、新たな形での校内授業研究会やESD教材開発、ESDカレンダーや評価規準の見直しを行ってきた。

そういった研究を重ねてきたことにより、生活科や総合的な学習の時間を中心とした学習を通して、豊かな緑があふれ、温かく学びを応援してくださる地域の方々に恵まれた「三保のまち」にたくさん触れ、これからも自分たちのまちを大切にしようとする気持ちが高まった。また、SDGsをきっかけとし、世界で起きている出来事への関心が高まり、自分事として考え実行しようとする姿勢が見られるようになってきている。

今後も、指導方法の一層の工夫や改善を図るとともに、「ESDの指導と評価」についてさらに研究を深めていきたい。

6 横浜市立羽沢小学校

学校教育目標

笑顔いっぱい(E) すこやかいっぱい(S) 大好きはざわの人とまち(D)

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

- 最後まで取り組む力 (主体性)
- 他者に働きかけて解決策を実行する力
(進んで参加する態度)
- 自分の考えをもちながら他者の考えをしっかりと聞く力 (多様な他者と協力)
- 地域の人たちに働きかけようとする力
(持続可能な地域社会)

今年度も、環境・健康・福祉・食育等、現代的な課題を整理し、関連するSDGsやESDの構成概念、「教科横断的な学習」を意識したり、地域人材の活用を積極的にしたりしながら、生活科、総合的な学習の時間を核にして、課題解決型の学習を進めた。

2 SDGs達成の担い手育成(ESD)の 視点で取り組んだこと

「自ら考え 学び続ける子の育成」をテーマに、地域の材を生かしながら生活科や「はざわ」(総合的な学習)の時間において児童が地域社会と豊かに関わりながら「コミュニケーション」や「つながり」を重視した学習に取り組んだ。

3年「羽沢の畑で、育てたい! 作りたい!!」

「食べたい!!! ~豆腐の巻~」

関連SDGs 「飢餓をゼロに」「つくる責任 使う責任」
構成概念「相互性」(人を取り巻く環境に関する概念)

子どもたちは「農業を体験したい」「自分たちで育てた物で何かを作りたい」という思いをもっていった。どのような野菜を育てたいか話し合うと、種蒔きや収穫等の時期が話題となった。いくつかの候補が上がるなか、さまざまな加工方法がある大豆を選んだ。そこから、自分たちが育てている津久井在来大豆で豆腐作りをされている豆腐屋さんにつながった。

プロが作った豆腐の試食で味や食感のよさに驚いた経験から、自分たちで話し合い、協力し合っ
て育てた大豆の豆腐作りを成功させることを目指し、くり返し豆腐作りにチャレンジした。



4年「伝えよう! はまみらいの魅力」

「広めよう! ありがとうの輪」

関連SDGs 「つくる責任 使う責任」「陸の豊かさを守ろう」

構成概念「連携性」(人の意思や行動に関する概念)

きれいに咲く、はまみらいの花を見て、「自分たちも育ててみたい」という思いをもち、本活動がスタートした。はまみらいの苗を手に入れるにはどうしたらよいのか調べ、ローズプロジェクトの方とZOOMで交流し、苗をいただくことができた。ローズプロジェクトの方と関わることを通して、はまみらいを大切にしているローズプロジェクトの方の思いに気付き、自分たちにもできることはないかと考えた。花壇に植え替えたり、知ってもらふ方法を考えたりする中で、一人ひとりのはまみらいに対する思いが高まり、はまみらいの魅力、ピンクのバラの花言葉である「ありがとうを伝える」というよさを広めたいと活動している。



7 横浜市立日枝小学校

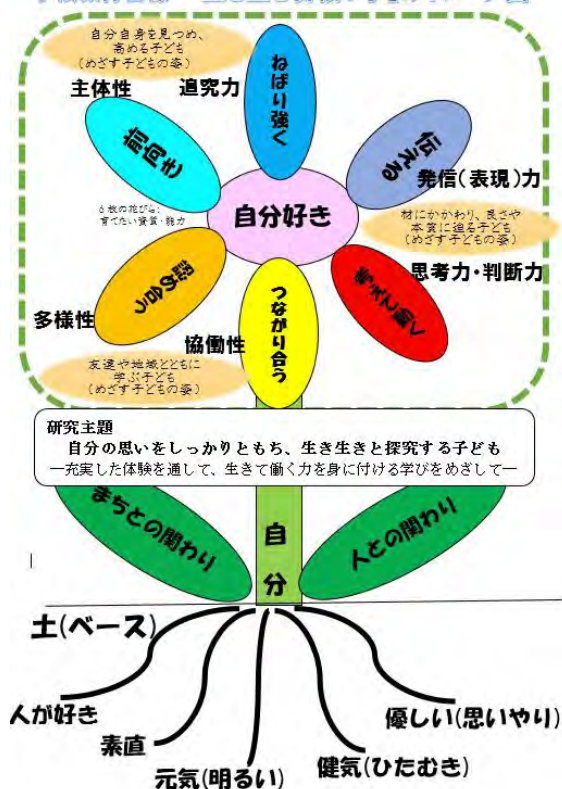
学校教育目標

生き生き日枝っ子

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

学校教育目標である「生き生き日枝っ子」の具現化を目指し、自分たちが生活している学校やまち等を中心に日々気づき、課題をもったり感動したりする中で、どうしたらよりよくなるかを判断し、「解」を見つけていくことができる「生きる力」の育成を図っている。「生き生き日枝っ子」をより具体的にイメージできるように、全教職員で「生き生き日枝っ子」の姿について話し合った。全教職員が「土」となり、子どもたちのもつ潜在的な能力を耕していくことで、種から「花」となる子どもたちが伸び伸びと成長し、6つの力「粘り強く」「伝える」「考えて動く」「つながり合う」「認め合う」「前向き」を身に付けていくことができると全教職員で確認した。これらの力を高め、また相互に関連させながら働かせることによって、子どもたちに将来生きて働く力が身に付き、予測困難と言われるこれからの時代を強く、幸せに生き抜く力になるのではないかと考えた。

学校教育目標「生き生き日枝っ子」のイメージ図



2 SDGs達成の担い手育成 (ESD) の視点で 取り組んだこと

ESD (SDGs) という視点をもって、学校教育目標「生き生き日枝っ子」を教職員のみならず、一人ひとりの子どもが共有し、自尊意識を高める取組を続けている。

【生活・総合】

年間を通して子どもが問いを立てながら問題解決学習に取り組み、学校周辺を流れる河川の調査、公園の環境整備、古着のリユース、昔遊び等を通して、学習を実践してきている。特に今年はコロナ渦においてもお互いをエンパワメントし合う姿が多くみられた。

2年4組：「日枝っ子アクアパラダイスをつくらう！」単元目標では、ふれあえる日枝っ子アクアパラダイスを作る活動を通して、学校の近くにあるアクアパークの環境や生き物に向き合い、捕まえ方や育て方、触れ合い方を工夫することで、生き物には命があり、それぞれの知恵を働かせて育てていることに気づき、川や海、アクアパークの自然に親しみ、どの生き物も大切にしようとするとともに、環境保全に取り組む。



5年1組：「地球に PEACE☆HIECCO バッグプロジェクト」単元目標では、古着を活用して制作したエコバッグを広げる活動を通して、環境問題に関心を持ち、古着を活用しながら身近な環境をよりよくしていきたいという思いをもつことができる。また、古着を活用しながら環境に配慮して活動する団体や企業と関わることを通して、その思いや願いに気づき、大切に使い続けるとともに、日枝のまちの一員として、日枝のまちの人に喜んでもらえる工夫・取組を考え、行動しようとする。



【SDGsは学校図書館から】

学校図書館司書が中心となり、学校図書館内にSDGsコーナーを設置。意識的に本を選べるようにしている。



【この指とまれプロジェクト】

教職員が生き生きと働くことで、生き生きとした子どもが育まれる。事務職員が中心となり、企業や施設と連携し、様々なプロジェクトの活動が行われている。

- ・日枝小オンラインプロジェクト
- ・働く場改革プロジェクト
- ・障害者福祉施設×日枝小学校協働プロジェクト
- ・職員室⇄教室移動バッグ製作プロジェクト 等



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

【体験の充実による行動の変化】

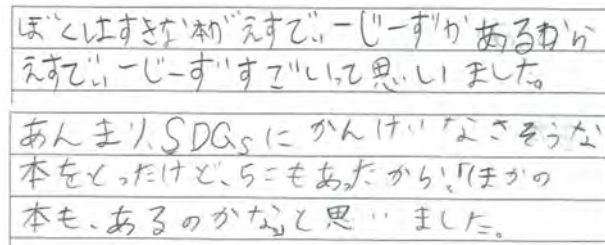
材に対して体験を通してかかわっていくことで、その対象への知識・理解が深まり、問題を自分事としてとらえ、自ら解決していくことができる。2年4組「日枝っ子アクアパラダイスをつくろう！」では、子どもたち一人ひとりが川の汽水域にいる海の生き物を飼育することで、その生き物に対する知識や理解が深まっている。塩分濃度を調べたり、住処を作ったりして、生き物の問題に向き合いながら、試行錯誤しながらよりよい環境を考えている。

【振り返り】

自らの気づきや感じたことを文章に表し、蓄積していくことで、自らの思考の深まりを実感し、次の活動につなげていくことができる。また、子どもの気づきを視覚化し、今後の計画や支援を子ども一人ひとりの実態に合わせて組み

立てていくことができる。

2年2組「SDGsをさがせ！」実践後の振り返り



【SDGsサーベイ】

SDGsにまつわる50の質問に答えることを通して、SDGsに関わる関心・意欲・行動を分析することができる。個人ごとに結果を蓄積し、項目ごとの変化を見ることで、自身の変容を感じることができる。また、学年ごとの結果を比較することで、年齢に応じた意識の変化や違いを考察することができる。

コロナウイルスの影響により、年度初めに調査をすることができなかつたため、年度末に全学年で実施予定である。

二次元コードを貼付してあるので、皆さんの学校でもやってみてください。



4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

子どもたちが充実した体験をすることによって、一人ひとりがより強く思いや願い、疑問や課題をもち、体験を繰り返しながら協働して問題解決を図ることによって、子どもたちが伸び伸びと成長し、子どもたちに将来生きて働く力が身に付き、予測困難と言われるこれからの時代を強く、幸せに生き抜く力になるのではないかと考える。

何よりも子ども同士が励まし合い、支え合い、元気づけ合い、笑顔あふれる学校にしよとする姿が見られるようになったことが、大きな成果である。

8 横浜市立恩田小学校

学校教育目標

「自ら学びともに豊かな生活を創り出す子どもの育成」

～思いやり すすんで行動 だれとでも協力 恩田の子～

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

学校教育目標に深くつながるものとして、下記の資質・能力に重点をおいて様々な教育活動を進めている。

- ・多面的・総合的に考える力
- ・コミュニケーションを行う力
- ・他者と協働する態度
- ・つながりを尊重する態度
- ・進んで参加する態度

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

総合的な学習の時間・6年

【62ジャムセッション～^{きわみ}極～】

SDGs目標 ②地産地消！恩田の実
⑫みんなが笑顔になる活動

〈単元目標〉

さまざまな実を収穫し、恩田小学校における地産地消を実現する。「もったいないをなくそう」を合言葉に、収穫できる実の加工の仕方を追究する活動を通して、創意工夫する力や発想力を育み、困難な状況でも考え、行動し続けることができる、しなやかな強さ（心）を育てる。

ESD視点

〈構成概念〉 Ⅲ有限性 V連携性

Ⅲジャム作りを通して、食料や資源などには限りがあることを意識し、困ることなく食事をする事ができていることに感謝する心をもつとともに、不可逆的に社会が変化していることに気付く。

Vコロナの影響があることを受け入れ、この状況に応じて順応・調和し、互いに意見を持ち、連携・協力することで乗り越えていくことができるという実感をもった活動を進めた。

〈能力・態度〉 ③多面 ⑥関連

やりたいことをやればいいだけではなく、相手や目的、自分たちにできることとできないこと等を分析し、自分たちが取り組む「笑顔の活動」

とは何かを考えることを通して、自分が様々なものごととつながっていることを理解できるようにした。また、このコロナ禍の現況を受け入れ、どうすれば思いを実現させることができるのかと考え、学びに対する意味や価値を創造していくことができるように進めた。

具体的な活動

①6月の分散登校時に種まき（梅日記スタート）



②学年や技能実員さんの力を借りて（実践）



「コロナ禍でもこんなことができる！」と教師が楽しむ。

③収穫

収穫する活動をしている中で、他にも実のなる木が恩田小にはたくさんあることを発見。



④梅調べ

62メンバーの梅調べ



⑤いろいろな実でジャム作り

コロナ禍で学校では、調理ができず。子どもたちのアイデアで、自宅で作る。そのために、国語「私たちにできること」で保護者の方へ提案文書をつくった。



⑥コロナ禍での発信方法（実をPRする活動）

持続可能性、発信力を軸にして発信方法について考えた。

持続可能→ステンドグラス
発信力→動画 orTV 放送

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

「SDG s 17の目標につながる活動についてのアンケート」の実施

本校が重点研究として、ESDの視点をもった生活科・『横浜の時間』の学び作りを始めて、今年度で3年目に入る。また、昨年に引き続き今年度も、児童の委員会活動をSDG s 17の目標とつなげて展開してきた。

昨年度は、そういった活動を進めてきたことで児童の中にどのような変容があったのかを探るため、「SDG s 17の目標につながる活動についてのアンケート」を全校児童に実施した。

今年度も昨年度と同じアンケートを実施し、更に取組が進んだことにより児童がどのように変容してきたかを探ってみた。

SDG s 17の目標につながる活動についてのアンケート

①: SDG s 17の目標について知っていますか?

②: 学校の中に、SDG sのマークがはってあるのを知っていますか?

3年生以上では全員知っていた。17の目標の意味まで知っているのは高学年にいくほど多かった。(高学年での理解は8割)

③: 学校の中に、SDG sのマークがはってあることで、自分の気持ちや行動で変化したことはありますか?

水を大切に使う、ルールを守る、残さず食べるなど、学年問わず多くの回答があ

った。

④: 授業で、SDG sに関する学習をしたことがありますか。

⑤: それはどんな授業でしたか。

⑥: その学習でうれしかったことや楽しかったこと、できるようになったことは何ですか。

主に生活科・『横浜の時間』で全クラスがSDG sに関わる学習を行った。うれしかったこととしては、地域の人のつながりが深まったことや取組を家族に褒めてもらえたこと、色々なことを知っただけでなく、実践できたことなどがあ

⑦: その学習をしたことで、自分の気持ちや行動で変化したことはありますか。

野菜の学習をした低学年では野菜を食べたい気持ちが強くなったり、地域とのつながりが深まった高学年ではあいさつを進んで行うようになったりと、そのクラスの活動内容に深く関係した行動の変容が見られた。

⑧: すべての人々にとってより良い世界をつくるため、今の自分に出来ることで、何かやってみたいことや興味のあることはありますか。

低学年では、「もっとたくさん勉強したい」「生き物を大切にしたい」など児童にとって身近な内容が多かったが、高学年に進むにつれ、「ボランティア活動をやってみたい」「プラスチックをへらして海をきれいにしたい」などより広い視点での回答が増えていた。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

ESDの取組を行ってきたことで、児童が、世界には様々な課題があること、世界中の人たちが協力してその課題を解決しようとしていることを知ることができたということが、まずは大きな価値の一つだと思う。さらに、生活科・『横浜の時間』を中心としたESDに関わる学習活動に取り組むことで、自分一人の取組でも、世界が抱えている課題を解決するきっかけになるということを実感できたことも、価値の一つだと考える。アンケートの結果からも、低学年から高学年へと進むにつれ、自分の生活に関わる身近な視点から、地域や社会へつながる広い視点で物事を考え、実践しようとする姿勢が見えてきた。他者とのつながり、他者への思いをもって日々の行動を選択していくことができる子どもたちが、これからの世界をより良いものに変えていってくれることを期待している。

9 横浜市立荏田西小学校

学校教育目標

◇心豊かにかかわり、互いに高め合いながら学び続ける子に育てます◇

1 学校教育目標とESDを通して育成したい

資質・能力とのつながり

現代社会における課題の解決に向けて、地域の人や友達と協力しながら、社会に主体的に働きかけようとする子どもの育成。

低 学 年	○感じたことを言葉にする力【言語能力】 ○家族や友人を愛する気持ち【グローバルの中で生きる力】 ○身近な事象に積極的に関わろうとする態度 【持続可能な社会の創造に貢献する力】
中 学 年	○互いの考えの違いに気付き、自分の考えを伝える力【言語能力】 ○他者の考えや思いに対する受容性や協調性【グローバルの中で生きる力】 ○自然や文化に感動し、思いや考えを表現する力 【持続可能な社会の創造に貢献する力】
高 学 年	○自分の考えを深化させ、他者に的確に分かりやすく伝える力【言語能力】 ○人々と協働・協調するコラボレーションする力【グローバルの中で生きる力】 ○リーダーシップを発揮し、考えを出し合って新提案する力 【持続可能な社会の創造に貢献する力】

2 SDGs 達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

◎SDGs の考えを教職員で共有

⇒委員会活動や、授業づくりの中で SDGs の視点を入れていくことで、「すべての人に」というテーマを子どもに伝えることができた。

◎チーム学年経営、一部教科担任制の導入

⇒教材研究の時間を確保し、分かりやすい授業づくりの実践。また、複数の目で指導することで様々な児童の実態に柔軟に合わせていくことができた。

◎『特別の教科 道徳』の重点研究

⇒「自分を認める心、相手を認める心の育成」をテーマに自分も他者も大切にしようとする態度の育成を図った。

◎総合的な学習の時間と ESD

第6学年では、総合的な学習の時間で、難民に関する学習を行った。難民の学習を通して、世界に目を向け、自分たちにできることを考え、解決策を提案する力の育成を目指した。まずは、ユニクロの方に出前授業を依頼し、難民について理解を深めた。出前授業をきっかけに、難民について

情報を収集し、疑問に思ったことを解決するために国連の UNHCR の方にも授業を依頼し、学習を深めていった。学習を通して、自分たちにも難民の為にできる支援を考え、実践することができた。例えば、難民に送る服を回収することを宣伝するために、自分たちで全校配付する手紙やポスターを作成したり、テレビ朝会や各クラスにも呼びかけたりすることができた。服がたくさん回収できたことで、子どもたちは、自分たちでも社会の課題解決に関わることができると感じることができた。



＜各クラスに宣伝の様子＞



＜UNHCR の方による出前授業の様子＞



＜回収した服＞

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法 ＜自己評価アンケート＞

本校で目指す資質・能力に沿って、児童自らが評価できるアンケートを作成した。今年度は、中・高学年を対象とし、前期（今年度7月）・後期（12月）の2回行うことで変容を視覚化した。



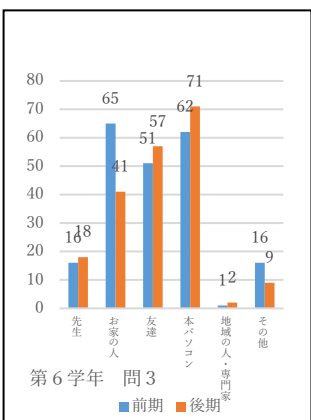
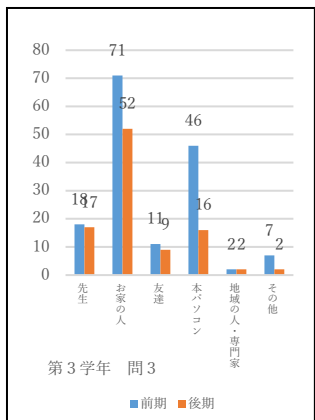
図1 高学年アンケート



図2 中学年アンケート

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本年度、前期と後期にアンケートを実施し、最も大きかった変容や課題点について焦点を当てて記述する。アンケートの問3は「課題を解決するために、どのような方法で学習に取り組みましたか」という質問である。第3学年では、「お家の人・先生」が多く、ESDが目指している「自己解決の力」が乏しいことが分かった。しかし、学年が上がるにつれ本やパソコンという意見が多くなった。第6学年では、コロナ禍でも、「友達に相談した」と答えた人が多かった。様々な人の意見を取り入れ、自分の課題を解決していきたいという意欲をもった児童の姿がアンケート分析から分かった。



また、問8は「人とかがかり合って、活動することに、どんなよさがあると思いますか。」という自由記述質問だった。第3学年では、前期では、「友達になれ、面白くなる。」などの言葉が多かった。しかし、後期では、言葉が具体的になり、「仲が深まる・協力できる・気持ちを共有できる」などの言葉に変わり、人との関わりが自分や友達を成長させることを理解した結果になった。そのほかに、「充実感」や「地域の人」という言葉も出てきて、地域に関わることへの意識も高まってきたと考える。

◎コロナウイルス感染症の拡大によって学校で考えたこと・新しい価値

⇒今年度予定していた委員会やクラブ活動を全て継続するのは難しい状況になった。継続できる活動とできない活動に分け、新規の活動を考えた。委員会では、集会委員会となかよし委員会の活動ができないため、新たにボランティア委員会と校内交流委員会を新設した。交流が難しい委員会は掲示を活用して密にならないような活動を行っている。継続して行っている委員会でも交流を行う委員会は、できる活動を探して行っている。できないことが増えたが、新しい活動が増え、児童も今までの活動を工夫して行えないか考えるようになった。できないからやらないではなく、どのようにしたらできるようになるか思考を変えて活動を行っている。

<今後の展望>

様々な問題を子どもたち自身が自らの問題として主体的に取り組むことができるため、課題設定の機会を生活科や総合的な学習の時間だけではなく、各教科・学校生活の中で意識的に取り組んでいく必要を感じる。

また、問題解決につながる新たな価値観や行動が変容していくためには、地域、専門家など「人」とのつながりを重視し、生き方に学び、視野や行動を広げていく必要がある。

情報を集め発信してだけでなく、コミュニケーション能力を高め、人と出会い、様々な価値観や考え方、生き方に触れることにより、多様な見方・考え方を身に付けていけるようにしていきたい。

【4年生】

総合的な学習の時間

それぞれの開発目標について知ろう。

社会 **算数**

社会科:「ごみはどこへ」

- ・未来像を予測して計画を立てる力
- ・多面的・総合的に考える力

算数科:「面積のはかり方と表し方」

- ・コミュニケーションを行う力
- ・他者と協力する態度

総合的な学習の時間

自分たちの学校の課題を明らかにしよう。

- ・批判的に考える力
- ・進んで参加する態度

各教科の学習において得た知識を関連付けたり、技能を活用したりして、身近に潜んでいる課題の解決に向けて協働的・探究的に学習する。

【5年生】

総合的な学習の時間

「SDGsってどのようなものだろう。」

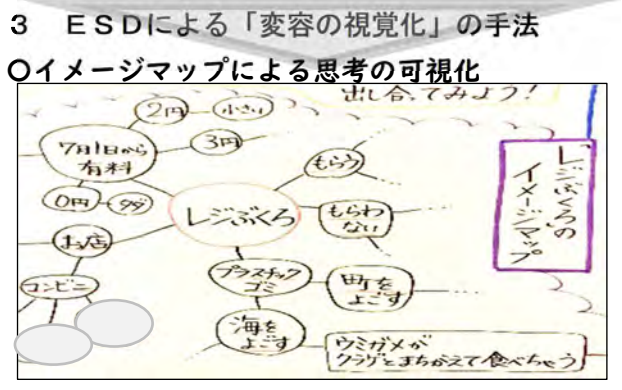
→総合的な学習の時間と国語の指導事項を意図的につなげる。

【国語】

- 統計資料を根拠に、意見文を書く
- 報告する文章を書く
- 身の回りの問題を解決するために話し合う
- 提案するスピーチを行う

社会

→日本の産業の学習にSDGsを位置づけて学習を進める。



○探究の過程と活動のゴールを明確にした学習

○SDGsの現状についてインターネットや本から統計資料を探し、調べて分かったことを意見文にまとめる。(総合・国語)

↓

○SDGsの達成状況について、身近な人や近隣のお店にアンケートやインタビュー調査をし、報告書にまとめる。(総合・国語)

↓

○SDGsを達成するための提案をする。(総合・国語)

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

- ・SDGsの視点を子どもが獲得することで、実生活を見直し、学んだことを生活に生かそうとする態度の涵養につながった。
- ・総合的な学習の時間だけでなく、国語科や社会科、算数科の学習などにおいても、ESDの構成概念や育てたい資質・能力、SDGsを柱にして単元構成することで、主体的に学習に取り組み、学びを深めることにつながった。

11 横浜市立南本宿小学校 学校教育目標

南本小の子 ～私たちがともに学ぶ、「緑豊かなこのまち」の学校の子どもたちを～
ともに明日をつくる子 ～つながりあう「自分たち」の思いと力で、明日の社会を変えていけると信じ、～
楽しみ学び続ける子 ～どんな時でも前向きに、楽しみながら学び続け、生き抜いていく人へと育みます～

1 学校教育目標とESDを通して育成したい

資質・能力とのつながり

本校では、学校教育目標を実現するために、教育課程全体で育成を目指す資質・能力として、「自分づくりに関する力」と「持続可能な社会の創造に貢献する力」を位置付けている。

また、小中ブロック9年間で育てる子ども像である「主体的に行動し、自ら学び、互いに高め合うことのできる子ども」を実現するための本校卒業時の姿として「周りの人々や環境に積極的に関わり、持続可能な社会のために自分の考えを進んで表現できる子ども」を設定した。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

<全校の取組>

◇年間指導計画の作成

本校では、ESDの視点の獲得のために、低・中・高学年ごとの目標を設定し、その達成のための具体的な資質・能力を各教科・領域の学習に紐付け、系統的に各学年の年間指導計画を作成している。

◇南本フェスティバル2020

恒例の学校行事である教育水田活動の収穫祭および振り返りの会にあたるフェスティバルを12月に行った。これは例年、何度も通う教育水田と周囲の環境について振り返り、自分たちが育てたもち米について食べることで、実体験を伴う深い学びをする機会となってきた。

しかし今年度は、実際に教育水田に通うことなく一年を終えるという状況の中、各学年で「持続可能な教育水田活動」をテーマにして話し合った。低学年では、教育水田とその周囲の生き物との関係を知り、里山に棲む生き物にと

って田んぼが重要な役割を果たしていることを理解した。また、中学年では、SDGsの17項目について学び、教育水田活動とどのようにつながっているかを考え、その価値を改めて理解した。高学年では、休耕という事態を経たからこそ、自分事として、教育水田活動における課題や、来年度以降も続けられる現実的な方法について話し合った。

<学年や委員会での取組>

◇ニュースを題材とした教科学習（4,5,6年）

本校では、ESDの力を育てるための手立ての一つとして、「日常とのブリッジング」を取り入れ、様々な教科で実践している。算数を例に挙げれば、4年ではフードロスとローリングストックを題材とした概数の学習、5年では食品配送システムの新型コロナ対応を題材とした割合の学習、6年では海洋プラスチック問題とレジ袋有料化を題材とした、資料の読み取りの学習など、ニュースで扱われている社会問題を教科の学習を使って考える時間を設定した。

◇SDGs委員会の活動の充実

昨年度発足したSDGs委員会では、母体となった水田美化委員会の活動を引き継ぎ、校内の環境整備を中心としていたが、今年度は、SDGsの17の目標の各項目を朝会で紹介したり、校内での取組がどの目標につながっているかを考え、それを全校児童に伝えたりと、子どもが主体となってSDGsの推進を実践した。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

◇ワークシートの活用

フェスティバルの学習会では、各学年に応じたワークシートを作成して学習に用いた。中学

年では、昨年度までは伝統行事として取り組んできた水田活動に、生物と水田とのつながりに対する言及する姿や、実際に体験しながら学べることを質の高い教育として捉えるなど、今まで取り組んできた活動をSDGsの観点でとらえ直そうという変容が見られた。高学年では、従来の伝統的な手作業の価値を考えるとともに、持続可能性を考えると、指導者の高齢化や、人を集められない状況に対応するには、機械化する部分も必要なのではないかという意見も出て、両極端な意見ではなく、どちらの考えも大切にしながら、水田活動をよりよいものにしていこうという思いが見取れた。

【学習問題の設定】

教科の学習問題として、SDGsを取り入れることで、教科における評価とESDの視点からの評価をつなげることができた。算数では、割合や概数などの教科のねらいを達成した上で、その概念を使って社会の諸問題についての意見をもてるかという点からも、子どもたちにESDの力が育成できているかを確認できた。

【家庭で考える機会の提供】

今年度より、学校評価アンケートに「持続可能な社会の創造に貢献する力の育成が図れていると思うか」という項目を入れた。数値化することで、保護者や児童のSDGsへの関心を視覚化することができた。

	肯定的回答	否定的回答
保護者	86.2%	12.6%
児童	89.4%	10.6%

【行動の比較】

子どもたちの学校での行動や家庭学習などから、環境に対して言及する姿や、自分たちの行動と環境への影響を考える姿が見られた。SDGsを学習で多面的に扱ったことによって、子どもたちの意識の変容が確認できる。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

【学習と日常のブリッジング】

身近なニュースを教材として扱うことで、自分たちが学んでいることが、社会問題につながると感じることができ、主体的に学ぼうとする姿勢の育成につながっている。

本校で実施しているアンケートの分析からも、日常における社会や科学の事象への関心が高まっていることが分かった。また、「親子で学ぶわくわく教室」等の機会を通して、学校で学んだことを家庭で話題にあげ、身近にできることに家族で挑戦しているという話も聞かれた。

【ICT機器の活用】

今年度は、本校がESDの柱として考えていた教育水田活動が、従来の形でできなかったため、新たな形での取組を実施する必要性があった。そこで、今まで有効活用できていなかった校内のミニ水田を使って、例年の作業と今年の作業を比較しながら、稲の生長を紹介できる動画を作成した。

タブレットを使って記録を取り、分かりやすく伝えるための動画の工夫を考えるなど、ICT機器を活用し、できることを子どもの意見を引き出しながら考えることで、校内の水田に新たな価値を見出すことができた。

また、Google classroomに学習した内容を投稿することで、家庭で自分の学習の内容を振り返ることもでき、自己調整学習への土台作りを意識したほか、教師にとっては、学びの積み重ねや考えの変容を見取り、評価に生かすこともできている。

12 横浜市立みなとみらい本町小学校

学校教育目標

「みな」と「みらい」を創る子

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

学区は西区・中区にまたがっており、西区みなとみらい地区の高層マンション群と中区北仲通地区の高層マンションの居住者が通学してくる。10年暫定の学校であるが、みなとみらい地区の特徴である経済・賑わいの中心地としての多様な企業や施設との連携により、「持続可能な社会の担い手を育む小学校」を目指している。

学校教育目標の策定にあたり、ESDの構成概念やESDの視点に立った学習指導で重視する資質・能力の考え方を取り入れている。そして、児童の実態も加味し、本校が目指す5つの資質・能力（「問いを見いだして学び続ける」・「多様性を認められる」・「多面的・多角的に物事を捉える」・「まことに愛着をもつ」・「豊かな心をもつ」）にまとめ、これらを総括するものとして「みな（皆）とみらい（未来）を創る子」掲げている。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の 視点で取り組んだこと

持続可能な社会の担い手を育てるための「カリキュラム・マネジメント」に取り組む。そのために、ロジックモデルを用いたプログラム評価に今年度も引き続き取り組んでいく。（詳細については、2019年度横浜市ESD推進コンソーシアム実践報告書を参照）

昨年度は、包括的と言われるESD/SDGsをロジックモデルにおいて本校で取り組むESDの可視化をし、ESD/SDGsを教育活動全般に紐づけるとともに、より具体的な活動（資質・能力）を明らかにした指標を作成した。そして、本校の特色でもある豊かな外部リソースを活用した教育活動を進め、教科横断的な学習（教科ベースから能力ベースへ）で推進する課題解決型の学習を進めた。

今年度は、ロジックモデルで可視化した本校が目指す資質能力の育成のために、教科横断的な学習をさらに進めたい。技術員・養護教諭と連携したり特活や行事と関連づけたりして、学校全体で取り組むホールスクール・アプローチを目指す。

また、新型コロナウイルスの休校があっても、学びが止まらないよう、ICTを活用した学びを推進してきた。できないことを考えるのではなく、できることを創り上げる楽しさを追求している。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

ESDを柱に据えた学校づくりを進める上で、大きな課題のひとつが、児童・保護者・地域・外部協力者、そして教職員といった学校に関わる多様な関係者（ステークホルダー）の間でのESDについての共通理解であった。ESDは、多様な領域や課題、アプローチ（扱い方）があり、どのような資質・能力を通して、どのような目標を目指すのか、とても汎用的であるだけに分かりづらいとも言われ続けて来ている。それらを整理し、可視化し、学びの主体である子どもをはじめ様々な関係者で共有できるものが必要だと考え、東洋大学教授米原あき先生のご指導をいただき、ロジックモデルの策定とプログラム評価の実践に取り組んできた。

（1）ロジックモデルに基づいた教育活動の推進

学級や学年の活動だけでなく、重点的な取り組みとして「ホールスクール・アプローチ」を実践する。学校全体の取組や校務分掌に即した取組みを推進していく。

（2）活動の前後でのアンケートの実施

活動を改善するのに必要な情報を収集するために、活動の前後でアンケートを実施し、その

活動の達成度合いやその変化を測る。その際、アンケート項目は、ロジックモデルの中のアウトカムや指針と紐づける。

(3) アンケート結果の分析

「どうすればもっとよいプログラムになるか」を具体的に検討するために、アンケートの分析をすすめる。テキストマイニング等を用いて、変化の可視化を行う。

(4) ロジックモデルの加筆修正

来年度の計画を検討し、ロジックモデルの加筆修正を行う。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

(1) SDGsに関連したカリキュラムデザイン

教科横断的な学習をするために、生活科や総合的な学習の時間を活用した取組を計画する。計画を立てる時にはそれぞれの学級の実態やどのような所に関心が集まっているかなどを相談し合った。担任以外の教員からのアイデアが加わることで、カリキュラムが広がり、柔軟な児童の取組への支援が考えられた。

○身近な公園の環境に着目したカリキュラム (昨年度実践)

担任は身近にある公園の利用が少ないことに着目した。この公園は磯遊びができることから、自然との関わりを感じることができる。さらに、よりよい公園にしていく活動をしている方も連携をすることができた。SDGsの目標でもある「海の豊かさを守ろう」にも関わりが深いことから、学習で取り上げる材として考えた。

4年1組 総合的な学習の時間 の活動計画案 【8月版】 MM本校小

活動名	見つけてみよう！ 環境の豊かさを (仮)	SDGsとの関連	1. 貧困 2. 飢餓 3. 健康と福祉 4. 質の高い教育をみんなに 5. 働きがいと経済成長 6. 社会を元気にしよう 7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに 8. 住み続けられるまちづくりを 9. 産業とイノベーションに力をかかろう 10. 人や国を超えて公正な世界を築こう 11. 住み続けられるまちづくりを 12. つるまき 13. 気候変動に具体的な対策を 14. 海の豊かさを守ろう 15. 陸の豊かさも守ろう 16. 公正な裁判と強固な法の支配 17. パートナーシップで目標を達成しよう
子どもが活動する理由	児童のマンションの目の前には海が広がっているが、海が「見るもの」になってしまっていないか。目の前の海には、多様な生き物が生息し、その環境を維持するために携わっている人や発信している人がいることを知らない。子どもたちは生き物が大好きである。海の豊かさを知り、子どもたちがその人たちに代わってできる人になってほしい。		
活動の特色	上野原自然観察会 まで出かける。		
外部機関 活動場所	・上野原自然観察会		
活動のイメージ			
現状～9月	多様な生き物がいることに気づき、活動の準備をもち、上野原自然観察会での調査～中止 ・調査を準備段階での、ゴミ拾い、ニゴリ ・高島水際線公園での、カニ取り ・磯遊び		
今後10～12月 その後1月～3月	観察報告に向けて、活動を始める ・水質、生き物の観察、ヘビのさそり、干潟の環境観察など ・観察地の干潟の状況 活動を紹介し、地域に発信する		

図3 担任が構想した年度初めの計画 (カリキュラム) ①

「高島水際線公園ってどこ？」から始まった活動。魚やエビ・カニなどの生き物が豊かに生息していること、景色がきれいな場所であること、という公園のよさにふれ、児童は「もっと多くの人によさを知ってもらいたい」「よさを守ってもらいたい」との思いを強くもった。



図4 高島水際線公園での活動

児童のマンションの目の前には海が広がっているが、海が「見るもの」になってしまっていないか。目の前の海には、多様な生き物が生息し、その環境を維持するために携わっている人や発信している人がいることを知らない。

子どもたちは生き物が大好きである。海の豊かさを知り、子どもたちがその人たちに代わってできる人になってほしい。

※図3の丸印内

ロジックとの関連を意識していくことで、持続可能な社会の担い手に必要な資質・能力がどのような場面で涵養されているのか、具体的にようになってきた。カリキュラムデザインに加えて、ESDをアンパッケージすることは、「古くて新しい教育様式へのシステムの転換」にもつながる方法だと考えられる。

13 横浜市立大門小学校

学校教育目標

大門大好き いい仲間 進んで学ぼう 元気な子

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

「地域の人・もの・ことを生かした活動を通して未来に目を向けられるようにする」という中期取組目標から「人とのつながりを通して豊かな人間関係力及び未来を創り上げる人間性」を育むことという ESD を通して育成したい資質・能力を設定した。地域の材を ESD の観点から見つめ直し、大門の地域という資源や特色を最大限生かす中で、「人とつながる 未来へつなげる 大門小」という ESD のテーマを掲げ、教職員や子ども、保護者、地域が輪となって活動を行っている。

2 SDGs 達成の担い手育成 (ESD) の視点で 取り組んだこと

○生活科及び総合的な学習の時間

SDGs の視点を取り入れながら生活科や総合的な学習の時間を「課題解決型の学習」となるように進めている。

事例としては、家で捨てるはずのものを集めて、遊びを工夫する2年生の取組、地域のお店を調べて、瀬谷観光パンフレット作りをして瀬谷の魅力を伝える3年生の取組、企業と連携して、使用済みの油を回収するなど、温暖化に対して自分のできることを考えた4年生の取組、海洋プラチックの問題について関心をもち、資源循環局の方の出前講座から身近な大門川に目を向けてごみ拾いをした5年生の取組等である。

また、コロナ禍における大門フェスティバル(生活・総合的な学習の時間の中間発表会)についても相手意識や活動目的、手段等を議論し、実行委員の児童とともに、新しいフェスティバルの形を創り上げた。

○大門小版 SDGs

代表委員会では、「大門小版 SDGs をつくろう」という活動を全校での取組とした。大門フェスティバル実行委員の児童が「SDGs について分から

ない」という低学年の声を受けとめ、分かりやすく身近にできることを実感できる SDGs を創ることを提案し、大門小学校版 SDGs を全校で作成することが決定した。各クラスが生活科や総合的な学習の時間を通して学んだ内容と関わりの深い SDGs について、自分たちが学校で実践できることを考えた。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

○振り返りカードによる子どもの変容の見取り

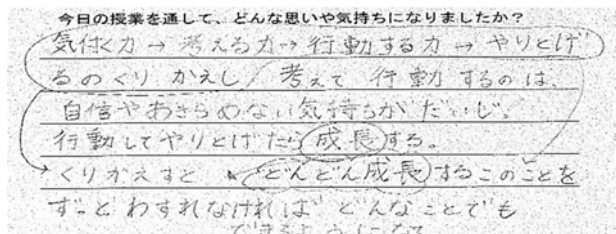
活動の後には振り返りを行い、振り返りカードから子どもの変容をみとり、分析した。3年「パンフレット作り」では、A児はパンフレット作りに対してはじめは意欲がなかった。しかし、実際にプロの方のお話やフェスティバルでの発表を通して「早く協力して作っていききたい」という気持ちに変わった。またB児は、活動を通して「互いの思いを認め合う力」がついたとメタ認知できている。

3年生から少しずつ、協働して問題解決しようとする力が身に付いてきている。

早くみんなと協力してパンフレットを作
くりたいです。みんなと協力する力がついたら
と思います。あと人に気持ちをつたえら
る力がついたらと思います。また、いままで気が
なかつた友だちのよいところや力を知れました。
おたがいに、力をサポートしあうことのできたと
思います。

【B児の振り返り】

4年生の温暖化に対する取組を行ったC児を見ると、活動前、「苦手なことにねばり強く取り組んでいる」や「新しい課題や方法にもチャレンジしている」というアンケート項目に対して「あまりそう思わない」と回答としている。しかし継続して活動を行う中で、C児に変容が見られた。振り返りから、あきらめずに粘り強く取り組む力や自分事としてとらえる力、行動する姿勢が見られるなど資質・能力に対する変容がうかがい知れる。活動ごとに丁寧に振り返りを行い、変容を価値づけることが大切であると感じた。



【C児の振り返り】

○児童アンケートの実施と分析

ESDによる変容を見とるために、本校で目指す資質・能力に沿って、児童自身が振り返られるアンケートを作成した。

4～6年生アンケート 年 組 名 前

あなたは、次の1から17に書いてあることについて、もっともよくあてはまるものに○をめぐりついでください。

	強く思う	思う	どちらでもない	あまり思う	そう思わない
1. 自分で決めて課題をつくり、自分から学習ののぞんでいる。	①	②	③	④	⑤
2. 苦手なことにも、ねばり強く取り組んでいる。	①	②	③	④	⑤
3. 友達の見解をよく聞き、友達の見解を受け入れたり、一緒に考えたりしている。	①	②	③	④	⑤
4. 地域の人は、自分たちのことをよく考えてくれている。	①	②	③	④	⑤
5. 学校のために自分にできることがあると思う。	①	②	③	④	⑤
6. 今の自分は新しい課題や方法にもチャレンジできると思う。	①	②	③	④	⑤
7. 学年のちがう人とも協力したり、かわりあったりすることは大切だと思う。	①	②	③	④	⑤
8. 世界の問題は、ぼく・わたしの生活にもえいさようすると思う。	①	②	③	④	⑤

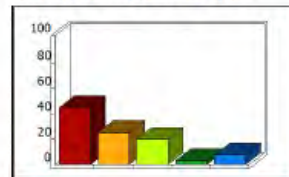
総合的な学習の時間の活動が本格的に始まる前と大門フェスティバルの後でアンケートを行い、総合的な学習の時間を中心としたESDの実践による児童の変容を見とることができた。

大きく変容が見られたのは、SDGsについての項目である。低学年は「SDGsのことをもっと知りたい」という質問、高学年は「SDGsの達成のために協力する責任がある」という質問に対して

どちらも「強くそう思う」が5%以上も増えている。これはSDGsについて自らできることを考えたり、実践してきたりした成果だと考える

【低学年11月初めアンケート結果】

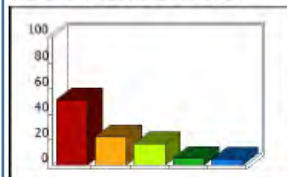
SDGsのことをもっと知りたい



回答	%
強く思う	44.61
そう思う	24.91
どちらとも...	20.07
あまり思わない	2.97
そう思わない	7.43

【低学年12月フェスティバル後のアンケート結果】

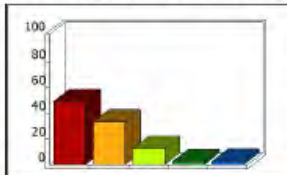
SDGsのことをもっと知りたい



回答	%
強く思う	51.31
そう思う	22.10
どちらとも...	16.85
あまり思わない	5.24
そう思わない	4.49

【高学年11月初めアンケート結果】

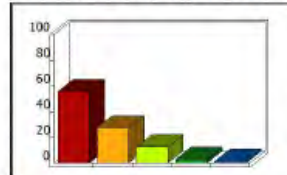
SDGsの達成のために協力する責任がある



回答	%
強く思う	49.13
そう思う	33.22
どちらとも...	12.46
あまり思わない	2.42
そう思わない	2.77

【高学年12月フェスティバル後のアンケート結果】

SDGsの達成のために協力する責任がある



回答	%
強く思う	55.75
そう思う	27.53
どちらとも...	12.54
あまり思わない	2.79
そう思わない	1.39

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

<児童アンケート結果から見えてきた価値>

- ・地域や世界の問題に関心をもつこと
- ・あきらめずに粘り強く取り組む力
- ・協働して問題解決しようとする力
- ・一つの問題に対して複数の意見や考え方があること気付くこと
- ・自分事としてとらえる力

継続したESDの教育活動によって、子どもたちの資質・能力に変容が表れてきていると感じている。これからも身近な問題を見つめたり、関心をもったりして、友達や地域の方とつながり、「今、自分たちにできること」を考え、未来へつなげていく取組を大切にしたい。

14 横浜市立中和田中学校

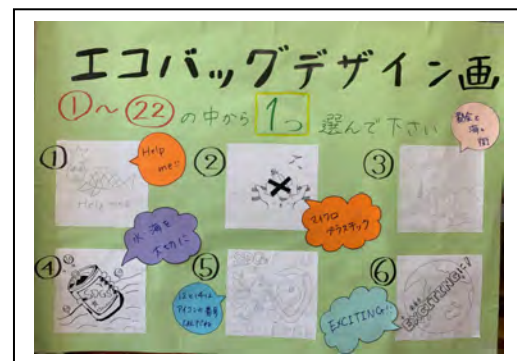
学校教育目標 『自ら学び、自他を大切にして、社会に貢献する生徒を育てます』

1 学校教育目標と ESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

具体的な課題の発見・探求・解決の過程で生徒自らが持続可能な社会づくりに関する価値観を身に付け、自らの意思を決定し、行動を変革していくことができるようにする



エコバッグづくりは保健委員会から全校生徒へ働きかけ、デザインを全校生徒に作成してもらい全校投票により1つに絞り、みんなが注目する活動にすることで、より今のライフスタイルを見つめなおす活動とすることができた。



2 SDGs達成の担い手育成 (ESD) の視点で 取り組んだこと

- 『つくる責任・つかう責任』（SDGs目標12）『海の豊かさを守ろう』（SDGs目標14）をテーマにゴミのゆくえ・買い物袋のゆくえの問題提起を行った。



- 校内に自動販売機が設置されたことを含めて、生徒たちが主体的に取り組める機会としてエコバッグづくりをした。



- エコバッグづくりをする中で、学校教育目標の社会に貢献する視点を踏まえ社会全体への持続可能な未来を意識した学びの一助にすることができた。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

○エコバッグづくりの段階として「バトンタッチ SDGs はじめてます 河川のSDGs (海のSDGs 続編)」を視聴した。



「海から完全にプラスチックごみをなくすためには元から断たなくてはダメだ。」という青年の映像を見て、同年代の子どもたちが、今の自分と比べて、今の自分には何ができるのだろうかということを考えるきっかけとなった。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

エコバッグ自体は、前から世の中にあるものだが、今回作製したエコバッグの素材がペットボトルからできていることは新しいことであり、時代の流れで今まで革や布で作られるものが鞆という概念が変わり、リサイクルの視点に意識が確実に転換した。



【投票箱と廊下に展示された各クラス作品】

時代が日々変わり流れていく中で、生徒自身が新しいものを見つけてみようという意識が生まれていることが見える。

エコバッグづくりは、生徒にとって身近なことから目を向けられるので、取り組みやすい内容だった。



【エコバッグデザインに選ばれた生徒】

SDGsは17の目標から成り立っていて、デザインを全校生徒が描くことで、その1つひとつのアイコンの内容に興味を持つことができた。また2030年までに達成という目標も理解し、デザインの中に盛り込むことができた。

SDGsとは何か、何を目指しているのか、持続可能な開発とはどういう意味なのか。まだ、生徒たちに伝えなければならないことはたくさんあるが、今回エコバッグづくりをしたことで、家に帰りおうちの人に話をすることで、自分ひとりでは思いつかなかった「できること」が見つかるかもしれない。また、SDGsについて話題が広がることで、社会や環境問題、身近なことへの興味や世界の人々に目を向けていけたら、次につながる一步となると感じた。

17の目標すべてを取り組もうとしても、それは難しい。今回の目標12と14に関連した何か1つでもつなげて取組をし、持続可能な発展につながるようにすればいい。

「できること」「できそうなこと」から、行動をすることを、今後もやっていきたい。

15 横浜市立西本郷中学校

学校教育目標

自ら挨拶、自ら判断、自ら行動、人とのつながりを大切にする思いやりある西本中生

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

予測困難な時代に向け、時代の変化を先取りし、持続可能な社会の創り手となることを意識し、自らできることを考え実践する力

「コミュニケーション能力」

「つながる力」

「自ら判断して行動する力」

「多様性の尊重」

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点 で

①難民への理解を深め、自分たちにもできることを考え、実行にうつす。

ステップ1 国連UNHCR出張授業

国連UNHCR協会、天沼耕平氏による出張授業を実施した。本来であれば、全校生徒を体育館に集めて講演をしてもらい予定を一クラスで講義した映像を情報配信システムを使って全クラスに同時配信するという方式を採用した。本校初の試みだったこともあり、多少不具合が生じたが、担任がクラスで講義するだけでは喚起することが難しい、難民の現在を知っている現場の人の声を直接聞くことにより生徒の興味関心を高めることになった。



ステップ2 ユニクロ「届けよう、服のチカラ」プロジェクト」への参加

コロナ禍で出張授業がためらわれたこともあり、ユニクロから送付してもらったDVDを各学年で一斉に視聴し、難民支援のために子ども服の古着を集める活動に参加することを全校生徒に周知した。

ステップ3 生徒会による古着回収活動開始

生徒会本部役員が集まり、どのようにプロジェクトをすすめるかを話し合った。古着回収期間は1ヵ月、朝の登校時間に回収ボックスを設置、生徒会本部役員が交代で声かけを行うことなどを決めた。事前に昼の放送でプロジェクトの開始をアナウンスすることとなった。

本校で、このプロジェクトに参加するのは始めてなので、古着がどのくらい集まるのかまったく見当がつかず、ユニクロから送られてきた古着回収用の段ボール10箱はとても多いように感じていたが、結果的には段ボール9箱、約600着程度の古着が集まった。例年だと、地域にも呼びかけ、大々的に古着回収をすることもできるそうだが、もし、そのような機会があれば地域の祭りの時、地域の店舗や会社を通じて古着回収プロジェクトへの参加をよびかけるなど、生徒主体で地域とのつながりをもつことも可能となる。今後とも続けていきたい活動である。また、このプロジェクトを通じて、生徒は遠い世界のできごとである難民問題を身近にとらえなおすことができた。



②横浜市の温暖化対策について理解を深め、学校で取り組めることを考え提案する。

ステップ1 横浜市温暖化対策統括本部の出張授業

グーグルの提供する温室効果ガス排出量可視化ツールEIE (Environmental Insights Explorer)を活用した授業を3年生全4クラスで実施した。横浜市温暖化対策統括本部課長の宮島弘樹さんを講師として、社会科の授業を2コマ利用し、1時間目は地球温暖化の概要やメカニズムを知り、2日目は横浜市として削減すべきところや、削減できる分野はどこにあるのかを考えるというテーマで講義してもらった。

一クラス10班に分かれ、1班に1台タブレット端末を配布し、EIEツールを活用し、横浜市ではどのくらい温暖化



効果ガスが排出されているのか、自動車などからの排出量はどうなっているのか、もし、建物の屋上に太陽光パネルを設置したら、どのくらい排出量が減るのかなどを確認した。授業の中では、排出量を減らすにはどうしたらよいのか、まず班で討議し発表し、その後は個人で質問、発表した。横浜市は人口が多いので、家庭からCO₂が排出される割合が他都市に比べて多いことを認識した。

ステップ2 学校で取り組める温暖化対策を考える

社会科の時間を使い、さらに学校で取り組める内容があるかを班で討議した。温暖化対策アクション、略して温対アクションを個人で考え、それを持ち寄り、班で討議して決定するという流れですすめた。出張授業の内容をふまえ、学校内の常

時点灯しているトイレなどの電気をセンサー式にすることや緑を育てるなどのアイデアがでた。

ステップ3 理科の授業で環境問題について調べる

理科の時間を使って、環境問題についてさらに詳しく調べることに。調べるテーマは8つ。

- ・水質汚濁
- ・エネルギー問題
- ・自動車の未来
- ・プラスチック問題
- ・オゾン層破壊
- ・森林破壊
- ・地球温暖化
- ・大気汚染



調べた内容を発表し、それに対して質問を受けさらに調べることで内容を深めるための中間発表を行い、これらの問題を解決するためにはどうしたらよいのか、解決するとSDGsのどのゴールに近づくのかを最終的には発表させる予定である。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

生徒による学校評価アンケートを実施した。「西本郷中学校はSDGsの取組に積極的である。」という内容の質問に対し、全校で8割近い生徒が、「そう思う」「大体思う」という回答を得た。SDGsの周知は進んだのではないかと考察できるが、今後はさらにESDで育成をめざす「構成概念」を各教科に位置づけ、視覚化する手法を生み出す必要がある。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

難民支援など地球規模の課題を、自分ごとにとらえ主体的に行動することで、問題解決に近づくことに気づけた。

Think globally act locally.

16 横浜市立西柴中学校

学校教育目標 共に学び、たくましく、豊かな心をもった生徒を育てます

(公) 地域や社会のため、自分の役割や働くことの意義を理解し、行動する力を育てます。

(開) 多様性を尊重し、コミュニケーションを通して、ともに新たな価値を見出す力を育てます。

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

- 世界に目を向けることで、国際理解・国際協力の意識を持ち、多様性を尊重できる豊かな心を育む。
- 自ら課題を見出し、学び続ける姿勢を育成する。
- まちに愛着を持ち、コミュニケーション力を高める。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

○ 学校図書館の整備

生徒自らが興味関心を喚起できるよう、学習環境の整備の一環として、図書充実を図り、学校図書館に「SDGs コーナー」を設けた。

また、図書室前と保健室、事務室前に掲示を行い、生徒の意識向上を図った。



○ 1年生理科の授業の取組

1年生の理科の授業において、ESD（持続可能な開発のための教育）とは何か、2030年に実現するために、今何をすべきかを考える授業を行った。（全7回）

- ① 授業振り返りアンケートにて、“SDGs”を知っているかの事前アンケートをとった。
- ② SDGsの17の目標についてレクチャーを行い、それぞれが興味を持った理科に関連するSDGsに関する調べもの学習のテーマを決定した。

調べもの学習の内容として選んだテーマは、

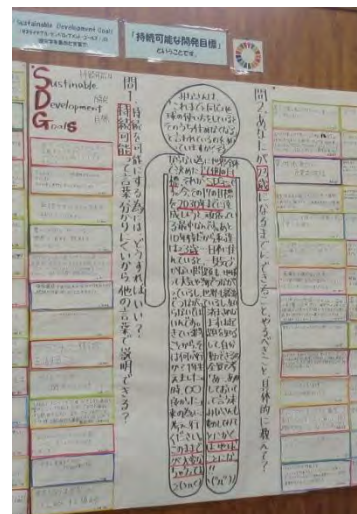
1. 南北格差問題や飢餓問題、食品ロスなど、食料分配にかかわること
2. 海洋プラスチック問題など、プラスチックにかかわること
3. 地球温暖化についてや森林の保護など、地球環境問題
4. 飲み水やトイレについてなど、水問題
5. 化石燃料の枯渇や再生可能エネルギーについてなど、エネルギー問題を選ぶ生徒が多かった。

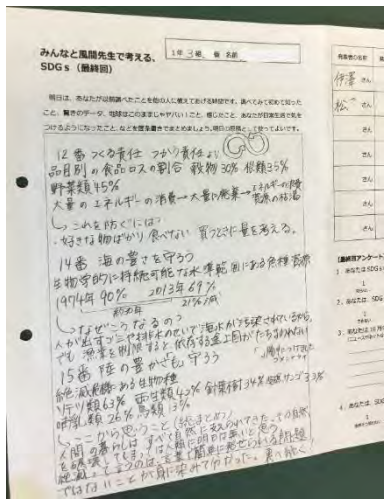
ごみ問題や女性の権利について調べた生徒もいた。

②～⑤学校図書館にて、調べもの学習。

⑥調べもののまとめと西柴祭（文化祭）の展示物作成。

1. 持続可能にするためには、あなたがすることは。
2. あなたが23歳（2030年）になるまでにできること、やるべきこと。





⑦自分が調べたことを、班の人にも教えてあげようの会(班内発表会)開催。発表会后、最終アンケートをとった。



1. 大部分の生徒が意識の高まりを実感し、まわり(保護者など)に伝えたいと考えた。
2. 節電や節水を心掛けるようになった。
3. 食べ残しをしないようになった。
4. 買い物の時マイバッグを持参するようになった。
5. ゴミの分別が大事であると自覚し、実際に実践するようになった。
6. 賞味期限の長いものを買うのではなく、すぐに使うものなら賞味期限が短いものを意識して買うようになった。また、エコマークの製品を意識して買うようになった。
7. 植物を植えよう、リサイクルをしよう、募金をしよう、物は使い切ろう等々の決意もあった。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

▽SDGsについて学習する前のアンケート結果

【質問】SDGsについて知っていますか？

- 【結果】知っている；12%
聞いたことがある；61%
知らない；11%
無回答；16%

▽SDGsの学習を行った後のアンケート結果

- 【質問1】SDGsについて知っていますか？
【結果1】よく知っている；88%
【質問2】SDGsについて人に説明できますか？
【結果2】自信をもってできる；54%
【質問3】SDGsについて勉強してよかったですか？
【結果3】とてもよかったです；95%

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

▽SDGsの学習に取り組んだことでの生徒が実感する意識変化

▽学校司書より

昨年度より、SDGsに関連する蔵書を充実させ、掲示物や学校図書館だよりでも啓蒙するよう心掛けました。

本年度は、調べもの学習を行う上で、クラスの生徒全員が一斉に取り組むには十分ではないので、金沢図書館より、蔵書を借りてきました。

調べものをしたことで、今後も興味をもって別の角度からもSDGsについて調べてほしいです。

▽1学年理科担当より

SDGsについて研究している大学生と話す機会があったり、中村哲さんの本を読んだりして感化され、「未来を担う中学生に、現状を知ってほしい」

「せっかくなら文化祭に展示ができれば」「やるなら年度末ではないときに」と思い、自分もまだまだ勉強不足でしたが、生徒たちの力を信じてみました。事後のアンケートを見ると明らかに意識は変わり、家族と話した生徒もいたということで効果を感じています。更に、学習した直後にテレビで1週間特集が組まれていたので、それを意識して見た生徒も多く、良かったと思います。多くの企業がSDGsに力を入れている中で、学校が遅れをとることはできませんし、毎年継続して行っていくことが大切だと感じています。

17 横浜市立神奈川小学校

学校教育目標

「かながわ」 よく^かんがえ ^なかよく ^がんばる ^わたしたちかなっ子

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

- 「よく^かんがえ」では、自己決定力・自己判断力の育成を目指しています。

ESDにおいて、私たちとその子孫が、この地球で生きていくことを困難にするような問題について、考えたり立ち向かったりする中で育まれる思考力や判断力が学校教育目標に直結します
- 「^なかよく」では、かかわり合う力・コミュニケーション力の育成を目指しています。

ESDでは、他人、社会、自然環境との関係性など、様々な他者との関係性を認識し、関わりやつながりを尊重していく考え方が重要となることから、他者とのつながりやコミュニケーション力をダイレクトに育成できます。また、収集した情報や、行った実践について学校内外に向けて発信することも、これらの力の育成につながります。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の 視点で取り組んだこと

- 体験学習での取組に、SDGsを位置づけました。

三浦体験学習では、「14.海の豊かさを守ろう」という視点で、自然の干潟の様子を観察しました。学校に戻ってからは、学校近隣の人工干潟の様子を見学し、生態系の違いや生き物の保全について学びました。
- 総合的な学習の時間での取組にSDGsを目標に位置づけました。

4年「浦島太郎について調べよう」では、学校周辺の地域に古くから根付いている「浦島太

郎伝説」について調べました。縁のあるお寺の住職さんのお話や、町内会の方の思いにふれ、まちのシンボルとして浦島太郎がずっと大切にされてきたことを知りました。町内の公園にある浦島太郎の壁画を老朽化により塗り替えるプロジェクトに加わり、子ども達が浦島太郎の壁画を一新することになり、プロのアーティストを講師として招きながら制作を進めています。

この学習の中では、様々な方と関わりながら地域で大切にされてきたものを守り、老朽化した場所を新しくするという活動に「11.住み続けられるまちづくりを」という視点で、取り組んでいます。子ども自身が地域に愛着をもち、制作した壁画が地域の人からも愛されるよう、試行錯誤しながら学習を進めています。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

- 上記の活動に加え、SDGsに関連すると思われる実践について、SDGsの視点で活動を振り返る予定です。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

- 自分たちの生活は、地域や世界とつながりがあることに気づくことができました。

住んでいる地域のすぐ近くにある海は、他の地域や世界ともつながっていることや、環境汚染等により生態系が失われている地域もあることを知り、世界で起きていることも、自分たちの生活と無関係ではないことを実感することができました。
- 地域の人の思いにふれ、まちへの愛着が生まれました。

18 横浜市立白幡小学校

学校教育目標 **たくましく生き抜いていく子ども**

心身ともに健康で、豊かな心情をもち、自分の言葉で語る実践力のあるたくましい子どもを育成します。

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

学校教育目標「たくましく生き抜いていく子ども」を達成するために、5つの目指す子どもの姿（目標を立てられる子、受け入れる子、協働する子、判断・実行できる子・やりぬく子）を設定して取り組んでいる。この5つの姿全てが、ESDを通して育成したい資質・能力である。

教職員が「この問題を解決したい!」と子どもが課題を発見して取り組むための手立てを具体的にイメージすることや、子どもが課題を解決する方法を主体的に選択、決定して学ぶ姿が見られないことに課題をもっていたため、この5つの姿を設定した。また、これからの社会をたくましく生き抜いていくために、子どもたちが主体的に学び方を自己選択、自己決定しながら、他者と協働的に解決してほしいと考えている。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

ESDの視点でカリキュラム改善を行っているが、次世代を見据えたカリキュラム開発も視野に入れて取り組んでいる。

○4年生 総合的な学習の時間

SDGsについて調べ、自分たちにできることを考えて活動している。横浜市国際交流協会の出前授業で、さらに理解を深めることができた。



○6年生 理科 電気を無駄なく使う仕組み

自動で電気が点灯消灯する事実から学習を展開し、電気を無駄なく使う仕組みをプログラミングで考えた。



○2年生4年生 ビーバーチャレンジに挑戦

ビーバーチャレンジとは、情報学と論理的計算的思考のための国際的な取組で、問題解決スキルと情報学の理解を促進している。今回はカードを通して取組を行った。

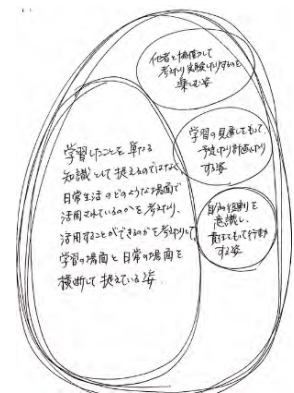


3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

○年間指導計画（学年ごよみ）とESDとの関連を明らかにした表を作成し、図書室前に掲示した。

○校内重点研究で、自分が授業で育てたい子どもの姿を「卵」にして表し、研究会や協議会でその卵をもとに議論を深めた。

○学校評価にも取り入れ、保護者から学校の取組を評価する機会を設けた。



4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

○ESDという共通のフィルターがあることで、目指す子どもの姿がより具体的になった。

○保護者にSDGsを周知するきっかけになった。

19 横浜市立中尾小学校

学校教育目標 **なかよく かがやいて おたがいに高めあう子**

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

なかよく ふれあいを大事にする子

かがやいて 自分らしさや自分の可能性を高める子

お互いに高めあう子 友達のよさを認め合い、学びあえる子

- コミュニケーションを行う力…自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力。
- 進んで参加する態度…集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を理解し、ものごとに主体的に参加しようとする態度。
- 多面的・総合的に考える力…ひと・もの・ことを多面的・総合的に考える力。
- 問いを見い出して学び続ける力…ひと・もの・ことから問題意識をもち、よりよい社会を創ろうとする力。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

今年度は、まず最初に職員も子どもたちも「知ること」から始めた。SDGsという言葉や内容を知ることや、「持続可能な社会を創っていく」ことの大切さを理解するために、職員研修を行った。また、子どもたちに対して、授業の中でSDGsにふれる機会を作るとともに、これまで行ってきた授業を職員がESDの観点で見直すことで、子どもたちに意識付けするようにした。

特に、これまで行ってきた各教科等の授業の中で、「命のつながり」や「持続可能な社会に向けてできること」などをより意識することで、子どもたちの学び方に大きな変化があったと感じている。

【事例1】 5年（社会）「持続可能な水産業とは」

東京湾のアナゴ漁師Sさんとの出会いから、水産資源を守り、海の環境を守る水産業のあり方を考える授業となった。アマモを植えたり小さいアナゴを

逃がしたりしながらアナゴ漁を続けるSさんの姿から、「自分（人間）のことだけでなく、アナゴのことを考えて漁を続けている。」と考え、熱心に授業で話し合う子どもたちの姿があった。



【事例2】 4年（総合的な学習の時間）

「マイクロプラスチックを減らすには」

ゲストティーチャーの話や写真をきっかけに、自分たちが普段から多く使用しているプラスチックに目を向け、そのプラスチックが大量に海に流れ出ていることで生き物に影響があることを知った子どもたち。学校の周りのごみを拾ったり、マイバッグやマイボトルを使うなどプラスチックをすぐに捨ててしまわない方法を考えて実践したりした。また、実際に海岸に行き、マイクロプラスチックを拾う活動をし、さらに自分たちができることを進めていきたいと考えていた。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

今年度は、ESDに本格的に取り組んだ初年度となる。そのため、年度の初めと終わりで子どもたちの意識調査を行い、比較がしやすいと考える。同じ項目で子どもたちの意識の変化を比べ、グラフで表す。

また、その結果をもとに、来年度からの実践に生かしていく。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

ESDの視点に立って普段の授業を見直すことで、より子どもたちの視点に立ち、実態をふまえた単元づくり・授業づくりを行うことの大切さが見えてきた。また、本質的なものは何かを問い直し、学校全体で共有していこうという確認ができた。

20 横浜市立相沢小学校

学校教育目標

学びあい 認めあい 支えあい 夢をはぐくむ あいざわっ子

【知】自ら考え 学び続ける子を育てます 【徳】自分も 周りの人も 大切にすることを育てます 【体】進んで 健康的な生活をする子を育てます
 【公】自分の役割を考えて 行動する子を育てます 【開】目標に向かって ねばり強く取り組む子を育てます

1 学校教育目標とESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

「人、もの、こととの「つながり」から、自己の考えを伸長し、未来へはばたくことができる」



- 【これまでの自分の見方・考え方をもとに】
- つながりに関心をもち、大切にすること (関連)
 - 役割を考え、進んで参加すること (参加)
 - 友だちや関係機関と協力すること (協力)
 - 未来に向かって計画をすること (未来)

Blocked

伸長

2 SDGs達成の担い手育成 (ESD) の視点で取り組んだこと

【6年 総合的な学習の時間 (A I A I)】

「あいざわのまちSDGs宣言」

SDGsを通して、自分たちのまちの特徴を見つめ直し、自分たちにできることは何かを考え、あいざわのまちの方と共によりよいまちを創り上げるために、発信 (宣言) を行った。6年生を3つのグループに分けて活動を行った。

【環境】

・エコバッグづくり

エコバッグを作り、広めたいという思いに沿い、PTAと連携をシデザイン、色を考え、運動会の参加賞としてエコバッグを配布した。



・間伐材を使ったクラフト体験

秦野で林業を営む方と関わり、林業の魅力や間伐材への関心を深め、いただいた間伐材をもとにプラスチック代用品を制作した。



【地域】

・まちにSDGsを広める活動

学習を通して、まち、保護者にできることを考えた。運動会時に保護者へ「ゴミを持ち帰ろう」と呼びかける放送やチラシ作り、学校HPを活用してSDGsについて知ってもらおう取組をした。



・SDGsサポーター認定活動

民生委員や子どもが利用する店など子どもがお世話になっている人に対して共によりよいまちを創り上げるための協力を依頼し、SDGsサポートとして認定をした。



・外国にルーツのある保護者へアンケート

在籍児童のうち、約2割が外国にルーツをもっているという特性を生かし、「日本に住んでいて感じる日本のよさや、過ごす際に困っていること」などのアンケートを行った。

・日本救援衣料センターへの服の寄付、ユニセフ募金

自分たちができることは何かと考え、6年生全員に服の寄付を依頼し、集めたり、ユニセフ募金を行ったりした。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

これまでの活動の中での学びをもとにESDによる変容を見取るため、宣言を行った学習発表後に以下のアンケートを行った。6つの構成概念および、7つの能力・態度である。

	いつまでもみんなが幸せに暮らせる社会につながる問題の解決にむけての大切な考え	とても重要	やや重要	あまり重要ではない	重要でない
1	いろいろな事(多様性)	21	24	3	0
2	関わり合っていること(相互性)	26	21	1	0
3	限りがあること(有限性)	38	8	2	0
4	一人ひとりに大切にするということ(必要性)	31	15	2	0
5	力を合わせるということ(連携性)	30	17	1	0
6	役割や責任をもつということ(責任性)	34	14	0	0
	今の自分ができること	よくできる	だいたいできる	あまりできない	とてもできない
1	批判的に考えること	12	29	6	1
2	未来を想像して予測して計画を立てること	18	24	6	0
3	多面的、総合的に考えること	21	23	4	0
4	コミュニケーションを行うこと	13	25	10	0
5	他者と協力すること	15	23	10	0
6	つながりを尊重すること	19	21	8	0
7	進んで参加すること	16	16	14	2
		14	26	8	0
		32	15	1	0
		17	21	7	2
		20	24	4	0
		30	15	3	0
		16	25	7	0
		27	19	2	0

アンケート結果より有限性、責任性に関する考えの推移が高かった。限りある資源に感謝し、大切に使うことや自分たちで協力して課題解決をすることをこれまでの活動で実感することができたといえる。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

人・もの・こととの「つながり」から、主体的に参加する態度を育むことができた。これまでの自分の見方・考え方がESDを通して見つめ直すことで身の回りのことにつながっているだけでなく、未来に向かっていくこと、それを担う一員であることを子ども自身が感じるようになったと考える。

21 横浜市立本牧中学校

学校教育目標

見つけ

認め

高める

School Inclusion～私たちの居場所～ふるさと本牧

1 学校教育目標とESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

見つけ

→物事や事象、人（他者や自分）をクリティカルに捉えたり、客観的・俯瞰的に把握したりする力を伸ばす。

認め

→物事や事象、人（他者や自分）について多面的・総合的に考え、それぞれの関連性やつながりを尊重する。

高める

→他者と協力しながら活動を行う中で、コミュニケーション力を伸ばし、進んで参加する態度を伸ばす。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

(1) 現行の教育活動の整理

現在行われている教育活動を整理し、来年度から全面実施となる学習指導要領を踏まえ、グラウンドデザインにSDGsへの取組を盛り込んだ。今後、2中4小ブロックで合同の学校運営協議会を立ち上げ、ブロック全体でSDGsに取り組んでいく方向性を確認した。ブロックで共通のテーマを掲げ、取り組むことで児童生徒の問題解決等の資質・能力を高めていきたい。

(2) 教育活動とSDGsの関連を可視化

現行の教育活動をSDGsとESDの関連から整理し、年間のカレンダーにまとめてみた。社会科では「本牧調べ」と題して、生徒一人ひとりが地域である本牧にスポットを当て、それぞれがテーマを設定し、地域に関することを調べ、発表を行った。その活動を通して、SDGsとの関連性が見えてきた。

来年度の学習指導要領全面実施を踏まえ、各教科等で、それぞれにSDGsカレンダーを作

成する予定である。

(3) 外部講師による授業と学級内でのワークショップ

大川印刷社長の大川哲郎氏を招き、1・2年生対象にSDGsに関するレクチャーをしていただき、その後各学級でワークショップを行った。生徒は自分自身の課題意識からSDGsを自分ごととして捉えていた。

講演を聴く



グループワーク



発表会

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

「変容の視覚化」の手法として、①生徒の表現（コメント・文章・発表など）の可視化、②振り返りやフィードバックの工夫が考えられる。①については今年度行ったワークショップの付箋紙のコメントや発表の様子から変容をみとることができた。



4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

生徒のワークショップからは【多面的・総合的に考える力】【コミュニケーションを行う力】【他者と協力する力】などに関連した姿が現れていた。また、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの価値も確認できた。

22 横浜市立小田中学校

- 学校教育目標 1. 個性が発揮できる学校生活（知） 自ら学び、自分らしさを発揮し、生きる喜びを実感できる生徒を育てます。
2. 誰もが尊重される学校生活（徳・体） 自らの心と体を健やかに育み、互いの立場を尊重しあえる生徒を育てます。
3. 地域とともにつくる学校生活（公・開） 地域との交流を積極的に進め、地域の一人としての自覚を育てます。

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

ESDを通して育成したい資質・能力は、

- ・コミュニケーション力
 - ・課題発見・問題解決力
 - ・持続可能な社会の創造に貢献する力
- である。

本校では、真面目に落ち着いて学習に取り組むことができる一方で、自ら積極的に学んだり、自分の思いや考えを表現することに課題がある生徒が多い。ESD という視点から教育活動を振り返り、改善していくことで、教職員や生徒の行動変容を目指している。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点 で

○SDGsに関する職員研修

- ・小中ブロック合同の研修で、SDGs17の目標をダイヤモンドランキング形式で整理した。SDGsは教育活動から見たときに、どのように関連付けられるのかを考えた。
- ・学校教育にSDGsを取り入れて活躍されている山藤旅聞先生を講師に招き、「手段としてのSDGs」という視点で講演やワークショップを行った。

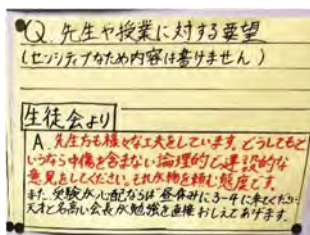


SDGsを教えない、使わないことも選択肢の一つ。自分の「好き」を活かし、探究することが結果的にSDGsの目標につながることも。

○教科・領域でのSDGsを意識した教育実践

- ・総合的な学習の時間では、1年生が誰にとっても居心地の良い学校づくりのために「18番目の目標を考える」、2年生が自然教室で訪れる戸狩「戸狩活性化プロジェクトを考える」、3年生は「SDGsのCMを作ろう」という実践を行った。

・生徒会活動では、生徒の意見をもとに、コロナ禍において生徒一人ひとりが健康で過ごしやすい学校を作っていくために、「選択制ジャージ登校」を実現した。他にも回答を工夫した目安箱の活用を行った。



ユーモアを交えた目安箱の回答 SDGsと絡めたティッシュ箱アート

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

他校の取組を参考に、ESDを通して育みたい資質・能力をもとにアンケートを作成・実施したり、単元の前後で同様の課題を行わせたりすることでどのような変容が見られるかを目に見える形にすることを構想している。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

- 本校では、変容を見取る手段をまだ作成していないが、育成したい資質・能力を意識し、ESD推進の視点で日頃から教育活動を見直すことで、次のようなことに気づくことができた。
- ・生徒会の校則改正や目安箱といった活動は「コミュニケーション力の育成」と位置付け、生徒の成長を支援・評価することができる。つまり、身近な教育活動のなかにESD推進は隠れている。
 - ・教職員のなかには、ESD推進=SDGsの目標達成であり、SDGsと絡ませて教育活動を実践「しなければならない」という思考になり、負担感が増してしまうことがあった。学校全体でESD推進に取り組んでいくためにも、各自がSDGs「を/で」の違いを意識しながら前向きに取り組めるような環境を作っていきたい。

23 横浜市立中川西中学校

学校教育目標

「自立と貢献」「健康と思いやり」「対話と融和」

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

本校の教育理念である「自立と貢献」「対話と融和」を達成するために、問題解決型・参加型体験を通し、個々の生徒に適した生きる力の育成に努めた。コロナ禍の限られた中ではあったが「主体的・対話的で深い学び」である調べ学習やグループ討論などの手段を各教科で用いて学習する機会を設けた。活動を通して、コミュニケーションの大切さを感じることができた。また、身近な問題から世界へと視野を広げ、自ら考えることを積極的に行うことができた。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の 視点で

教職員：WWF ジャパンによるESD研修

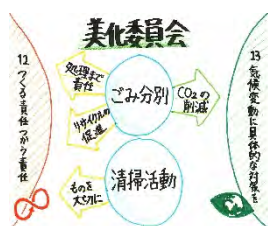
WWF ジャパンに來校いただき、環境問題についての理解を深め、現場での助けとなるようなアクティビティによる学習方法の手法を学んだ。ウェッビング活動では「2050年の地球」について考えた。レクチャー前後に、ウェッビングマップを作成した。レクチャーの前後でまとめる内容に大きな



変化が見られた。学習の前後で考え方も大きく変化が見られることが分かり、今後の授業の中でも用いたい。

生徒会：SDGsに対する意識向上プロジェクト

SDGs17の目標と各委員会の取組を関連させる目標設定を行った。生徒総会では、SDGsに対する意識向上を図るため、映像を使って17の目標の説明を行い、掲示物も作製した。後期からは3年生中心の生徒会活動から1・2年生への活動へと移行したが、3年生の取組を引き継ぎ、生徒会新聞などを通して、SDGsの啓蒙活動を行っている。



第3学年：国際交流

WWF ジャパンと横浜すばいすに協力をいただき、国際交流を1～2月に実施した。国語科や社会科で日本や海外での『プラスチック袋問題』について学習し、英語科で学んだ内容をまとめて、海外の学校とディベートを予定している。2学期は国際交流に向けて、英語でのビデオレターやSDGsの英文を読むなどを通して、意識付けを行った。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

SDGsについては昨年度から現在3年生の社会科や家庭科などの授業の中で学んできたが、今年度は実際に生徒たちが主体的に取り組み、SDGsの啓蒙活動を行った。この取組によって、学校全体でSDGsに対する意識が向上し、身近に考えることができるようになってきた。2年生では新たに総合的な学習の時間の中で、学習する機会を設けた。アンケートなどを行っていなかったため、来年度は生徒からの意見などを集約していきたい。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本校の英語科では5ラウンド学習方式を採用し、3年間に渡って英語でのコミュニケーション力向上の育成を行ってきた。確実に英語でのコミュニケーション力の向上が見られる中で、実践的な活動の場を求めていた。ESD推進校として活動する中で、国際交流の場を設け、英語を活用して、学んだことを発表する場を行う予定である。交流に向けて学校紹介を行うため、タブレット端末を活用し、生徒たちが自分たちで原稿作りから編集作業までを行った。ICT機器の可能性や学習してきた内容を存分に活用し、活動する生徒の姿は素晴らしかった。生徒の評価も高く、今後の活動が楽しみだという意見が多く見られた。



ESDの指導と評価の研究報告

横浜市立三保小学校 新海 秀美

1 地域や学校の特徴

本校は隣接する地域に、新治市民の森・三保市民の森、三保念珠坂公園、梅田川、水田等を有し、横浜市の中でも恵まれた自然環境に囲まれている。そこで、地域の自然や人材を積極的に活用し、森林の愛護会、河川の愛護会、公園での活動支援の市民活動グループ、生産農家等の方と連携しながら、学習体験の質を高めている。また、学校ボランティアや地域ボランティアとの関わりを深め、「おやじの会」と連携した「リサイクルステーションの設置」と3R活動の推進や、公園、通学路等地域を清掃する「地域のクリーンアップ」、社会福祉協議会と連携した生活科の「昔遊び体験」なども行っている。これらの活動を通して、ESDで育成を目指す「構成概念」*と「能力・態度」を系統的に育てることに取り組んできている。

*本校の研究では、国立教育政策研究所の示した「多様性」などの「持続可能な社会づくりの構成概念(例)」を「知識・技能」として位置付けているため、ESDで育成を目指す「構成概念」として表記している。

2 これまでの研究について

本校は、平成24年度より、「持続可能な開発のための教育(ESD)」を推進し、カリキュラム開発と授業実践を進めてきた。平成28年度より「横浜市ESD推進コンソーシアム」事業の推進校の指定を受け、各教科等の評価規準とESDで育成を目指す「構成概念」「能力・態度」との関連を図った「ESDに関わる評価規準」の作成に取り組んできている。また、平成30年度より、ESDとSDGsとの関連を研究し、児童の学習や日常生活につなげたり、企業や団体との連携に力を入れた教育活動を推進したりしている。

ESDの評価については、イメージマップやアンケート法を活用し、児童の意識の変容を可視化する取組をしてきた。しかし、それらを実施する時期や方法についての課題があり、分析方法についても難しさがあった。そこで、学習を通して見られた児童の発言やノート等への記述をもとにする分析方法に、重点的に取り組むことにした。

3 ESDの評価の研究

- ① ESDにおいて育成を目指す「構成概念」「能力・態度」の学年別重点化を図り、1年間を通して児童の変容を見る。
- ② 各単元等における「ESD評価規準」を設定して授業を実践する。
- ③ 児童の発言やノート等への記述をもとに、児童の変容を分析する。

- ① ESDにおいて育成を目指す「構成概念」「能力・態度」の学年別重点化を図り、1年間を通して児童の変容を見る。

ESDにおいて育成を目指す6つの「構成概念」と7つの「能力・態度」の中から、学年ごとに重点化を図って育成するものを設定した。設定する際には、これまでの8年間でのESDの実践をもとに、各学年における各教科等の目標や学習内容とより多く関連しているものを選んだ。また、児童の発達段階も考慮して決定した。

<ESDを通して育成をめざす「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点>

学年	構成概念	能力・態度
1年生	I 多様性 多様性を尊重する態度	⑦《参加》 進んで参加する態度
2年生	III 有限性 ものを大切にする態度	④《伝達》 コミュニケーションを行う力
3年生	V 連携性 互いに連携・協力する態度	⑤《協力》 他者と協力する態度 ⑥《関連》 つながりを尊重する態度
4年生	II 相互性 つながりやかかわりを大切にする態度	③《多面》 多面的、総合的に考える力
5年生	VI 責任性 責任と義務を自覚し、 自ら進んで行動する態度	①《批判》 批判的に考える力
6年生	IV 公平性 公正・公平に努める態度	②《未来》 未来像を予測して計画を立てる力

各学年においては、この重点化を図って育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を意識しながら、全教科等の教育活動を実践し、児童の変容を分析するようにした。

② 各単元等における「ESD 評価規準」を設定して授業を実践する。

ESD において育成を目指す「構成概念」は主に各教科等における「知識・技能」に、ESD において育成を目指す「能力・態度」は各教科等における「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に、それぞれ関連させて評価規準を設定して授業を実践した。

＜第4学年 総合的な学習の時間「だれもが安心・安全 三保のまち」の例＞

(◎は ESD の評価規準で記述)	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	<ul style="list-style-type: none"> ○まちには、様々な年齢や立場の人が生活しており、その人々が安心・安全に暮らすための工夫がされていることを理解している。 ◎まちに暮らす人々には、その立場によって様々な思いや願いがあり、互いに関わり合うことによってだれもが安心・安全なまちを実現しようとしていることを理解している。 ○地域の消防団や町内会などの人々の、地域の安全や防災力を高めるための取組や、その推進に関わる人々が思いや願いをもって活動していることを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○まち調べから課題を捉え、解決の方法や手順を考えている。(課題の設定) ○地域の方の話や調査から目的にあった情報を得ている。(情報の収集) ◎観点を決めて分類するなどして、傾向や関係性を捉えている。(整理・分析) ○自分の思いや考えをまとめ、必要に応じて適切な方法を工夫して伝えている。(まとめ・表現) 	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の安心・安全に関して自分にできることがあることが分かり、実行しようとしている。 ○地域の安心・安全のために力を尽くしている方に心を寄せ、その思いを理解、共感している。
ESD の視点	構成概念	Ⅱ 相互性	
	能力態度	③ 多面 多面的、総合的に考える力	

③ 児童の発言やノート等への記述をもとに、児童の変容を分析する。

評価規準をもとに、学習を通してみられた児童の発言やノート等への記述の言葉から、身に付けさせたい ESD の「構成概念」及び「能力・態度」に関連するものに注目して分析し、児童の変容の視覚化を図った。

＜第4学年 総合的な学習の時間「だれもが安心・安全 三保のまち」の例＞

○構成概念【Ⅱ 相互性】に関わる児童の発言及び記述等

- ・それぞれの取組をしている方の思いに注目すると、どの視点（「交通」「防災」「防犯」「福祉」）も三保のまちを良くしたいという思いは一緒だね。
- ・交通グループで調べ学習を進めていると、「ユニバーサルデザイン」という言葉が出てきたけれど、福祉グループの人もこの言葉を使っていたな。つながりがあるのかな。
- ・火災が起きた時には、消防団と消防士は一緒に火を消すために取り組むんだね。
- ・見守り隊の方は消防団や警察の方と関わりあって仕事をするということもあると言っていたな。

○能力・態度【③ 多面】に関わる児童の発言及び記述等

- ・調べたり、ゲストティーチャーから話を聞いたりしたことをもとに、もう一度まちの様子を見てみたいな。
- ・フィッシュボーンは、一つのテーマから種類ごとに仲間分けするのにぴったりだな。福祉というテーマ一つでも、いろいろな視点があることが分かるね。
- ・KWL や PMI を活用すると、今、分かっていることと、もっと知りたいことが整理できて見やすくなった。もっと知りたいことは、さらに調べ学習の課題にして調べようかな。

4 研究の成果と課題

研究内容①については、重点化を図って育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を意識しながら、全教科等で教育活動を実践することを通して、1年間というスパンでの児童の変容を感じることができた。研究1年目ということもあり、今後継続して研究することによって、児童の変容がより明らかになっていくとともに、身に付けた「構成概念」や「能力・態度」が積み重なっていくことの効果も表れてくるのではないかと期待している。

研究内容②については、ESD において育成を目指す「構成概念」は主に各教科等における「知識・技能」に、ESD において育成を目指す「能力・態度」は各教科等における「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に、それぞれ関連させて評価規準を設定することが概ね適切であることがわかってきた。特に、「能力・態度」のうち、【①批判】から【④伝達】までは「思考・判断・表現」と、【⑤協力】から【⑦参加】までは「主体的に学習に取り組む態度」と関連を図ることで、適切な評価規準を設定できるのではないかと考えている。

研究内容③については、学習を通してみられた児童の発言やノート等への記述の言葉から、身に付けさせたい ESD の「構成概念」及び「能力・態度」に関連するものに注目して分析することで、児童の変容を見ることができた。今後は、教師の分析力を向上するとともに、児童が自分の考えをより適切に言語化する力を付けていくことが課題である。

ロジックモデルを用いた協働型プログラム評価の実践

- ホールコミュニティで育成する「みな」と「みらい」を創る子 -

高原 洋介（横浜市立みなとみらい本町小学校）

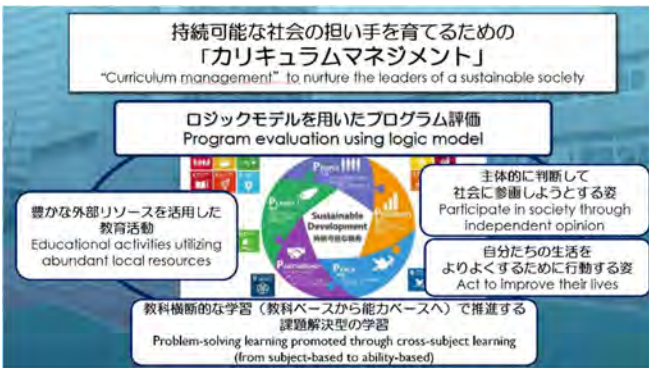
I はじめに

本校は横浜市街地の中心に位置するみなとみらい地区にあり、周囲には企業や大型商業施設だけでなく、様々な公的機関の事務所も立地している。そこで、本校では豊かな地域資源と連携した「持続可能な社会の担い手の育成」を目指し、小学校という教育機関でどのようなESDを実践できるのかを、東洋大学教授 米原あき先生にご助言いただきながら、研究を進めてきた。

II 昨年度までの実践

(1) ESD /SDGs を中核とした学校づくり

学校教育目標をESDの資質・能力をベースに策定した。そして、スクールマネジメントおよびカリキュラムマネジメントを通して、活動ベースに具現化してきた。



(2) ESD /SDGs という概念の開封(Unpack)

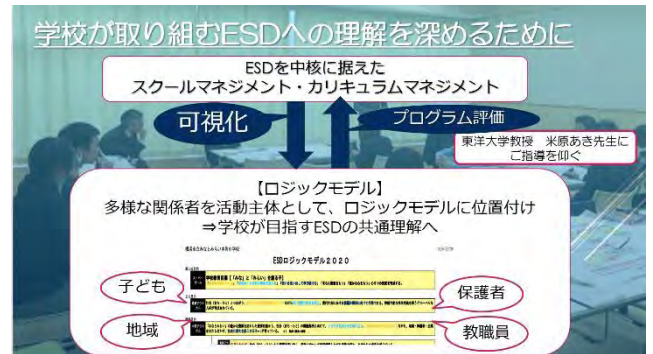
ESDとは何か。私たちがESDを始めるときにもこの問題に直面した。そこで、ESDを理解するために、まず、自分たちの言葉でESDという概念を「Unpack (UNESCO 2016)」して、ESDロジックモデル(*1)を用いて整理した。ESDの概念を具現化させること。それは、私たち教職員が目指すべきゴールの具現化ともなった。

*1 ESDロジックモデル



(3) 多様な関係者間でのESDの共通理解の促進

ESDを中核に据えた学校づくりを進める上で、大きな課題のひとつが、児童・保護者・地域・外部協力者、そして教職員といった学校に関わる多様な関係者(ステークホルダー)の間でのESDについての共通理解だった。



ESDで目指す資質能力や目標を整理して可視化し、ロジックモデルにて明示したことで、保護者や地域の協力者より、「学校がESDに取り組む中で、何を狙っているのかが理解できた」「自分たちで、どんなことを協力していけばいいかを考えるきっかけになった」などのご意見をいただきました。ロジックモデルにてESDを可視化したことで、多様な関係者間で目指すべきゴールを共有でき、一層の連携を進めることができました。

III ESDプログラムの実践(今年度)

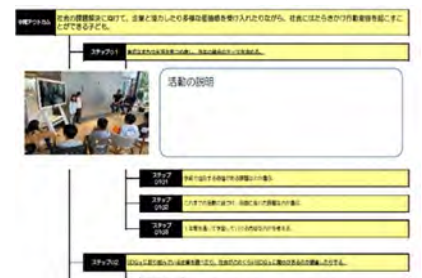
(1) 活動方針

今年度の活動は、新型コロナウイルスの感染拡大による影響を受けることになったが、「今年だからできること」を考えて実践を積み重ねることとした。

今年は「ロジックモデルで整理した資質・能力を、具体的な教育活動場面に位置付けて、検証すること」に取り組み、その成果と課題をもとにロジックモデルの修正に臨むこととした。昨年度同様に、生活科・総合的な学習の時間を中心とした実践の積み重ねと同時に、「ホールスクールアプローチの推進」と「ロジックモデルに紐づいた実践」に取り組むこととした。

実践は、単元計画や実施計画をもとにミニロジックモデル(*2)にてまとめることで、資質能力を整理した。

*2 ミニロジックモデル



(2)ホールスクールアプローチ(COVID-19)

Withコロナ時代への取組

ESD/SDGs 一層の推進
ESDで育成を目指す資力能力が、WITHコロナ時代に求められている。学校全体で「WITHコロナ」の視点でESDに推進に取り組む。
●「できない」ではなく、「できる」を考える
⇒感染リスクの削減と活動目標の両立をめざす学校行事
⇒新しい生活様式を取り入れた新スタンダード策定

協動的な学び 一層の推進
多様な考えを持つ他者との協働による主体的で深い学びを目指す。これらを通して、コミュニケーション力・表現力・学び続ける力を育成する。
●ロイロノート スクールでの授業実践
今までの学習形態は単にタブレット端末を活用した学習の良さを取り入れた「ハイブリッド」な学習環境を整える。

ICT活用の一層の推進
ICT活用により、子どもが学校やまちや家庭のつながりが深まるようにする。
●ペーパーレス化
⇒おたより・配布物はメール配信・ホームページ掲載
●学校メールアドレスの活用
⇒火災等の連絡は、電話・連絡帳とメールの併用
●オンライン会議の活用
⇒懇談会

新型コロナウイルス感染拡大により、感染症対策をしながらの教育活動となった。活動計画の見直しにあたり、「できない」ではなく「できることを考える」ことを大切にし、今年だからできることを実現できた。

その一つが、ICT活用である。本校は以前より、「授業内でタブレット端末の活用を進めていたこと」「保護者との連絡等のペーパーレス化に取り組んでいたこと」もあり、休業期間中も比較的スムーズにICTを活用できた。

学校再開後も、すべての学級でロイロノートスクール・アプリ※1を活用した実践の積み上げを進めてきた。今までの協働的な学習形態は残しつつ、タブレット端末を活用した学習の良さを取り入れた“ハイブリッド”な学習環境が整えられた。



※1 株式会社LoiLo社が提供する双方向授業を作り出す授業支援クラウド。動画や写真、手書きメモなど直感的な操作が可能で、「思考力」「プレゼン力」等の育成をサポートする。

(3)ホールスクールアプローチ(しなやか部会)

「ロジックモデルの文言が日常の教育活動のどんなことに関連しているのか。」昨年度の職員反省で挙がった。そこで、今年度は教科・領域に縛られることなく、ロジックモデルに紐付けたテーマについて個人で一年間取り組み、検証することとした。公開授業や実践提案を積み重ねることを通して、ロジックモデルの文言の共通理解が深まった。

●活動事例(一部)

「子どもの学習動機に沿った学習展開」 ⇒直接アウトカム0103

「たてわり活動でSDGs的パートナーシップをはぐむ」 ⇒直接アウトカム02

●特別活動

【人権週間の取組】



12月の人権週間では学校全体での取組として、なかよし委員会を中心に「ともだちウィーク」に取り組んだ。委員会ごとにSDGsと関連するテーマを決めて、友達とのつながりを深める活動に取り組んだ。

【たてわり(異学年)活動】



昨年度の児童アンケートでも高評価であった、たてわり活動を今年度も実施した。活動に制限があったが、月1回の昼休みを使ったレクリエーションや運動会などの行事で交流を深めた。

活動を通して、リーダーである6年生が自身の成長を感じられていた。

(4)学年・学級の取組(生活科・総合的な学習の時間)

【食育】1年・5年



WFPと関わりながら、給食の残食を減らす取組や残菜の肥料化に取り組んだ。新1年生に向けた映像を製作中。

【環境教育】4年



NPOや近隣企業と連携し、身近なごみ問題から創造的なリサイクル「アップサイクル」に関心を広げて活動に取り組んだ。

【自然共生】3年



外部機関と連携し、学校内の田んぼを生き物が集う、自然に近い持続可能なビオトープへと作り替えた。

【海洋保全教育】3年・6年



身近な海の生き物調査や住みやすい環境を考えた。横浜の海を再現した「海水槽」を校内に設置した。

【まちづくり】2年・5年・6年



2年生はまちとつながり、人々の想いに触れながらまちの価値を見つめ直した。

高学年は、まちの社会課題解決に向けた取組を進め、5年生はまちにSDGsを伝え広げる活動に取り組んだ。6年生はまちのにぎわいを増やすために、鉄道会社と連携した活動を進めた。

IV ESD /SDGsプログラムの評価

(1) 総括評価から形成評価へ

ESDプログラムがどの程度「活動主体の意識や行動の変化(変容)」や「関係者間の密接な連携」等を促しているかに関して検証を進めた。その際、大事にしたのが、「**形成評価**」の考え方である。

形成評価とは、活動をする前や活動中に実施される評価であり、実施後に成果を明らかにしていく総括評価とは異なる。形成評価に取り組む上で有効的に活用できたのが、先に例示した**ロジックモデル**であった。それは、ESDに対する評価指標がないため、ESD概念を「UNPACK」したロジックモデルが評価指標のもととなるとともに、見過ごされてしまうかもしれない価値をロジックモデルで可視化したことで、評価を通して価値付けすることができたからである。

(2) 実現したい価値を指標にしてアンケートで測定(*3)

実現したい価値をロジックモデルに紐づいた指標にして、活動主体にアンケートを実施した。



*3 iPadを用いた回答の様子

(3) アンケート結果のデータ分析

米原先生のお力も借り、データはできる限り数値化して、客観的な分析を進めた。職員でアンケート結果の分析を行った際は、顕著な特徴が表れた設問や教員の予想とのずれが生じた設問を中心に検討をした。

改善を考える視点は、「**分析を通したロジックモデルの見直し**」。手法はPDCA(⇒CDAP)(*4)を取り入れた。

①**CHECK**アンケート結果からスタートし、②**DO**活動内容(何をしたのか)を振り返り、③**ACTION**残りの3か月をどのようにしていくのかを考えた。さらに④**PLAN**次年度に取り組む活動をどう進めるべきかを話し合った。

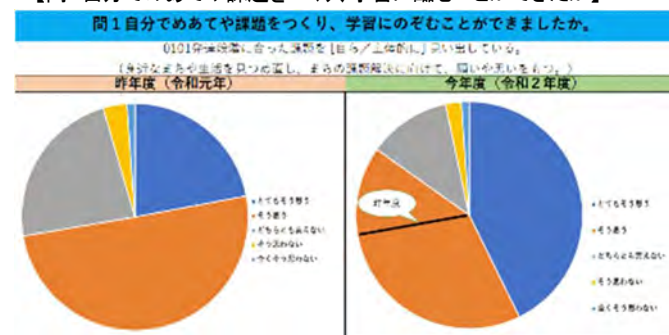
時間をとってしっかりと分析することで、自分たちのやるべきことが明確になるとともに、職員間の共通理解が促進され、意思の疎通がスムーズになっていると感じている。

*4 PDCAをもとにしたアンケート結果の分析

(4) 経年変化から見えてきた成果と課題

2年間の経年変化を追ってみることで、その成果と課題がより明確に見えてきた。数値が向上しているものも多く見られたことは、子どもたちにESDの意識が浸透してきていると考えられる。一方で、数値の向上が思っていたより伸びていないものや減少したものもあった。

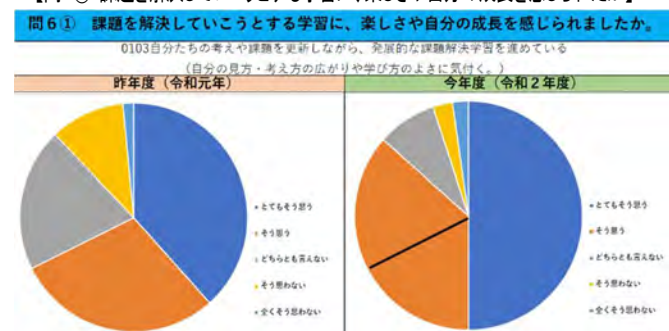
【問1:自分でめあてや課題をつくり、学習に臨むことができたか】



昨年度と比べて、数値が向上した。

これは、探究的な学びの定着がみられてきていることがあげられる。さまざまな教育活動の中で、めあてや課題をもち、その達成に向けて自分で学びを推進したことに、成長を感じているのではないかと。(問6とも関連)

【問6①:課題を解決していこうとする学習に、楽しさや自分の成長を感じられたか】



昨年度と比べて、大幅に数値が向上した。

これも、探究的な学びの定着がみられてきていることがあげられる。めあてをもったり振り返ったりすることを通して、自分の成長を感じられているのではないかと。(問1とも関連) 昨年度に比べて、「そう思わない」の層が減少しているのも成果といえよう。また、タブレット端末を活用した協

働的な活動の推進で、子どもたちは自分の見方や考え方の広がりを感じながら取り組めたことも要因であろう。

【問6②:課題を解決しようとする学習に、どんな楽しさや成長を感じられたか】



「調べる(しらべる)」や「知れる(知る)」「考える」といった課題追究の楽しさや成長に加え、「達成感」といったワードのスコアが高まっている。

問6 課題を解決しようとする学習に楽しさや成長を感じられましたか
【O103 自分たちの考えや課題を更新しながら発展的課題解決学習を進めている】

▶ 探究的な学びの定着 協働的な活動の推進で見方考え方の広がりを感じられた

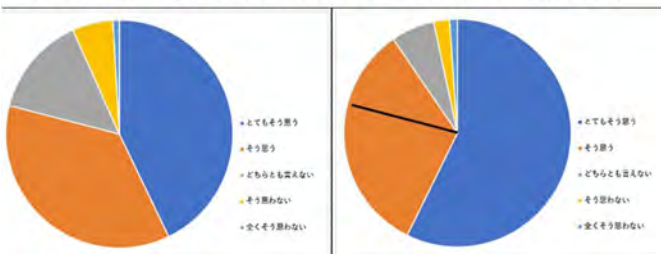
「考える力」や「成長」といった課題追究の楽しさや成長に加え、「取り組める(取り入れる)」「達成感」といったワードのスコアが高まっている。

海洋保全教育に取り組んでいた6年生の結果では、リアルな体験活動から見出した社会課題の解決に向けて、考え・行動していく「発展的な課題解決学習」への達成感も感じられていると思われる。

【問13①:友達や学年の違う人と一緒に活動することによさを感じているか】

問13① 友達や学年のちがう人と一緒に活動することにより、よさを感じていますか。

直接O2子どもたちが、多様な他者とコミュニケーションをはかり、活動の価値に気付いている。



さらに高評価となった。

これは、たてわり(異学年)活動を継続的に行ってきたことがあげられる。月1回のたてわりタイムだけでなく、運動会といった学校行事を通して感じているのではないか。

【問13②:友達や学年のちがう人と一緒に活動することにより、どんなよさを感じていますか】



「深まる(ふかめる・深まる)」や「ともだち(友達)」、「仲(なか)」などのワードのスコアが高まっている。

単語	動詞			形容詞		
	事前	事後	事後	事前	事後	事後
50	できる	50	50	57	楽しい	48
50	遊ぶ	33	67	16	良い	84
44	遊ぶ	35	65	22	いい	78
46	わかる	43	57	33	たのしい	67
38	知る	40	60	0	うれしい	100
42	遊ぶ	11	89	9	なかよい	91
0	深める	41	59	25	多い	75
42	分かる	13	87	0	楽しい	100
29	深まる	57	43	14	うれしい	86
40	出来る	50	50	0	からい	100
62	くれる	36	64	0	つよい	100
61	わかる	58	42	0	わるい	100
54	考える	40	60	0	仲良い	100
31	書ける	100	0	0	出しやすい	100
0	深まる	22	78	0	悪い	100
0	知る	31	69	0	深い	100

事前事後両方に、「成長」「楽しい」「できる」「分かる」「チャレンジ」「発表」「言える」といった、主体的な学びにおいて成長が促される単語があることから、子ども自身がよさを感じられていることがうかがえる。

事後の語彙も豊かになり、プラス表現が増えている。

- 名 詞「上手」「成長」「ともだち」
- 動 詞「ふかめる」
- 形容詞「なかよい」「良い」「うれしい」「仲良い」「やさしい」「おもしろい」等

問13 友達や学年が違う人と一緒に活動するよさを感じられましたか
【O2 子どもたちが多様な他者とコミュニケーションをはかり活動の価値に気付いている。】

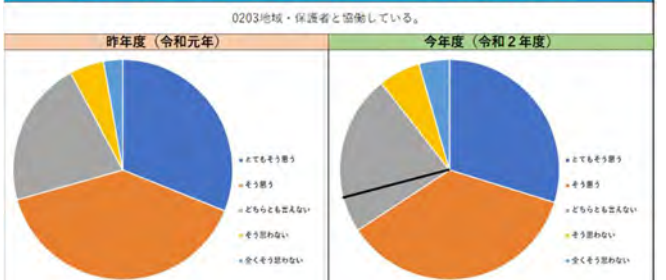
▶ たてわり活動の定着 運営した6年生からも達成感や満足感を示唆するふり返り

「深める(深まる)」や「交流」といったコミュニケーションのよさに加え、「助け合える」「取り入れる」「ふれあう」といったワードのスコアが高まっている。

たてわり活動を推進した6年生だけの結果では、コミュニケーションのよさに加え、「助け合う」「触れ合う」といったことの価値にも気付いていることが分かる。

【問10:家や地域の人に自分たちの活動へ協力してもらっているか】

問10 家や地域の人に、自分たちの活動へ協力(参加)してもらっていますか。



昨年度と比べて、数値が低減した。

これは、活動を知ってもらう機会が少なかったことが考えられる。地域でのイベントが中止となったり、みなとみらいを語る会(学習発表会)も形式が変わったりして、昨年同様な発信ができなかった。活動を知ってもらい、協力を仰げるような行い方の検討が必要である。

V 次年度に向けて

(1) 2年間を振り返って

○ロジックモデルにて、ESDの概念を可視化したことで…

- ⇒包括的なESD概念の可視化を通して、職員のESDに対する捉えがそろい、理解が深まった。
- ⇒今年度はロジックモデルの文言の具現化を図ったことで、ESD概念の一層の理解と共有が深まった。
- ⇒一つ一つの教育活動に、ESDの意味や意義を感じ、子どもたちの活動に価値付けられるようになった。
- ⇒実現したい価値をロジックモデルに紐づいた指標で評価したことで、成果と課題が明らかになった。
- ⇒体系的・俯瞰的に見られるようになり、生活科・総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な学びを構想し、実践できた。
- ⇒資質能力がどの教育場面で涵養されているのかが具体的にになってきた。

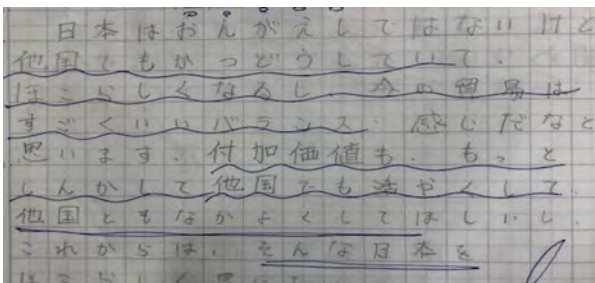
○ロジックモデルを地域、保護者に周知したことで…

- ⇒学校が何をしようとしているのかというロードマップを示すことができた。
- ⇒保護者が「学校から何を求められているのか」の理解が深まり、協力体制が整ってきた。
- ⇒PTA・教育奨励会のイベントで、ESD/SDGsに関することを取り上げてもらえた。
- ⇒連携先との打ち合わせで、ロジックモデルを提示することで、活動を通して「何を目指しているのか」を共有しやすくなった。

○子どもたちとESD/SDGsに取り組んできたことで…

- ⇒何か活動を計画する際に、ESDの視点を入れたものが当たり前となり、意識が根付いてきた。
- ⇒外部機関との連携を通して自分たちの活動を発信することの意義を実感でき、子どもたちの表現力・発信力が身につけてきた。
- ⇒「持続可能な社会とは？」という見方をもって、さまざまな学習に取り組む子どもの姿も見られている。今後(10年後)のあり方を考えて、学びをふり返っている様子(*5)が見られた。ESDと関連させながら、学習や活動を創る意識の一層の定着をはかりたい。

*5 5年生児童による社会科の振り返り(一部抜粋)



(2) 次年度に取り組むこと

ロジックモデルを策定して3年目を迎える。さまざまなアンケート結果が示すように、すでに達成していると思われる指標もある一方で、さらに追究すべき指標も残されている。また、COVID-19などロジックモデル策定時には想定していなかったことや、ロジックモデルの運用に関することも、課題として明らかになってきた。

今年度までに成果と課題が明らかになったことから、次年度はロジックモデル2021版の策定(項目の入れ替えや文言の加筆・修正)に取り組んでいく。そして、本校の5年後・10年後の本校の目指すべき姿を明らかにしていきたい。

※1 協働型プログラム評価とは？

東洋大学教授米原あき先生は、ESD評価の難しさとして

- ① それぞれの主体がESDの定義を行い、評価指標を設定する必要があること
- ② ESD評価の結果が、ESDプログラムの改善に役立つような評価活動を導入する必要があること
- ③ 多様なレベルを包括する評価のデザインを検討する必要があること

と、指摘されている。また、「**形成的な評価を参加型/協働型で行うことによって、ESDの取り組みの改善に資する評価活動が実現できると考えられる**」とも、示唆されている。

そこで、本校では協働型プログラム評価を、ステークホルダーが活動主体となって、ESD理念を具現化した学校教育目標の達成に向かって活動を推進し、その活動主体と協働して形成評価を進めることで、スクールマネジメントに活用することと捉え、取り組んできた。

多様なステークホルダーと協働することで、ステークホルダーは学校の取り組むESDの意義を認識することができた。また、ロジックモデルに紐づけた評価指標を作成・実施することで、ステークホルダーは学校が可視化したESDの価値を共有することもできた。これによって、ホールコミュニティまで視野に入れた包括的で、プログラム改善につながるような、評価デザインの実現に近づいている。

【引用・参考文献】

(米原あき)

横浜市立ユネスコスクール/ESD推進校実践報告 P34-63

平成31年文部科学省SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業

(米原あき)

「プログラム評価ハンドブック」晃洋書房P147-159

第2章

協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメント実践に関する調査研究報告書 ver. 2（理論編）

令和2年度
SDGs 達成の担い手育成 (ESD) 推進事業：教育 (学習) 効果の評価・普及
横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム

協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究
報告書 ver.2 (理論編*)

米原 あき (東洋大学)

本報告書は、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM 2020』を「実践編」とする二部構成になっています。本編の実践事例の詳細は、「実践編」をご参照ください。なお、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM』シリーズは、当該小学校 HP にて公開されています。
(<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minatomiraihoncho/index.cfm/1,0,73,212.html>)



目次

1. はじめに——本報告書の目的
2. 横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
 - (1) これまでの取り組みと成果
 - (2) 「アクション 2019」から「プラン 2020」へ
 - (3) 重点研「しなやか部会」の活動
 - (4) ESD ロジックモデルは有用か？——MM 本町小学校教員へのアンケート調査より
 - ① LM に対する懸念
 - ② LM 作成上の難しさ
 - ③ 現実の活用への難しさ
3. 今後の展望——不確実時代のレジリエントな学校へ

資料 I. ロジックモデル

資料 II-a. アンケート調査票(低学年用)

資料 II-b. アンケート調査票(中高学年用)

<参考:昨年度報告書目次>

1. はじめに——本調査研究の目的
2. 評価観の転換——ESD 評価を考える視点
3. 協働型プログラム評価とは
4. 横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
 - (1) 【P】 ニーズ評価・セオリー評価——“自分たちの” ロジックモデルづくり
 - (2) 【D→C】 プロセス評価・アウトカム評価——指標に基づくデータ収集と分析結果
 - (3) 【A】 改善に向けてのアクション——『研究のあゆみ』と全体研修による具体的改善
5. 今後の展望——教育委員会を中心とした「協働システム」と現場の当事者性

1. はじめに——本報告書の目的

本報告書は、文部科学省『令和2（2020）年度SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業』におけるカテゴリー（3）『教育（学習）効果の評価と普及』（受託者：横浜市教育委員会ESD推進コンソーシアム）の一部として実施されている、評価に関する調査研究事業『協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメント実践に関する調査研究』の成果をまとめたものである。上記の事業および調査研究は昨年度から開始されており、今年度は2年目の取組みとなる。したがって、本報告書は昨年度の報告書の「続編」という位置づけで作成されている。本調査研究の理論枠組みとなっている協働型プログラム評価の解説などについては、昨年度の報告書を参照されたい。

本調査研究は、ESDのような、多様で動的な教育活動の評価を検討する際に、従来型の実績評価の考え方を適用しようとする~~こと自体に無理があるのではないか~~——換言すれば、従来型の評価の枠組を乗り越えて、異なるパラダイムで評価を捉え直す必要があるのではないか——という問題意識のもとに計画された。この問題意識を具体的なアクション・リサーチにつなぐ方法として「協働型プログラム評価」という考え方を導入し、参加型の形成評価によって、ESDの理念をスクール・マネジメントに活用するという試みに取り組んでいる。

このアプローチのもとでは、児童個人の学習評価でも学校評価でもなく、ESDという取り組み=プログラムの総体的な評価が行われている。この評価活動の目的は、児童の達成度を総括評価・相対評価することや、学校のパフォーマンスを監督・監査することではなく、(1)ある具体的な理念や教育目標のもとにスクール・マネジメントおよびカリキュラム・マネジメントを行うための道具を提供することと、(2)学校が取り組むESDプログラムを包括的に計画し、改善するための情報を提供することにある。本研究は、このような(1)マネジメントの道具、そして(2)改善のための情報提供こそが、まさに「評価」と呼ばれる手続きの本質的な機能であるという考え方に立脚している。

昨年度の調査研究では、まず、協働型プログラム評価をESD評価に適用するにあたっての理論的な検討を行った。そして、その理論枠組みに基づき、本研究のモデル校である横浜市立みなとみらい本町小学校〔小正和彦校長〕（以下、MM本町小学校）の実践を報告した。本報告書では、昨年度の報告に引き続き、今年度、MM本町小学校における取り組みがどのように進展したのかを報告し、その実践から得られる示唆と課題を抽出することを目的とする。まだ調査研究2年目であることを踏まえ、安直な一般化を急がず、MM本町小学校の取り組みから学ぶ姿勢で分析と考察をすすめる。

本報告書の構成は以下のとおりである。まず次節にて、今年度のMM本町小学校の取り組みを報告する。この節が本報告書の主要な本文となる。次節（1）では昨年度の取り組みを概観し、（2）では昨年度から今年度へどのように接続が行われたのかを詳述する。この点は、取り組みの発展的な継続において看過できない重要なポイントである。続く（3）ではMM本町小学校のESDロジックモデルがどのように改善されているのか、その改善

の取り組みである「しなかや部会」の活動を分析する。最後に（４）において、MM 本町小学校の先生方にご協力いただいたアンケートの結果をもとに、ESD ロジックモデルの有用性を問い直し、よりよい ESD ロジックモデルの実現に向けた示唆を得る。

また本報告書は、昨年度同様、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM 2020』を「実践編」とする二部構成になっており、本報告書は主として「理論編」を担っている。本報告書の実践事例の詳細については、「実践編」を参照されたい。

なお、本報告書の内容は、筆者個人の責任によって執筆されたものであり、横浜市教育委員会及びみなとみらい本町小学校の立場や考え方を表明するものではない。

2. 横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント

MM 本町小学校（2018 年 4 月開校）には、6 学年 14 学級に約 350 の子どもたちが学んでいる（2020 年 5 月現在）。開校宣言の中に「豊かな資源を活かし持続可能な社会の担い手を育む小学校として発展する」という文言が含まれている通り、開校当時から学校全体で ESD に取り組んでいる。MM 本町小学校の独自性は、ESD の考え方を、教室の中の教育活動だけではなく、スクール・マネジメントやカリキュラム・マネジメントにも取り入れ、全校的に活かそうとしている点にある。この点においてプログラム評価との親和性が高く、開校当初からプログラム評価が導入され、実践されてきた。ここではまず、これまでの取り組みとその成果を概説し、今年度の主要な取り組みについて報告する。

（１）これまでの取り組みと成果

MM 本町小学校では、2018 年 4 月の開校時から重点研究として ESD に取り組んでいる。学校教育目標である「みな[皆]とみらい[未来]を創る子」の育成を目指し、ESD を契機としたスクール・マネジメントが実践されている。プログラム評価の流れ（ニーズ評価・セオリー評価・プログラム評価・インパクト評価）に沿って、まず、先生方自身がワークショップを通じて「MM 本町小学校独自の ESD ロジックモデル」を策定した（資料 I. ロジックモデル参照）。ESD ロジックモデルには、MM 本町小学校が 6 年間の教育活動を通じて、また、教科や活動種別の違いを超えて、「実現したい価値」とそのために必要な教育活動が、俯瞰的に示されている（ニーズ評価→セオリー評価）。

ESD ロジックモデルに示された方向性のもと、『ESD BOOK feat.MM 2020』に報告されているように多様な教育活動が実現され、その成果は先生方が作成した質問紙調査によって可視化されている（資料 II-a.、b. アンケート調査票参照）（プロセス評価→アウトカム評価）。ここで明らかにしようとしているのは、事前に設定した目標値に対する「達成度」ではなく、多様な教育活動を経た子どもたちの「変容」である。また、これらの評価の目的は、「成果の測定」という総括評価のそれではなく、「今後の改善」という形成評価が目指すところにある。昨年度の取り組みがもたらした「変容」と「改善の方向性」は、2019 年度の報告書および『ESD BOOK』が示す通りである。

(2)「アクション 2019」から「プラン 2020」へ

昨年度の成果を受けて、MM 本町小学校の先生方の提案により、年度末に振り返りの重点研究会が持たれた。多忙な学校現場では、「評価はやったものの、やりっぱなし」となってしまうことが、現実には多い。しかしながら、評価の結果を今後の改善策に活かし、それを次年度の計画に反映して実行に移さなければ、PDCA サイクルが循環しているとは言えない。PDCA サイクル二巡目への移行は、評価活動における難所の一つである。本事業の二年目を迎える MM 本町小学校にとっても、ここが課題になるであろうと思われた。しかしながら、以下に概説するとおり、MM 本町小学校の先生方の予期せぬ妙案により、この難所をスムーズに、むしろ建設的に、越えることができた。

図 1 に示す通り、プログラム評価は、PDCA のサイクルに並走するかたちで実施される一連の流れをもった評価活動である。アンケート調査は PDCA サイクルの「C」にあたるアウトカムの評価に該当するが、ここで行われた研究会では、図 2 で示すように、まず、アンケート調査票の作成者である先生方が、アンケートの結果を考察するところからスタートした。アンケートの結果から、子どもたちの主観的な変容を追っていくと、「教員の目線ではできているとは思わないのに、子どもたちはできていると感じているようだ」などの、アンケートの結果と先生方の印象との間の齟齬が具体的に浮かび上がってきた。それらの「齟齬」を中心に、「このような結果 (C) に結びつくきっかけとなった教育活動 (D) とはどのようなものだったのか」とプロセスを振り返り、具体的にそれらの活動を見直すことで齟齬の原因を突き止め、次なる改善の方策が話し合われた (A)。そして、それらの改善策は次年度に向けての具体的な計画や方針に反映されることとなった (P)。すなわち、アンケート結果に基づき、PDCA ならぬ「CDA-P (P は次年度)」という振り返りを行うことによって、2019 年度の評価結果から得られたアクションを、2020 年度のプランに繋ぐことができたのである (図 3)。

この活動は次の二つの意味で非常に有意義な活動であると言える。第一に、「エビデンスに基づく改善」の活動になっているという点である。上述の通り、ここでの議論のたたき台となったのは、アンケート調査によって収集されたデータである。子どもたちの変容が、数値データやテキストデータのかたちに可視化され、個々の教員の主観に基づく個人的な反省に留まらず、複数の教員の間で共有されながら問題点についての議論がなされている。また、これらの議論の中心となったのは、データから明らかになった評価情報と、個々の教員の意識の間の「齟齬」であった。データに基づいた議論であったからこそ、教員の主観との齟齬が明らかにされ、かつ現場に根差した具体的な検討へと発展していった。

二つめの重要な意義として、この活動によって「総括的な評価」が「形成的な評価」に繋がったという点が挙げられる。通常、アウトカム評価は、その活動の達成度を事後的に評価する総括評価として行われる。総括評価は、その取り組みの成果を外部に対して説明する説明責任のための評価手法として広く使われているが、しばしば、その取り組みの改善には直

接的には活用しづらい評価情報であるとも言われている。しかしながら、MM 本町小学校の重点研究会では、アウトカム評価の評価情報が、具体的な教育活動の改善策を検討するための情報として活用されている（図3）。

このような機会を経て、2019年度の経験が、2020年度の活動に引き継がれた。

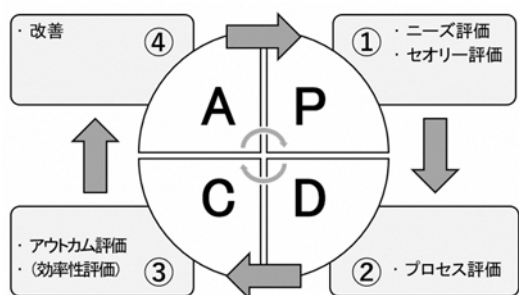


図1 プログラム評価の流れとPDCAサイクル
(出典) 筆者作成

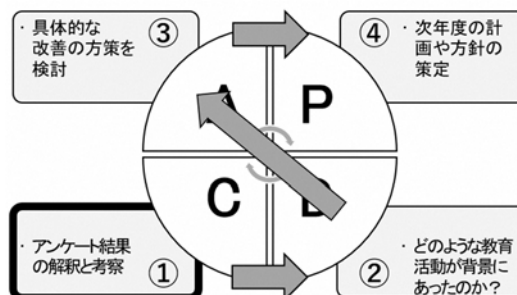


図2 改善Actionに向けての検討
(出典) 筆者作成

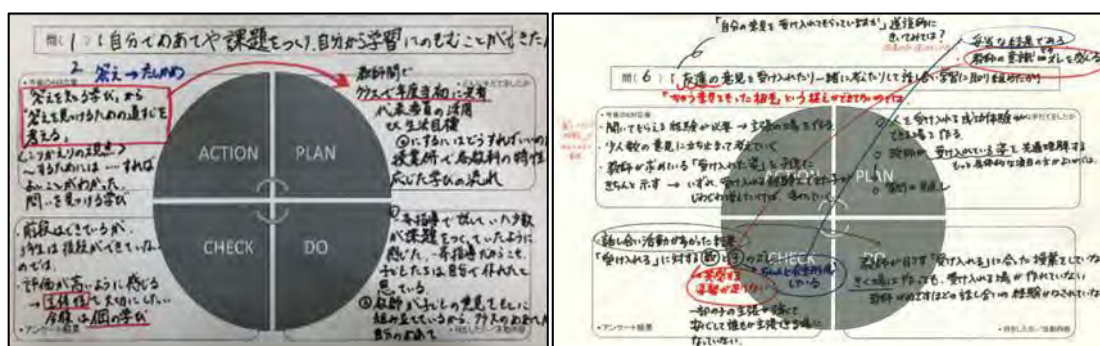


図3 重点研究会で行われたワーク(ワークシートの一例)
(出典) みなとみらい本町小学校提供

(3) 「しなやか部会」の活動

2020年度の新たな活動として考案されたのは「しなやか部会」の活動である。「しなやか部会」は、ロジックモデルに示されたスーパーゴールを実現するために、コロナ禍の影響に翻弄されることなく、文字通り「しなやか」に「普段の授業、学級経営から、子どもたちへの見方を変え、教師が変容し、子どもが変容していくこと」(重点研しなやかだより No.1)を目指す研究会である。しなやか部会のその名のとおり、「研究は、学校が決めていくことでも、重点研が決めていくことでもありません。スーパーゴールに向けて、どのような取り組みができるのか、1から考えていきましょう。」(重点研しなやかだより No.1 より)という掛け声のもと、ロジックモデルを見直し、新たな取り組みを考案・実施し、その取り組みを共有し、教員間の議論を通じて、現在のモデルには示されていない活動も追加していこうという柔軟な——しなやかな——姿勢でスタートした。例えば、研究会のすすめ方は以下のように説明されている(重点研しなやか部会 No.4 : 囲み中の下線部および強調、原文ママ)。

<p>1. 研究内容の確認・決定</p> <p>○確認したいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しなやか部会ではロジックツリーをもとに、目指したい姿に迫る授業展開を行っていく部会。そのため、授業研による1時間もしくは単元による子どもの変化というよりは<u>日々の教職員の意識が大切。</u> <p>○イメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロジックナンバーに近づける取り組みを日々行い、特に意識した活動は写真やメモで残しておく。 ・8月後半にアンケートの実施。 ・9月、10月を目安に、行ってきたことを共有する。その際、授業研を行い検討したい人は12月に授業提案する。 ・再度、取組を継続させ、12、1月にアンケートをとる。 <p>※研究が授業の一コマや手立てベースにならないようにしていく。もちろん、全てに手立てはつきものですが、手立ての具体というよりも、<u>活動や先生の思い、子どもの思考などを記録していくイメージ。</u></p>
--

「1時間もしくは単元による子どもの変化に捉われない」ことや「研究が授業の一コマや手立てベースにならないように」といった留意点が明示されており（下線部筆者）、取り組みが近視眼的にならないよう注意が促されている。同時に、「日々の教職員の意識」や「ロジックナンバーに近づける取り組みを日々行う」といった日常性の意義が強調されており（下線部筆者）、取り組みが一回限りの発表会として終わることなく、日常性のなかで教員自身の変容につながることを目指しているのが分かる。

毎回の研究会では、各教員の独創的な取り組みが共有され（表1）、それらの報告をたたき台にグループワークを中心とした議論の場が持たれた（図4）。ひとつひとつの取り組みの独創性の高さもさることながら、それらを題材にした先生方の活気ある議論の様子が筆者の印象にも強く残っている（2020年10月30日：第7回しなやか部会に参加）。

表1 しなやか部会個人テーマの例

個人テーマ	ロジック・SDGs
「思いを大切に」	010302 自分中心の思いでなく誰かのためへの思い
「粘り強く追及する」	010101 まちの課題解決に向けて願いや思いをもつ
子どもたちの思いを聞く	020102 相手の考えに寄り添って聞く
たてわり革命 ペア学年での取組	020201 学年に応じた目標を立て、たてわり活動に参加する
学びの個別化	010302 自分の見方・考え方の広がりや学び方のよさに気づく
ICT×言語	0201 相手の考えに寄り添って聞く
宿題革命	0101 発達段階にあった課題を自分から見出す
本音	020101 根拠や理由を示しながら説得力ある話し方で自分の考えを発表する

（出典）みなとみらい本町小学校「重点研しなやか部会 No.4」

表2 今年度の取り組み

活動・取組み（一般）
しなやか部会
たてわり活動
総合の活動
海水槽
MM線とのかかわり
直接0102をもとによかった行動を表彰
活動・取組み（コロナ対応）
スタンダードのビデオ作り
手洗いや衛生面に関する取組み
対話や交流を持続するための取組み
ICT(ロイロノートスクール)の活用
活動・取組み（ホールスクールアプローチ）
たてわり活動

(出典)筆者作成

それぞれの取り組みに対する先生方の自由記述を内容分析したところ、「ロジックモデル(LM)のメリット・LMを活用したことによる進展」というカテゴリーと、「LMのデメリット・LMを活用するうえでの困難」というカテゴリーが抽出された(表3)。

表3 自由回答記述の内容分析

LMメリット・進展	LMデメリット・困難
<p>ロジックモデルをつくったことで…</p> <p>【ESD実践に関して】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・可視化することでESDがやりやすくなった ・子どもたちにSDGsを意識させやすくなった ・ESDの教育的な価値を感じることができた ・身近にできる持続可能な取組みを考えるきっかけになった <p>【教員の意識に関して】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日頃の教育活動全般をロジックモデルを元に行おうとする意識ができた ・上位の理念から具体的な取組みへの繋がりが分かった ・学校目標やその他上位の目的を時折意識する機会になっている <p>【教員間のコミュニケーションに関して】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロジックモデルの作成・見直しをすることで、先生方と話し合い、共有することができる ・ロジックモデルを意識することで他の先生方、そして学校が同じ方向を向いて日々を過ごしている ・教職員が同じ方向性を向いて、児童に向き合うことができる ・クラス単位ではなく、委員会や、学年、学校単位で教育目的を考えられる <p>『どうしても教育活動の中には、活動のその先に何があるのかがボヤっとしたものがたくさんあります。そのボヤっとしたものがロジックモデルを作ることによって、はっきり見えるものが増えたように感じます。』</p>	<p>しかしながら…</p> <p>【懸念】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・可視化することにより逆にそこにはまり、そこから抜けられなくなるのではないかと(枠にはめ過ぎてしまわないか) <p>【ロジックモデル作成上の難しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標と教育の諸活動をリンクさせていく重要性は分かっていたが、項目が細かく、うまく活動がリンクできていない ・ロジックモデルが上位の目的から具体的な活動に行くほど、ほかの要素と絡み合っ、図に表していくのが難しい ・アンケート分析が難しい <p>【現実の活用への難しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内の問題を解決しているといえるかは疑問 ・研究会等の場では議論できても、それが普段の授業や生活の場で子ども達への指導へ活かされている実感はあまりない <p>『アンケートやロジックは素晴らしいものですが、使い方もっと慎重にもっと丁寧に。自分たちがやることは大胆にと思ってます。』</p> <p>『社会情緒的スキルである「思いやり」などの項目は、なかなか数値化しにくい部分です。学校として評価をすべきではないかもしれませんが、人を育てていく上でとても大切なことなので、どのようにして教育的活動に入れていくのがよいか考えていきたいです。』</p>

(出典)筆者作成

LM のメリット・進展というカテゴリーの中には、ESD 実践、教員の意識、そして教員間のコミュニケーションに関するメリットと進展という3つのサブカテゴリーが見いだせた。ESD 実践については、LM によって「ESD の可視化」がすすんだことから得られたメリットが挙げられている。また、教員の意識については、「学校目標や上位の理念」から日常の教育活動を俯瞰するようになったという意識変容がうかがえる。そして、教員間のコミュニケーションについては、LM をたたき台として、ホールスクールのコミュニケーション——前節で概観した「しなやか部会」の活動はその端的な例であろう——が進められていることが分かる。記述回答のなかにあった以下のコメントは、これらのメリット・進展を端的に物語っていると言えるだろう。

どうしても教育活動の中には、活動のその先に何があるのかがボヤっとしたものがたくさんあります。そのボヤっとしたものがロジックモデルを作ることによって、はっきり見えるものが増えたように感じます。

一方で、当然のことながら、LM のデメリットや困難を指摘するコメントもあった。MM 本町小学校の先生方は、概して前向きに LM を活用しておられることから、得られた回答には全体的にポジティブな情報バイアスがかかっていると想定すべきである。この点を考慮すると、デメリットや困難に関するコメントの方がより本質的に重要であると言えよう。LM のデメリットと困難というカテゴリーの中には、LM に対する懸念、LM 作成上の難しさ、そして現実の活用への難しさという3つのサブカテゴリーが見いだせた。以下ではこれらの点を詳細に検討する。

①LM に対する懸念

可視化による硬直性⇒柔軟かつ批判的な思考の重要性

表3右欄にある「可視化することにより逆にそこにはまり、そこから抜けられなくなるのではないか（枠にはめ過ぎてしまわないか）」という懸念は非常に的を射た指摘であり、かつ健康的な懸念であると言える。当然のことながら、「LM を作成すること」や「LM を更新すること」が目的化してしまえば本末転倒であり、LM はよりよい ESD を実施していくためのツールに過ぎない。ここに指摘されているように、LM が ESD の取り組みを束縛するような働き方をするのであれば、そのような LM は不要の長物である。いかなるツールも、利用者がその機能を適切に引き出すことができなければ、ツールに振り回されることになってしまう。このコメントは、LM を適正に活用する上で重要なポイントを指摘している。

一方で、このような懸念が、少なくとも一部の先生方の念頭に常に置かれている間は、安心であるともいえる。実際、今年度の MM 本町小学校では「しなやか部会」のような場で LM を再検討し、批判的に見直す機会を実現していた。ESD の動態性に呼応して、LM も柔軟に変化していくべきであり、その柔軟性にこそ、LM の本質的な意義があるとも言える。

その意義を十分に活かすためには、利用者が柔軟かつ批判的な思考を持ち続けることと、ひとりひとりの柔軟で批判的な思考を、安心して開示し、ぶつけ合える組織文化が守られていることが重要である。

②LM 作成上の難しさ

次に LM 作成上の難しさについては、LM の上位理念から下位の活動へのブレイクダウンに関する問題と、評価アンケートに関する問題が指摘されていた。これらの指摘は、LM を活用しているからこそ直面する課題であり、大変示唆に富むコメントであった。

LM ブレイクダウンの難しさ⇒「指針」による柔軟な適用

まず前提として、MM 本町小学校の場合、「学校全体」の取り組みを LM で俯瞰しようとする、壮大な試みに挑戦しているという点を指摘しておきたい。一般的な LM は、個別の政策やプロジェクトに適用されることが多いので、MM 本町小学校の取り組みは非常に野心的な挑戦であるとも言えよう。ゆえに、上位の目的から下位の活動までの距離が遠く、上位の目的を念頭に置きながらより具体的な教育活動へとブレイクダウンしていくには、途中でブレない論理的一貫性が要求される。いわば、LM の長距離走を走りぬくだけの知的体力が必要となるのである。しかしながら、逆に言えば、そのような過程を十分に経ていない教育活動が、上位の目的と乖離したところで行われてしまいがちであること、そして、それゆえに上位の目的が時間の経過とともに形骸化してしまいがちであることが、腑に落ちるのではないだろうか。逆説的ではあるが、この困難を感じ続けているということこそが、思考停止していないことの証左であるともいえる。

LM 作成上の技術的な点で筆者が感銘を受けたのは、MM 本町小学校の LM には「指針」という、一般的な LM には存在しない項目が設定されていることである。特に小学校の場合、1 年生と 6 年生の間には発達段階に大きな違いがあり、「直接目的」を「活動」にブレイクダウンする際に、学年によって活動の内容や難易度が大きく異なり得る。その自由度を不用意に制限することがないよう、「指針」によって、それぞれのレベルの教育活動における留意点が示されている。ここに示されている「指針」は、アウトカムにみられる大局的な方向性ではなく、直接的に活動に活かされるべき、より技術的な方向性を示している。例えば、資料 I の LM にある「直接アウトカム 01：子どもたちが、社会（まち・ひと）から課題を見出し、解決に向かって試行錯誤しながら活動を進め、自分たちの成長を感じている」に含まれる「0102：具体的な解決方法を試しながら、粘り強く追究している」のなかには、「010203：専門家に出会い、アドバイスをもらいながら活動を進める」という「指針」が示されている。どのような専門家と子どもたちを引き合わせるのか、また、どの程度のレベルの専門性を持ったアドバイスをお願いするのか、といった詳細は、子どもたちの発達段階によって大きく異なることが予想されるが、「専門家という外部リソースから知識と刺激をもらいながら、子どもたちが試行錯誤を繰り返して粘り強く学習に取り組むための機会を創

出しよう」という方向性は、共有することができるだろう¹。

記述回答のなかにあった以下のコメントには、LM 作成のうえで示唆となるポイントが凝縮されている。

アンケートやロジックは素晴らしいものですが、使い方にもっと慎重にもっと丁寧に。自分たちがやることは大胆にと思っています。

まさにここに指摘されている通り、知的体力を最大限に振り絞りながら丁寧に LM を作成し、その使い方には——LM に縛られないように——慎重になりつつ、日々の教育活動においては、大胆に、柔軟に、良い加減で、実践していくことが重要である。

評価アンケートの困難と限界⇒「評価＝事実特定＋価値判断」

ふたつ目の難しさとして指摘されていたのがアンケートの分析についてである。『ESD BOOK feat.MM 2020』にあるとおり、また、本節（2）に見たとおり、MM 本町小学校では、アンケート調査の結果を単なる記述統計として図表化して終えるだけでなく、その結果を次の改善に活かす試みが行われており、既に極めて良質な分析がなされている。しかしながら、それゆえに、より高次の到達点を目標とした困難が表出しているのであろうと推察する。筆者も参加した第7回しなやか部会（2020年10月30日）でも、教育のより本質的な側面や子どもたちの日々の変容をどのように捉えればよいのか、という点が議論になっていた。

端的に言って、アンケート調査で捕捉できる子どもたちの変容や成果には限界がある。子どもたちが集中力をもって回答できるアンケートの質問数にも限りがあるし、活字による表現で聞き取ることができる内容にも限界があり、さらに収集された文字や数字のデータから教員が読み取ることのできる情報にも制約があるだろう。アンケート調査で聞くべき項目（指標）を精査したり、短い質問文を良く推敲してより精緻な質問項目を設定する努力をしたりすることが重要であるのは言うまでもないが、その一方で、アンケート調査およびその分析は、評価の「きっかけ」に過ぎないという認識を持つことも同様に重要である。

評価学で言う「評価」とは、「事実特定」と「価値判断」という二つの要素によって定義される（佐々木 2010）。アンケート調査などをつうじて情報を収集するというプロセスは「事実特定」の一方途である。ここで収集された情報（データ）がそのまま「評価」につながるのではなく、それらのデータおよびその他の情報を総合して「価値判断」を行って始めて「評価」となるのである（米原 2020）。したがって、意味のある、そして改善に役立つ

¹ 現実に、2019年度の活動のなかでは、例えば、4年生の「脱プラスチック・プロジェクト」では木製ストローの専門家が起用され、6年生の「ものづくりからSDGsを考える」という活動では三菱重工やみなとみらい21熱供給などの専門家が起用されて、各学年の発達段階と教育意図に応じた活動が行われていた（2019年度のMM本町小学校『ESD BOOK』を参照）。

評価を行うためには、多様な側面から価値判断を行う必要がある。例えば、MM 本町小学校では、数値的なデータのみにとどまらず、記述的なテキストデータも分析の対象としてテキストマイニングも併用している。さらにより重要なことは、アンケート調査の結果を、本節（２）で見たように、先生方が議論の材料としている点である。この議論の過程で、実は多くの追加情報が付加され（e.g.先生方の経験・実感・見とりによる情報）、より包括的な評価判断が行われ、そこから改善の方向性が生まれている。アンケート調査から明らかになる情報を議論のきっかけとして活用しながらも、以下のコメントに示されているような姿勢で、評価・改善に向き合うことが大切である。

社会情動的スキルである「思いやり」などの項目は、なかなか数値化しにくい部分ですし、学校として評価をすべきではないかもしれませんが、人を育てていく上でとても大切なことなので、どのようにして教育的活動に入れていくのがよいか考えていきたいです。

③現実の活用への難しさ

活用への壁→まずは問題・課題を掘り起こすためのツールとして

重点研などの研究会の場では真剣に議論を行っていても、それが現実の問題解決につながっているのか、日々の教育活動に活かされているのか、と問われれば心許ない…というコメントは、非常に誠実なコメントであると言えるだろう。プログラム評価やそれに基づくLMは、上位の大きな目的を達成するための道のりを可視化・意識化するための思考ツールだが、それ自体が問題の答えを出してくれるものではない。また、LM上の「活動」によっては、日々の教育活動にすぐさま移せるようなものばかりではないかも知れない。「アウトカムは分かるけれど、それに連なる活動が日々の教育活動に移しにくいものばかりだ」という場合は、その活動のレベルを、より実施可能なレベルに練り直す必要があるかも知れない。「指針や活動を意識して取り組んでいるが、なかなか問題解決や状況改善に至らない」という場合は、上位のアウトカムの手段として、その指針や活動が適切でない可能性もある。いずれの場合も、常に批判的にLMを検討し続けることで、潜在的な問題や課題が掘り起こされる可能性が高まる。意識されない問題は永遠に解決されることはない。すぐに問題解決に至らなくても、問題や課題を放置せず、意識化・可視化しておくことに、そして、その問題・課題へのアプローチを具体化しておくことに、一定の意義があるのではないだろうか。

3. 今後の展望——不確実時代のレジリエントな学校へ

本報告書では、昨年度の報告書の続編として、MM 本町小学校のESDスクール・マネジメントがどのように進展してきたかを報告した。特に、単年度で完結する事業との重要な違いとして、MM 本町小学校が、PDCA二巡目への接続の壁をどのように乗り越えたのか、また二巡目を迎えたからこそ見えてきた問題点や課題はどこにあるのか、といった点に注目して報告をまとめた。コロナ禍で学校現場が混乱を極める中、今年度の停滞はやむを得な

いだろうとの筆者の予想を大きく裏切って、創造的な進展を遂げることに成功した MM 本町小学校の小正和彦校長をはじめ、先生方のしなやかなご尽力に、まず何よりも敬意を表したい。

今年度の MM 本町小学校の進展を概観すると、その取り組みの多くが、新学習指導要領で求められていることと合致していることに気付かされる。例えば、小学校学習指導要領解説（総則編）第3章第1節「4. カリキュラム・マネジメントの充実」には、以下のような記述がみられる（p.40：下線部筆者）。

自校の教育課程の編成、実施、評価及び改善に関する課題がどこにあるのかを明確にして教職員間で共有し改善を行う①ことにより学校教育の質の向上を図り、カリキュラム・マネジメントの充実が求められる。（中略）各学校においては、各種調査結果やデータ等に基づき、児童の姿や学校及び地域の現状を定期的に把握②したり、保護者や地域住民の意向等を的確に把握した上で、学校の教育目標など教育課程の編成の基本となる事項を定めていくことが求められる。（中略）組織的かつ計画的に取組を進めるためには、教育課程の編成を含めたカリキュラム・マネジメントに関わる取組を、学校の組織全体の中に明確に位置付け、具体的な組織や日程を決定していくことが重要③となる。（中略）教育課程の編成の基本となる学校の経営方針や教育目標を明確にし、家庭や地域とも共有④していくことが求められる。

下線部①については、ESD ロジックモデルによって、「明確化」と「共有」と「改善」のサイクルが循環していることを、本稿において確認した通りである。②については、評価アンケートによって定期的な現状把握がなされているのみならず、本稿で紹介したように、エビデンスに基づく改善活動が行われており、指導要領が目指すところを超えた領域にまで踏み込んでいる。③については、上述の「しなやか部会」などの「具体的な組織」が学校組織の中に位置づけられ、年間計画のもと、定期的な活動を実施している。そして④に関しては、ESD ロジックモデルや『ESD BOOK feat.MM』の配布・公開によって既に「共有」が進められているところである。

開校から3年が経ち、みなとみらい本町小学校の先生方のあいだに、「評価的思考（evaluative thinking）」が定着しつつあるように見受けられる。評価的思考とは、「知的好奇心とエビデンスの価値に対する信頼に動機付けられた批判的思考」のことであり、この思考は、「仮説を明らかにし、思慮深い疑問を投げかけ、省察と他者視点の取り込みによってより深い理解を追究し、行動に向けて準備することを決意する」ものであると定義されている（Buckley et al. 2015）。まさにこのような思考が先生方の間で共有されていることと、このような思考から生まれる議論・提案・行動を肯定的に受け入れる組織文化およびリーダーシップが存在しているということが、みなとみらい本町小学校を、コロナ禍に負けないレジリエントな学校にしている。

今後は、みなとみらい本町小学校のロールモデルを一般化することも視野に入れて、本調査研究を継続することにより、日本のESDの発展に寄与する「横浜モデル」が形成されていくことが期待される。

引用文献

佐々木亮 (2010) 『評価論理：評価学の基礎』多賀出版。

米原あき (2020) 「データの収集・分析1：量的データ分析」『プログラム評価ハンドブック：社会課題解決に向けた評価方法の基礎・応用』晃洋書房、147-159。

Buckley, J., Archibald, T., Hargraves, M., & Trochim, W. M. (2015). Defining and Teaching Evaluative Thinking: Insights From Research on Critical Thinking. *American Journal of Evaluation*, 36(3), 375–388.
<https://doi.org/10.1177/1098214015581706>

資料 I. みなとみらい本町小ロジックモデル

最上位目的

スーパーゴール 学校教育目標【「みな」と「みらい」を創る子】
 「多様な考えを認められる」「多面的・多角的に物事を捉える」「問いを見い出して学び続ける」「まちに愛着をもつ」「豊かな心をもつ」の5つの資質を育成する。

上位目的

最終アウトカム 社会（まち・ひと）とつながり、多様な文化や価値観を取り入れながら広い視野で物事を捉え、現代社会における課題の解決に向けて行動できる、持続可能な社会形成を担うグローバルな人材が育成されている。

戦略目的

中間アウトカム 「みなとみらい」の豊かな資源を活かした教育活動から、社会（まち・ひと）の課題解決に向けて、さまざまな視点や立場に立ち、多様な他者と考えを連携しながら、地域・保護者・企業をはたらきかけ、社会に変化を起こせる子*1が育っている。 *1 社会に変化=実学





資料 II-a. アンケート調査票（低学年用）



「がくしゅう」や「がっこうのせいかつ」のふりかえりアンケート

低学年

()ねん()くみ()ばん なまえ()

2年生でお返している人は、ぎょねんの学ねん・くみ・ばんごうをかきましょう (1)ねん()くみ()ばん

●がくしゅうのようすについて、しつもんをします。あてはまるものに、○をつけてください。

		5 とても そう思う	4 そう思う	3 どちらとも 言えない	2 そう 思わない	1 全くそう 思わない
問1 経年	じぶんのめあてをもって、べんきょうをしましたか。 <small>0101 発達段階に合った課題を[自ら/主体的に]見出し出している。 (身近なまちや生活を見つめ直し、まちの課題解決に向けて、願いや思いをもつ。)</small>	5	4	3	2	1
問2	どうすればできるのかをかんがえ、けいかくをたてて、べんきょうできましたか。 <small>0102 具体的な解決方法を試しながら、粘り強く追究している。 (計画を立て、課題解決に向けて見直しをもつ。)</small>	5	4	3	2	1
問3	できないことやわからないことは、ほかのやりかたをしたり、人にきいたりして、さいごまであきらめずにできましたか。 <small>0102 具体的な解決方法を試しながら、粘り強く追究している。 (体験したり調べたりするなど、材(ひと・もの・こと)に繰り返し関わる。)</small>	5	4	3	2	1
問4	かいついたら、あたらしいことにちょうせんできましたか。 <small>0103 自分たちの考えや課題を更新しながら、発展的な課題解決学習を進めている (活動を進める中で計画を見直したり、問い続けたりして学習を調整する。)</small>	5	4	3	2	1
問5	とちゅうで、たてたけいかくにつけたしたり、かえたりしながら、べんきょうをすすめられましたか。 <small>0103 自分たちの考えや課題を更新しながら、発展的な課題解決学習を進めている (活動を進める中で計画を見直したり、問い続けたりして学習を調整する。)</small>	5	4	3	2	1
	どうすればできるのかを、かんがえながらべんきょうすることに、たのしさやせいちょうを、かんじられましたか。 <small>0103 自分たちの考えや課題を更新しながら、発展的な課題解決学習を進めている (自分の見方・考え方の広がりや学び方のよさに気付く。)</small>	5	4	3	2	1
問6	どんなことがせいちょうしたとおもいますか（じゅうにかいてください）					



		医学年				
		()ねん()くみ()ばん なまえ()				
		2年生でおぼえている人は、きょねんの字ねん・くみ・ばんごうをかきましょう (1)ねん()くみ()ばん				
直接アウトカム02 子どもたちが、多様な他者とコミュニケーションをはかり、活動の価値に気付いている。		5 とても そう思う	4 そう思う	3 どちらとも 言えない	2 そう 思わない	1 全くそう 思わない
問7	じぶんのかんがえに、りゆうをつけて、ともだちにつたえられましたか。 <small>0201相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いのよさに気付いている。 (模範や理由を示しながら、説得力ある話し方で自分の考えを発表する。)</small>	5	4	3	2	1
問8 経年	グループかつどうや、ヘアがくしゅうでは、ともだちのいけんをききながら、べんきょうできましたか。 <small>0201相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いのよさに気付いている。 (ホワイボード等を活用して、より多数の考えを取り入れた話し合いをする。)</small>	5	4	3	2	1
問9 経年	ちがうがくねんのともだちにも、じぶんからかかわることができましたか。 <small>0201相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いのよさに気付いている。 0202年齢や考えが自分と異なる他者と協働している。</small>	5	4	3	2	1
問10	おうちのひとや、ちいきのひとといっしょにかつどうすることがありますか。 <small>0203地域・保護者と協働している。</small>	5	4	3	2	1
問11	がっこうやともだちのために、じぶんたちができることをおこないましたか。 <small>0204地域社会の課題を理解し、よりよい未来の在り方を考えている。 (保護者・地域への発表や交流を通して、自分たちの活動が社会の役に立っていることがわかる。)</small>	5	4	3	2	1
問12	がっこうやまちのことにきょうみをもって、ぎょうじやイベントにすすんでさんかできましたか。 <small>0204地域社会の課題を理解し、よりよい未来の在り方を考えている。 (地域の行事やイベントに進んで参加し、ESDの取組を発信したり行動したりする。)</small>	5	4	3	2	1
問13	ともだちやがくねんのちがう人といっしょにべんきょうすることが、たのしいとおもいますか。 <small>直接02子どもたちが、多様な他者とコミュニケーションをはかり、活動の価値に気付いている。</small> どんなことが、たのしいとおもいますか(じゆうにかいてください)	5	4	3	2	1

直接アウトカム02 子どもたちが、多様な他者とコミュニケーションをはかり、活動の価値に気付いている。		5 とても そう思う	4 そう思う	3 どちらとも 言えない	2 そう思わ ない	1 全く そう思わ ない
問7	自分の考えの根拠や理由をそえて、考えを伝えることができましたか。 0201相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いのよさに気付いている。 (根拠や理由を示しながら、説得力ある話し方で自分の考えを発表する。)					
問8	友達の意見を受け入れたり、一緒に考えたりして、学習に取り組みましたか。 0201相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いのよさに気付いている。 (ホワイトボード等を活用して、より多数の考えを取り入れた話し合いをする。)					
問9	学年や立場にかかわらず、互いのよさに気付いて学び合うことができましたか。 0201相手意識をもって話したり共感的に聞いたりして、互いのよさに気付いている。 0202年齢や考えが自分と異なる他者と協働している。					
問10	家や地域の人に、自分たちの活動へ協力（参加）してもらえていますか。 0203地域・保護者と協働している。					
問11	自分たちの活動が、まちの人や社会の役に立っていると思いますか。 0204地域社会の課題を理解し、よりよい未来の在り方を考えている。 (保護者・地域への発表や交流を通して、自分たちの活動が社会の役に立っていることがわかる。)					
問12	地域の行事やイベントに進んで参加し、ESDの取組を発信したり行動したりできましたか。 0204地域社会の課題を理解し、よりよい未来の在り方を考えている。 (地域の行事やイベントに進んで参加し、ESDの取組を発信したり行動したりする。)					
問13	友達や学年のちがう人と一緒に活動することに、よさを感じていますか。 直接02子どもたちが、多様な他者とコミュニケーションをはかり、活動の価値に気付いている。 どんなよさがあると思いますか（自由に書いてください）					

第3章

持続可能な開発のための教育（ESD）に関する
質問紙調査の結果（速報）

持続可能な開発のための教育（ESD）に関する質問紙調査の結果（速報）

北村友人、佐々木織恵、八木恵里子
（東京大学大学院教育学研究科）

2020年10月に横浜市のESD推進校を対象として、児童・生徒と教師の「ESDに対する知識・態度・行動」に関する質問紙調査を実施した。本調査は、「持続可能な開発」の概念を構成する環境・経済・社会の3領域を踏まえて、地球規模課題として広く認識されている諸問題に関して児童・生徒や教師がどのような知識を有しており、それらの問題に対応するためにいかなる態度や行動をとっているのかという実態を把握し、今後の課題を明らかにすることを目的として行った。その際、知識については地球環境や国際社会に対する認知度、態度や行動に関しては日常的な学習場面や生活場面において、どのような態度・行動をとっているかについて尋ねた。

調査の概要は、以下の通りである。なお、この調査結果に関して、本稿はあくまでも2021年1月末時点における速報であり、今後、詳細な分析を行った論考を横浜市教育委員会ならびにESD推進校に提出するとともに、学術誌等に研究成果として発信していく予定である。

調査概要

調査時期	• 2020年10月~11月
調査方法	• 質問紙調査
調査対象	• 令和2年度横浜市ESD推進校22校(小学校15校、中学校7校) • 児童・生徒:2,631人(小5:1,358人、中1・中2:1,273人) • 教師:683人(小学校450人、中学校233人)
回答数と回答率	• 令和2年度横浜市ESD推進校21校(小学校15校、中学校6校) • 児童・生徒:2365人、89.9%(小5:1,268人、中1・中2:1,097人) • 教師:378人、55.3%(小学校275人、中学校103人)

児童・生徒の知識・態度・行動

児童・生徒の知識・態度・行動に関する質問への回答を見ると、態度や行動の面では平等性や多様な価値観を重視し、環境保全に積極的に取り組み、多様性に関わった行動を取る傾向が見られた。その一方、知識に関しては格差や不平等に関する知識は身に付けているが、環境・経済・社会の相互関連性や自分自身の行動とそれらの関連性について十分に理解をしているわけではないと感じていることが見て取れた。学校ででも、校内での環境保全に関わる取り組みには積極的に取り組んでいるが、地球規模課題についての授業では受動的な態度である可能性が示唆された。

とりわけ、ESD 推進校において「ホールスクールアプローチ（機関包括方アプローチ）」による ESD の取り組みが積極的に進められており、そのことが小中の各学校段階に共通して、児童・生徒の知識・態度・行動の全てに対してポジティブな影響を及ぼしていることが、今回の調査結果から明らかになった。また小学校では ESD/SDGs 関連の取り組みも児童の知識や態度にプラスの影響を与えている。このように、ESD 推進校における学びの体験が一定の成果を上げており、持続可能な社会の実現に貢献するような方向に向かっていていると考えられる。

一方、汎用的能力の育成や世界的課題についての知識の伝達といった教師の教育実践が必ずしも児童生徒の知識、態度、行動に結びついているとは言えない可能性も示唆された。その原因として、地球規模課題として挙げられる諸問題が、この年代の子どもたちにとっては馴染みが薄く難度の高いものであることに、まずは留意する必要がある。とりわけ「知識」に関しては、児童・生徒に地球規模課題についてどのくらい知っているかを問いた「意識」の結果であって、実際の「知識」の多寡を検証しているわけではないことにも注意を払う必要がある。すなわち、子どもたちの学びが深まるなかで、世の中には難しい問題がたくさんあることを理解し、自分はまだ知らないことが多いということを謙虚に受け容れる意識が働いている、といった可能性についても、今後さらに検証していくことが欠かせない。

なお、知識を得た場所に関する回答で、「学校の授業や活動」を挙げる児童・生徒が多かったが、これは私たちの研究チームが東京都で実施した同様の調査と比較して、明らかに横浜市の ESD 推進校の特徴であると言える。このことは、ESD 推進校での取り組みが、子どもたちにとって重要な学びの機会となっていることを示唆している。

教師の知識・態度・行動

教師の知識・態度・行動に関する回答を見ると、ESD に取り組むなかで対話や多様性の尊重などは身につけているが、グローバルな課題についての関心や具体的な教授法・指導方法の理解は未だ不十分であると感じていることがわかる。とくに、コミュニケーション能力など汎用的能力の育成や公平性や共感といった価値観の醸成には力を入れて取り組んでいるが、世界的課題に関する知識の伝達には必ずしも十分に取り組んでいないと考えていることが見て取れる。このことは、日常の文脈に関連づけることがより容易な知識や活動に関しては、積極的に教育実践のなかに取り入れているものの、日常との関連が薄い地球規模課題に関しては、必ずしも十分に取り入れることができている様子からも推測できる。

また、環境・経済・社会の相互関連性や、自分自身の知識や行動とそれらの関連性への理解が十分ではないと感じていることがわかる。このことは、個別具体のトピックに関しては一定の理解をしたうえで学習や活動のなかに取り入れているが、それらをより俯瞰的な視点から関連性を明らかにしたうえで、教科や領域を横断しながら繋げるといったことが、未だ十分にできてはいないと解釈できる。したがって、まさに ESD の特色である「つなげて、ひろげる」といった取り組みを、今後さらに積極的に行っていくために、教師の「グローバ

ル課題に関する関心や理解」を高めていくことの必要性を指摘しておきたい。

さらに、ESDに関する研修をより多く受けている教師ほど、ESDを実践するための知識や教授法について必ずしも十分な理解をできていないと感じていることがわかる。これは、さらなる分析が必要ではあるが、考えられる解釈としては、これまで自分が知らなかった教授法について学ば学ぶほど、自らに足りないものに気づいた結果であると推察される。これは、研修が教師たちにとって新たな教授法を学ぶことへの動機づけを高める効果を上げている可能性を指摘しておきたい。今後はトピックベースの研修から、身につけさせたい教師の資質能力の全体像に基づいた体系的な研修への転換も必要であろう。

校種別・担当教科別の傾向

以下に、小学校と中学校との間で見られた傾向の違い、ならびに、担当教科別に見られた傾向の違いについて、気づいた点を挙げておく。

- ・ 「紛争と平和・人権」「貧困や不平等」「情報リテラシー」といったテーマに関する学習は、小学校より中学校の方でより積極的に取り上げられている。他方、「SDGsに関する行動変容」「学校内での環境配慮の取り組み」「地域や保護者との協力」については、中学校より小学校の方がより積極的に取り組んでいる傾向が見られる。
- ・ 「教科横断／統合型学習」「個別指導」「体験/校外学習」「外国語を使用した学習」のいずれも、小学校の教師の方が中学校の教師よりも力を入れて取り組む傾向が見られる。
- ・ 学校全体としてのESDやSDGsに関する取り組みについては、ほとんどすべての項目で小学校の方が中学校よりも積極的に取り組んでいる傾向が見られた。
- ・ 文系科目（国語・社会・英語）の教師の方が、理系科目（数学・理科）の教師よりも、貧困問題、食糧問題、労働問題、相互依存、多様性の尊重、平和、民主主義、格差といった今日の社会的課題に関して、教育実践のなかで取り上げるうえでの知識を持っていると認識する傾向が見られた。
- ・ 文系科目の教師の方が、紛争・平和・人権の問題、多様性に開かれた態度、地球規模の課題の解決、固定観念にとらわれない思考の育成に、より積極的に取り組んでいる傾向が見られる。
- ・ 文系科目の教師の方が、児童・生徒主導型の学習や活動、外国語を使用した学習、発表の機会の提供に、より積極的に取り組む傾向が見られる。

本稿で概説したことは、本調査の結果に関する速報であり、今後さらに詳細な分析を行っていくことが欠かせない。とはいえ、この速報をまとめるだけでも、横浜市のESD推進校において積極的に取り組まれているESDのポジティブな影響が、子どもたちの態度や行動に現れていると理解できる。

また、推進校においては ESD の実践を進めるにあたって、日常的な文脈のなかで子どもたちが理解しやすく、取り組みやすいことを中心に据えている様子も伺えた。子どもたちの発達段階に合わせて、まずは身近な問題を理解するとともに、より複雑な問題に対応していくための汎用的な能力を身につけることを重視する取り組みを高く評価したい。そのうえで、そうした取り組みが児童・生徒の知識・態度・行動に結びつくためには、今後も領域横断・教科横断的な学びの機会を積極的に創出し、さらには、子どもたちの日常的な文脈からは距離のある地球規模課題についても「自分事」として捉えられるように促していくことが必要であろう。

謝辞

本調査の実施にあたっては、横浜市教育委員会ならびに横浜市 ESD 推進校の関係者の皆さまに、多大なご支援とご協力を賜りました。また、調査の過程を通して佐藤真久・東京都市大学教授のご支援をいただくと共に、質問紙の作成やデータの分析にあたっては米原あき・東洋大学教授のご協力をいただきました。これらの皆さまに、深甚なる謝意を表します。

⑩=1

Q1 はじめに、現在の先生ご自身についてお聞かせください。

5) ～9) については、あてはまる選択肢に○をつけてください。

(5, 6, 8, 9) は○はそれぞれ一つ、7はあてはまるものすべてに○をつけてください)

1) 教職経験年数 (※臨時採用期間、非常勤期間を含みません) _____年目

臨時採用期間、非常勤期間がある場合、その期間 _____年間

2) 現在の学校での在職年数 _____年目

3) 校歴 _____校目

4) 年齢 _____歳

5) 性別 1 男性 2 女性 3 その他

6) 職位 1 主幹教諭 2 指導教諭 3 主任教諭 4 教諭もしくは助教諭 5 その他 ()

7) 職責 1 学年主任 2 教務主任 3 児童・生徒指導 (生活指導) 主任
4 進路指導主任 5 研究主任 6 ESD 主任 7 その他 ()
8 該当なし

8) 校種・教科 (※ 中学校の先生はカッコ内に教科名もお書きください。)

1 小学校 2 中学校
教科 ()

9) 2020 年度の担任の状況

1 担任を持っている …… 担任しているクラス：_____年_____組
2 副担任を持っている
3 担任は持っていない

10) SDGs・ESD に関する研修への参加回数 (※受講も開催もしていないものは0回と記入してください)

	① 教員になってから 現在までの 受講・開催回数	② ①のうち、 現任校に着任してからの 受講・開催回数
1. 外部団体が主宰するSDGsやESDに関する研修(ユネスコ協会等による研修等)	回	うち 回
2. 教育委員会が主宰するSDGsやESDに関する研修	回	うち 回
3. SDGsやESDに関する校内研修	回	うち 回

Q2 以下の各項目について、先生ご自身について、「1 そう思わない」から「5 そう思う」の5段階でお答えください。(○はそれぞれ一つ)

	1 そう 思わ ない	2 ど ち ら か と い う と そ う 思 わ な い	3 ど ち ら か と い う と	4 ど ち ら か と い う と そ う 思 う	5 そ う 思 う
1 私(は、子どもや教職員、外部人材(地域人材や専門家)との対話を大事にしている	1	2	3	4	5
2 私(は、自分と異なる考えについても公正、対等な意見として扱っている	1	2	3	4	5
3 私(は、児童・生徒の気づきや変化に基づき、自らの教育実践の在り方を振り返っている	1	2	3	4	5
4 私(は、学び続けることに意欲があり、積極的に学習機会を探し参加している	1	2	3	4	5
5 私(は、国や民族等により文化も習慣も異なっても、互いの違いを認め合うことを大切にしている	1	2	3	4	5
6 私(は社会の不平等に課題意識を持っており、それが私の行動の原動力となっている	1	2	3	4	5
7 私(は、環境破壊や経済格差など、将来の世界に対して危機感を抱いている	1	2	3	4	5
8 私(は、SDGsをはじめとする地球規模の課題に関心があり、自分なりの理解を深めている	1	2	3	4	5
9 私(は、SDGsをはじめとする地球規模の課題を授業や学習に取り入れるための教授法を理解している	1	2	3	4	5
10 私(は、環境に責任を持つ能動的な地球市民としての児童・生徒の成長を支援する方法を理解している	1	2	3	4	5
11 私(は、児童・生徒の学びや挑戦を促すために、教育システムや教授法は変容していく必要があると思う	1	2	3	4	5
12 私(は、予測不可能な状況の中でも、人、社会、自然環境のために思慮深く行動していきたい	1	2	3	4	5

Q3 以下の各項目について、先生ご自身は授業でこれらを取り扱うために必要な知識や理解をお持ちだと思いますか。自己評価で構いませんので、「1 全くない」から「5 十分ある」の5段階でお答えください。

(○はそれぞれ一つ)

	全くない	あまりない	どちらともいえない	ある程度ある	十分ある
1 気候変動など、持続可能性に関連した地球環境問題について	1	2	3	4	5
2 資源の有限性と再利用の可能性について	1	2	3	4	5
3 貧困や社会の不平等による、食糧や医療の不足の問題について	1	2	3	4	5
4 環境問題と生物多様性の関連について	1	2	3	4	5
5 災害への対処方法について	1	2	3	4	5
6 企業による経済活動や自治体による都市開発が地球環境に与える影響について	1	2	3	4	5
7 失業や低賃金、劣悪な労働条件といった、労働問題について	1	2	3	4	5
8 人や国、環境、世代間の相互依存関係について	1	2	3	4	5
9 異なる国や文化の尊重について	1	2	3	4	5
10 平和や人権、民主主義の思想について	1	2	3	4	5
11 ジェンダー格差の問題について	1	2	3	4	5
12 教育の機会や質に関わる格差等、世界の教育問題について	1	2	3	4	5
13 SDGsについて	1	2	3	4	5
14 自分自身と環境、経済、社会のシステムの相互関連性について	1	2	3	4	5
15 持続可能な発展に自らの生活や思考様式が与える影響について	1	2	3	4	5

Q4 以下の各項目について、これまで、授業やその他の教育活動でどれくらい力を入れて取り組ましましたか。「1 全く力を入れて取り組まなかった」から「5 とても力を入れて取り組んだ」の5段階でお答えください。取り組んだことがない場合は「0 取り組んだことがない」に○をつけてください。(○はそれぞれ一つ)

⑩=2

	全く力を入れて取り組まなかった	あまり力を入れて取り組まなかった	どちらともいえない	まあまあ力を入れて取り組んだ	とても力を入れて取り組んだ	取り組んだことがない
1 紛争と平和、人権の問題について自分事として捉えさせることについて	1	2	3	4	5	0
2 将来の持続可能性について考える視点を学習に取り入れることについて	1	2	3	4	5	0
3 経済成長の可能性と限界を考えさせることについて	1	2	3	4	5	0
4 貧困や不平等などの問題を自分事として捉えさせることについて	1	2	3	4	5	0
5 異なる考え方や社会の中で出会う様々な「違い」(文化、性、宗教など)に対して肯定的な姿勢を養うことについて	1	2	3	4	5	0
6 競争と共生、消費と節約など矛盾が生じる場面を学習に取り入れることについて	1	2	3	4	5	0
7 SDGsをはじめとする地球規模の課題の解決のために地域でできることを考えさせることについて	1	2	3	4	5	0
8 SDGsについて児童・生徒が学習して自分なりの考えをもって行動の変革に取り組むことについて	1	2	3	4	5	0
9 正解のない課題についても議論するなど、児童・生徒が固定観念にとらわれない思考ができるよう支援することについて	1	2	3	4	5	0
10 コミュニケーション、チームワーク、計画立案、問題解決など、児童・生徒の汎用的能力を養うことについて	1	2	3	4	5	0
11 児童・生徒が公平性や共感といった価値観を育てるよう支援することについて	1	2	3	4	5	0
12 子どもたちが当事者意識をもって環境問題について考えたり行動したりできるような機会を設定することについて	1	2	3	4	5	0
13 情報リテラシー(情報源や情報の信頼性・可変性等)について理解させることについて	1	2	3	4	5	0
14 学校で資源(消耗品、水、エネルギー)の消費削減やリサイクル、給食の食べ残しの削減を実践することについて	1	2	3	4	5	0
15 ESDの取り組みの中で、地域住民や保護者と協力することについて	1	2	3	4	5	0
16 ESDの取り組みの中で、地域の団体や国際的な組織と連携することについて	1	2	3	4	5	0

Q 5 以下の教育方法に、これまで、どれくらい力を入れて取り組ましましたか。

「1 全く力を入れて取り組まなかった」から「5 とても力を入れて取り組んだ」の5段階でお答えください。取り組んだことがない場合は「0 取り組んだことがない」に○をつけてください。(○はそれぞれ一つ)

	全く力を入れて取り組まなかった	あまり力を入れて取り組まなかった	どちらともいえない	まあまあ力を入れて取り組んだ	とても力を入れて取り組んだ	取り組んだことがない
1 児童・生徒主導型の学習や活動	1	2	3	4	5	0
2 探究学習・課題解決型の学習	1	2	3	4	5	0
3 教科横断型・教科統合型学習	1	2	3	4	5	0
4 個別学習・個人差に応じた学習指導	1	2	3	4	5	0
5 体験学習や校外学習	1	2	3	4	5	0
6 視聴覚教材やICTを使った学習	1	2	3	4	5	0
7 学年や学級を超えた活動(行事等含む)	1	2	3	4	5	0
8 外国語を使用した学習	1	2	3	4	5	0
9 プレゼンテーションなど、児童・生徒が自分の考えや意見を発表する機会の提供	1	2	3	4	5	0

Q 6 先ご自身から見た貴校のESDやSDGsに関する取り組みについてお伺いします。以下の各項目について、「1 そう思わない」から「5 そう思う」の5段階でお答えください。分らない場合は「0 分らない」に○をつけてください。

※コロナ禍以前の状況を念頭においてご回答ください。

(○はそれぞれ一つ)

	そう思わない	どちらかといえない	どちらともいえない	どちらかといえは	そう思う	分らない
1 校長は、持続可能な開発のための教育(ESD)を促している	1	2	3	4	5	0
2 ESDに関して、自分がやりたいと思う教育活動を挑戦できる環境が整っている	1	2	3	4	5	0
3 学校経営計画、教育課程、年間指導計画に、管理職以外の教員の意見が反映されている	1	2	3	4	5	0
4 ESDを行うための時間が十分に確保されている	1	2	3	4	5	0
5 ESDを行うための教材や情報が十分にある	1	2	3	4	5	0
6 ESDを促しているミドルリーダーがいる	1	2	3	4	5	0
7 SDGsをはじめとする地球規模の課題についての学習と教育活動が学校経営計画に組み込まれている	1	2	3	4	5	0
8 SDGsをはじめとする地球規模の課題についての学習と教育活動が教育課程上に位置付けられている	1	2	3	4	5	0
9 SDGsをはじめとする地球規模の課題についての学習と教育活動が年間指導計画に組み込まれている	1	2	3	4	5	0
10 貴校で取り組んでいるESDの内容について、児童・生徒や保護者と共有されている	1	2	3	4	5	0
11 学校評価等でSDGsをはじめとする地球規模の課題についての学習と教育活動について評価の機会がある	1	2	3	4	5	0
12 SDGsをはじめとする地球規模の課題についての学習と教育活動を実施するために、他の教職員と協力しやすい雰囲気がある	1	2	3	4	5	0
13 ESDの団体や国際的な組織と連携しやすい体制が整っている	1	2	3	4	5	0
14 児童・生徒がSDGsをはじめとする地球規模の課題について、委員会活動等を通して自ら活動を進めようとする学校風土がある	1	2	3	4	5	0
15 SDGsをはじめとする地球規模の課題についての学習や教育活動に関する情報交換をするための国際交流や、他校とのネットワークワーキングの機会がある	1	2	3	4	5	0

Q 7 新型コロナウイルスの影響についてお伺いいたします。以下の各項目について、昨年度と比べて「1 かなり減った」から「5 とても増えた」の5段階でお答えください。もともと行っていない場合は「0 もともと行っていない」に○をつけてください。(○はそれぞれ一つ)

	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	とても増えた	もともと行っていない
1 教科横断的な学びの時間	1	2	3	4	5	0
2 体験学習や校外学習などの時間	1	2	3	4	5	0
3 外部人材、地域人材の活用	1	2	3	4	5	0
4 児童・生徒主導型の学習や活動	1	2	3	4	5	0
5 探究学習・課題解決型の学習の機会	1	2	3	4	5	0
6 ESD のための ICT の活用	1	2	3	4	5	0
7 ESD 以外の教育活動における ICT の活用	1	2	3	4	5	0
8 SDGs をはじめとする地球規模の課題を子どもたちが身近に捉える機会	1	2	3	4	5	0
9 学校として ESD に取り組む機運	1	2	3	4	5	0

83 児童生徒向け調査票

【質問1】 次の1から13に書いてあることについて、あなたはどれくらい知っていますか？ それぞれについて、一番あてはまる番号1つずつに○をつけてください。

	全く知らない	よく知らない	どちらとも言えない	知っている	よく知っている
1. 地球環境問題にどのようなものがあるのか	1	2	3	4	5
2. 水やエネルギーといった資源(自然から手に入れることができるもの)には限りがあること	1	2	3	4	5
3. 貧しさや差別のために、十分な食べ物がないかったり、病院に行くことができなかつたりする人がいること	1	2	3	4	5
4. 環境問題と動物や植物のくらしには、どのような関係があるのか	1	2	3	4	5
5. 自分の住んでいる地域で自然災害が起きたときに自分の身を守る方法	1	2	3	4	5
6. 会社、工場やお店、自治体(町や市など)が行うまちづくりやものづくりは、環境に影響があること	1	2	3	4	5
7. 仕事が多かつたり、少ないお金や厳しい条件で働く人も多くいること	1	2	3	4	5
8. 自分の毎日の行動が、外国の人たちの生活や地球環境に関係していること	1	2	3	4	5

(【質問1】の続き)

	全く知らない	よく知らない	どちらとも言えない	知っている	よく知っている
9. 異なる文化を持つ人や国をみとめ合うこと	1	2	3	4	5
10. 選挙に行けたり、自分の意見を自由に言えたりすることができない国の人もいること	1	2	3	4	5
11. 性別によって差別を受けたり、平等な権利を得られない問題	1	2	3	4	5
12. 世界には学校に行きたいのに行けない子どもたちもいること	1	2	3	4	5
13. SDGs(持続可能な開発のために、世界の国々が2030年までに達成することに同意している17の目標)について	1	2	3	4	5

【質問2】 あなたは、先ほどの【質問1】の1～13にあるような、世界で起きている問題について、どこで知りましたか？

次の1～6の中から、あてはまるすべての番号に○をつけてください。覚えていない、わからない場合は、「7. 覚えていない・わからない」に○をつけてください。
(6を選んだ人は、どこで、またはどのように知ったか、わくの中記入してください。)

1. 学校の授業や活動で知った
2. テレビ、ラジオ、新聞で知った
3. インターネット/ソーシャルメディア(SNSなど)で知った
4. 友だちや家族から知った
5. 学校の外で行われるイベントなどで知った
6. その他の場所や方法で知った
↳どこで/どのように知りましたか。
7. 覚えていない・わからない

□

【質問3】 あなたは、次の1から14に書いてあることについて、どう思いますか？
それぞれについて、あなたの考えに一番あてはまる番号1つずつに○をつけてください。

	全くそう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	強くそう思う	わからない
1. 世界で起こっている問題はわたしの生活にも関係する	1	2	3	4	5	6
2. なるべく資源(自然から手に入れることができるもの)のむだ使いはやめようと思う	1	2	3	4	5	6
3. 質(かさ)の少ない平等な世界にしたい	1	2	3	4	5	6
4. わたしは自分の住んでいる地域の人のためになることをしたい	1	2	3	4	5	6
5. わたしと外国の人たちには似ているところがある	1	2	3	4	5	6
6. 外国の人たちのことについてもっと知りたい	1	2	3	4	5	6
7. 未来の世界でも今と同じように生活できたらいいと思う	1	2	3	4	5	6
8. 地球環境をまもるための法律や規則が必要だと思う	1	2	3	4	5	6
9. 少ないお金や厳しい条件で働く人もいることは仕方がないことだと思う	1	2	3	4	5	6
10. 会社、工場やお店、自治体(町や市など)は資源のむだ遣いをしないほうがいいと思う	1	2	3	4	5	6
11. ある一つの問題に対して、いろいろな意見や考え方があると思う	1	2	3	4	5	6
12. 世界中のすべての人が、男女関係なく学校に行ったり働いたりできるといいと思う	1	2	3	4	5	6
13. わたしにはSDGs(持続可能な開発のために、世界の国々が2030年までに達成することに同意している17の目標)の達成を目指して協力する責任があると思う	1	2	3	4	5	6

14. 自分の学校で何か問題があれば、わたしはその問題をみんなと一緒に解決できると思う	1	2	3	4	5	6
---	---	---	---	---	---	---

【質問4】 あなたは、学校で次の1から6に書いてあることについて経験がありますか？
経験があるものについては、どのくらい真剣に取り組みましたか？
それぞれについて、あてはまるもの1つずつに○をつけてください。

	はい			わからない			いいえ		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3
1. 日本や世界で起こっている様々な問題の大切さがわかるような授業や総合的な学習の時間、学級活動があった	1	2	3	1	2	3	1	2	3
2. 日本や世界で起こっている様々な問題について、授業の中で質問したり、自分の意見を言ったりした	1	2	3	1	2	3	1	2	3
3. 日本や世界で起こっている様々な問題について調べて発表した	1	2	3	1	2	3	1	2	3
4. 情報がどこから来たのか、どの情報を信じてよいか、情報には間違ったものもあるかもしれないということを習った	1	2	3	1	2	3	1	2	3
5. 学校で節水や節電、給食の食べ残しを減らすことに取り組んだ	1	2	3	1	2	3	1	2	3
6. 環境を保護するため、よりよい社会をつくるための活動を計画したり実行したりした	1	2	3	1	2	3	1	2	3

【質問5】あなたは、次の1から10に書いてあることを、どのくらいしていますか？
それぞれについて、一番あてはまるもの1つずつに○をつけてください。

	一度もない	あまりしない	ときどきする	たいていする	必ず・いつもする
1. プラスチックゴミを出さないように水筒やエコバックを持ち歩いている	1	2	3	4	5
2. ゴミを捨てるときはリサイクルや再利用ができるものを分けている	1	2	3	4	5
3. 水や電気のむだ遣いをしないようにしている	1	2	3	4	5
4. 健康や環境に悪い影響を与えらると思うもの(服、電化製品、食べ物など)は選ばないようにしている	1	2	3	4	5
5. ものを大切に使い続けたり、必要以上に買わないようにしている	1	2	3	4	5
6. 日本や世界で起こっている様々な問題について、キャンペーンやデモに参加している	1	2	3	4	5
7. 国際的な機関やチャリティ団体(ユニセフなど)に寄付や募金をしている	1	2	3	4	5
8. 日本や世界で起こっている様々な問題についてニュース番組を見たり、新聞記事を読んだりしている	1	2	3	4	5
9. 性別や国(人種)、身なりや障がいの有無など、生まれ育ちに関係なく、だれに対しても同じように接している	1	2	3	4	5
10. 相手のことを理解するために、相手の立場になって考えている	1	2	3	4	5

【質問6】今年、新型コロナウイルスの影響によって学校が休校になったり、学習の仕方が変わったりしました。
そのなかで、あなたの学校での学習や、あなたの世界についての見方は、どのように変化しましたか。
次の1から6に書いてあることのうち、あてはまるものすべてに○をつけてください。1~6に当てはまるものがない場合は、「7. とくに変化したことはない」に○をつけてください。

(6を選んだ人は、どのように変わったかわくの中に記入してください。)

1. 調べ学習や課題をするときに、パソコン、タブレット、スマートフォンなどを使うことが多くなった	5. 病気や健康に対して今までよりも気を付けるようになった
2. パソコン、タブレット、スマートフォンなどのオンラインでの調べ学習の時間は楽しいと思っている	6. 発表やグループワークの方法が変わったか。 ↓ 具体的などのようになら変わったか。 <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 40px; margin: 5px 0;"></div>
3. 休校中の家庭学習やオンライン学習でも、環境や貧しさ、差別や紛争など、日本や世界で起きている問題について学んだ	7. とくに変化したことはない
4. 新型コロナウイルスのニュースをみて、世界はつながっていると感じた	

□

第4章

本年度の横浜市ESD推進コンソーシアムの取組
(教育委員会としてのESD推進)

2020年度の横浜市の
SDGs達成の担い手育成（ESD）
推進の発信・交流の場

横浜市 ESD 推進コンソーシアム 交流報告会



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンライン（Zoom）
で実施します。なお、今年度は児童生徒の交流報告会は公開しません。

2021年1月30日（土）13:00～16:00（当日は12:30から入室できます。）

▶ 講演

- ・SDGs達成の担い手育成（ESD）とロジックモデルを用いたプログラム評価の実際

東洋大学教授 米原 あき 氏

- ・国連大学研究によるESD/GCED 調査結果から見てきたこと

東京大学准教授 北村 友人 氏

▶ 実践報告とグループ協議

- ・横浜市立SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校の実践報告とグループ協議

SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校教職員

▶ 総評

- ・各校の実践報告を受けての総括とこれからの社会に求められること

東京都市大学教授 佐藤 真久 氏

下の二次元コード・URL からアクセスをして申し込みをしてください。Zoom ミーティング ID・パスワードをお送りします。

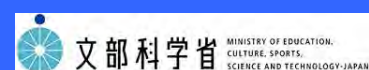
申し込み期日 2021年1月25日（月） 参加人数に上限があるため、期日前に申し込みを終了することもあります。

申し込みURL

<https://www.e-shinsei.city.yokohama.lg.jp/yokohama/uketsuke/dform.do?id=1610414009896>



主催 横浜市教育委員会
お問合せ 小中学校企画課 045-671-3265
E-mail ky-esd@city.yokohama.jp



本事業は文部科学省のSDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業として行われています。

横浜市 ESD 推進コンソーシアム交流報告会

日時：児童・生徒の部 2021年1月26日（火）・28日（木），2月3日（水）・4日（木）・5日（金）

教職員の部 2021年1月30日（土） 13時～16時

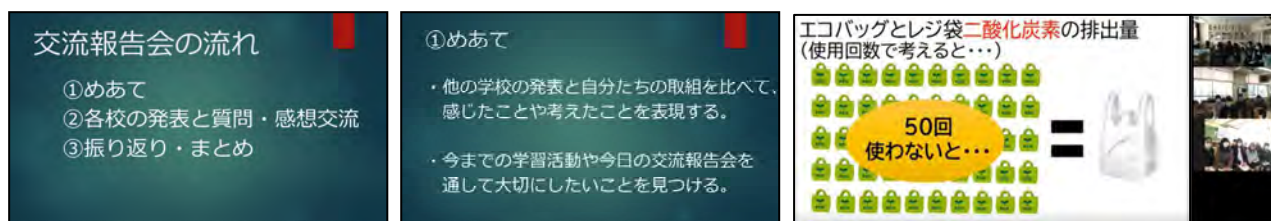
会場：オンライン開催（発表、講演者は市庁舎 18階共用会議室みなと6・7）

○ はじめに

今年度は、COVID-19 感染拡大防止のため、初めてオンラインで実施した。児童・生徒の部は、小学校は第5校時（5日間）に、中学校（1日）は放課後に3～5校が集まって実施した。参加は任意（環境教育実践推進校含む）とし、事前に撮影した動画での開催も採用した。

I 児童・生徒の部（1月26日～2月5日）

各回、動画発表校を含めて3校に分かれて、「発表、質問・感想交流」を行った。率直な質問や意見のやり取りをする中で、自分たちの活動を見直し、新たな課題を発見したり、これからの活動の方向性を考えたりすることに繋げることができた。



【各回の参加校と発表テーマ】

日 時	学校名	発表テーマ
1月26日（火） 13時30分～14時20分 港南台第三小・東高 動画発表	相沢小学校①②	6-1 6-2 「あいざわのまち SDGs 宣言」
	矢向小学校	「い草の魅力を通して、まちの方々を笑顔にしよう」
	幸ヶ谷小学校①	5-3 「地球のみんなにやさしい生活づくり」
	中尾小学校①	5-2 「水産業の未来の資源を守る～自分たちにできること～」
1月26日（火） 16時～16時30分	市ヶ尾中学校	「With コロナ～新たな可能性」
	中川西中学校	「SDGs に対する意識向上プロジェクト」
	中和田中学校	「学校保健委員会（エコバッグ作製）」 「中庭再生プロジェクト」
1月28日（木） 13時30分～14時20分 東高動画発表	荏田西小学校	「委員会活動の紹介、服のプロジェクトの取組について」
	三保小学校①②	6-3 「『我がまちふるさと三保』から行動しよう」 6-4 「世界の課題に立ち向かえ『我がまちふるさと三保へ』」
2月3日（水） 13時30分～14時20分 東高動画発表	恩田小学校	「竹公房～いやしの空間を創ろう」
	南本宿小学校	「水田活動と SDGs」
	幸ヶ谷小学校②	5-4 「他人事にしらない地球温暖化プロジェクト」
	中尾小学校②	4年 「マイクロプラスチックを減らして未来を変えよう」
2月4日（木） 13時30分～14時20分 東高動画発表	三保小学校③	6-2 「伝えよう 残そう 三保の魅力」
	羽沢小学校	「はざわ知名度爆上げ大作戦！」
	幸ヶ谷小学校③	5-1 「コロナ不安をなくし、みんなが『しあわせ』になれる世界にしよう」
〃 ④	5-2 「未来につなげる すごしやすいまち」	

日時	学校名	発表テーマ
	中尾小学校③	5-1「私が伝えたいこと～資料が教えてくれる SDGs～」
	みなとみらい本町小	「自然大好き3年生」
2月5日(金) 13時30分～14時20分 港南台第三小・東高 動画発表	永田台小学校	「この木なんの木気になる木～4の1樹木で輪和笑～」
	三保小学校④	6-1「考えよう 世界の課題 見つけよう 三保の魅力」
	大門小学校①②	3-1「みりょく発信！瀬谷観光パンフレット」 4-3「バイオプロジェクト」
	神奈川小学校	総合「浦島太郎について調べよう」

II 教職員の部（1月30日）

77人から参加申込みがあった。講演と実践報告、グループ協議、総括の構成で実施した。

本日の流れ（前半）	
13:05	米原先生 高原先生 ご講演 「SDGs達成の担い手育成（ESD）と ロジックモデルを用いたプログラム評価の実際」
13:40	北村先生 ご講演 「国連大学研究によるESD/GCED調査結果から 見えてきたこと」
14:15	休憩 5分

本日の流れ（後半）	
実践報告「ESDによって引き出すことのできた価値」	
14:20	みなとみらい本町小 赤岡先生
14:30	三保小 横田先生
14:40	市ヶ尾中 安藤先生
15:50	東高校 平澤先生
15:00	グループ協議
15:25	佐藤先生 ご講演・総括 「各校の実践報告を受けての総括と これからの社会に求められること」
15:55	クロージング

1 講演

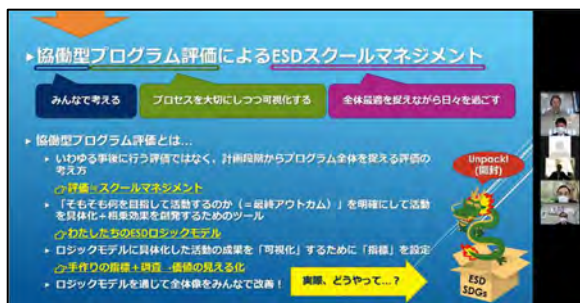
(1) 「SDGs達成の担い手育成（ESD）とロジックモデルを用いたプログラム評価の実際」

東洋大学教授 米原 あき / みなとみらい本町小学校 主幹教諭 高原 洋介

この講演では、ESDの観点をスクールマネジメントに導入する意義を踏まえ、それを実践するみなとみらい本町小学校の取組が報告された。

みなとみらい本町小学校は、ESDで目指す資質・能力を取り入れた「学校教育目標」として、【「みな」と「みらい」を創る子】を設定している。そして、協働型プログラム評価により、計画段階から全体を捉え、「学校教育目標」の実現を目指してあらゆる活動を具体化している。さらに、ESDロジックモデルに具体化した活動の指標を設定して、成果の可視化に取り組んでいる。

日々の教育活動は、「学校教育目標」と紐づいた「中間アウトカム」の実現を目指して取り組んでおり、ESDの概念を可視化したことで職員間の共通理解が進み、地域や保護者にロジックモデルを周知したことで協力体制も整い、活動にESDの視点を取り入れることが日常化してきている。今年度の取組においても、アンケートの分析の結果、探求的な学びの定着やたてわり活動のよさに気づきがみられている。



(2) 国連大学研究による ESD/GCED 調査結果から見えてきたこと」

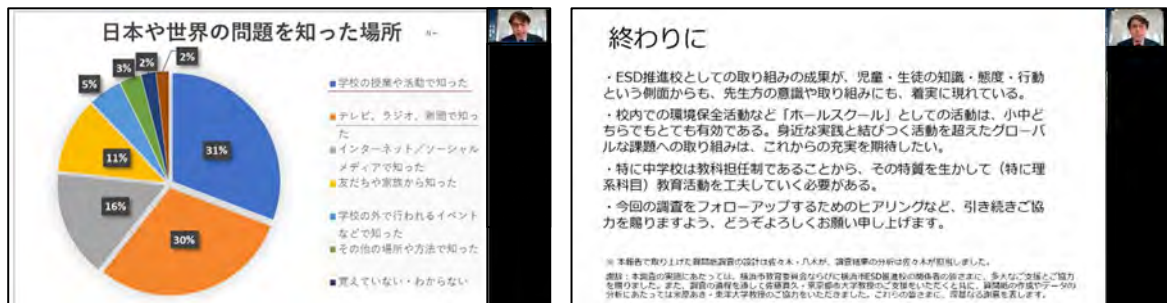
東京大学大学院准教授 北村 友人

この講演では、今年度推進校の児童生徒、教職員を対象に実施した調査の分析状況が報告された。

この調査は、ESDの取組の成果と今後の課題を明らかにするために実施しており、横浜市の児童生徒およそ2300人、教員およそ370人の回答をもとに現在分析をしている。主な調査項目は、環境・社会・経済の諸問題に関する知識・態度・行動に関する意識や実態などである。

詳細の分析はこれからであるが、「日本や世界の問題を知った場所」の設問で、学校の授業や活動で知った割合が高いなど、ESD推進校の取組の成果が、児童・生徒の知識・態度・行動という側面や教員の意識や取組に現れている。また、ESDにホールスクールでの取組は、小中学校においてとても有効であることが分かってきている。

一方で、環境・経済・社会の相互関連性や自分自身の行動とそれらの関連性への理解が低いことや、具体的な課題への態度に結びついていない可能性があること、グローバルな課題についての関心・理解が十分ではないといったことが課題として考えられ、今後の充実が期待される。



2 実践報告

(1) みなとみらい本町小学校教諭 赤岡 鉄矢

4年生の活動「木のストロー プロジェクト」において、川の水の調査やごみの分析といった、プラスチック製品に関する調査をきっかけに、協働による木のストローの広報活動に取り組んだ。協働することで社会の見方が変わり、SDGsのターゲットをより身近に感じて、大きな課題を自分のこととして考えられるようになった。アンケートの設問「家や地域の人に、自分たちの活動へ協力（参加）してもらっていますか」では、事前事後で肯定的な回答の割合が大きくなっており、児童が、多様な他者とコミュニケーションをはかり、活動の価値に気付くことができている。



(2) 三保小学校教諭 横田 和之

本校では、ESDにおいて育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を学年別に重点化し、カリキュラム・デザインに取り組んでいる。例えば、4年生は「相互性」と「多面的、総合的に考える力」としている。その結果、1年間という期間で児童の変容を捉えることができた。「安心」と「安全」の2つの視点をもって町の調査を行い、課題を設定して、解決方法を考えた。解決の取組では、思考ツールを積極的に取り入れて思考を可視化し、つながりや関係性に目を向けられるようにした。活動を通して、三保のまちを大切にしたい気持ちへの気づきを得て、森林伐採といった問題を自分ごととして捉え、他者に訴えようと行動しようとする態度が高まった。

(2) 実践事例

学年	構成概念	能力・態度
1年生	I 多様性	⑦《参加》
2年生	III 有限性	④《伝達》
3年生	V 連携性	⑤《協力》 ⑥《関連》
4年生	II 相互性	③《多面》
5年生	VI 責任性	①《批判》
6年生	IV 公平性	②《未来》

研究内容1
ESDにおいて育成を目指す「構成概念」「能力・態度」を学年別に重点化

重点化を図ることにより、児童の変容をより捉えやすくすることをねらう。

実践報告（横浜市立三保小学校）

(3) 市ヶ尾中学校教諭 安藤 大奈

「市中から世界を変えよう」を合言葉に活動に取り組み、委員会の活動にSDGs 17の目標を位

置づけている。例えば、海洋プラスチック問題についての取組から、公募によるエコバッグ制作に取り組み、同じような活動をしている小学生とのオンライン交流をして活動の充実を図ったり、自分たちにできることを考えるために、外部講師による「せっけん教室」を実施したりしている。

教科の学習においても、SDGs について理解を深める活動を積極的に取り入れている。こうした活動を通して、自分たちの考えや行動を積極的に発信し、広げていこうとする生徒の意識や行動力の高まりを価値として引き出すことができた。

(4) 東高等学校教諭 平澤 香織

イーストタイム（総合的な探究の時間）において、世界各国から来日した留学生とオールイングリッシュで2日間活動するGCC（Glocal Citizenship Camp）を実施した。実施前は、地球規模の課題に対して高校生の自分にできることはないと考えたり、国によって課題が違うことを理由に話し合うことに消極的だったりする傾向が見られた。実施後は、「世界の抱える課題は他人事ではなく、自分たち高校生にもできることがある」と考えたり、「SDGsを目指して自分ができることから始めたい」と語ったりするなど大きな変化がみられた。またアンケート調査から、SDGsや世界の諸問題に対する興味や関心のある生徒の割合が大きく増加し、他者と協働してそれらを解決に導くことやコミュニケーション手段としての英語（語学）の重要性を強く認識する契機となったことが読み取れた。生徒たちはイーストタイムを軸として、グローバルな視野を持ちつつまずはローカルに行動（action）し、自分自身を振り返る（reflection）ことを通して、再び世界の課題に向き合っている。これらが東高校のESDの生み出した価値と考えている。



3 グループ協議

推進校教諭に事前にファシリテーターを依頼し、4人程度で実施した。限られた時間であったが、感じたことを表現したり、意見交換をしたり、情報共有をしたりすることができた。

4 講演・総括「各校の実践報告を受けての総括とこれからの社会に求められること」

東京都市大学教授 佐藤 真久 氏

ESDに関する世界の最新の状況やその考え方を踏まえて、本会の総括を行った。

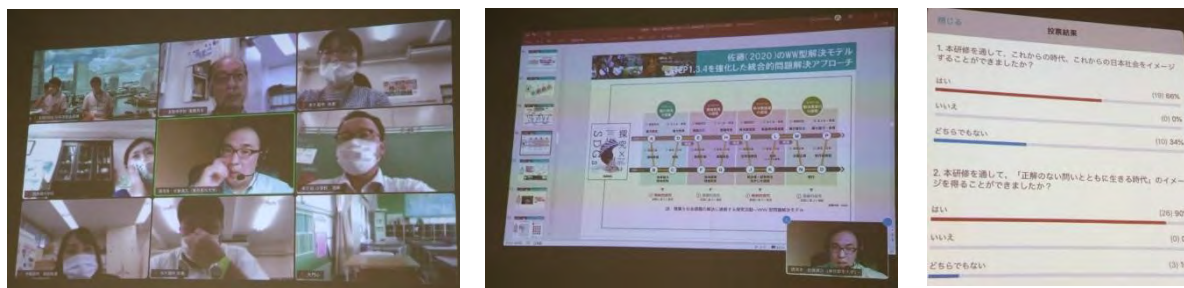
今まさに、正解のない問いと共に生きる時代が到来している。物事の見え方が変わり「学び」の作戦変更が求められている。コロナ禍だからこそそのESDという視点において、変容への在り方の認識は、何をすべきなのかという「Do」からどうあるべきなのかという「Be」に向き合うことが求められている。全体最適性の視点では、ホールスクール、ホールコミュニティアプローチの視点が重要である。

ESDに内在している意味を考えることが大切である。組織や教職員、子どもの変容が連動しており、それらが地域の変容そして日本・地球社会の変容に連動、連関している。

これからの10年、様々な事象について「正しきの衝突」が起きてくる。敢えて衝突させることで、価値規範やこれから求められる「ものの捉え方」を促すことにもつながるであろう。

第1回 SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校研修会（オンライン）

- 1 日時 2020年8月28日（金）15:30～16:45
- 2 参加方法 Zoom
- 3 参加校
神奈川小 幸ヶ谷小 羽沢小 みなとみらい本町小 永田台小 南本宿小 相沢小 大門小
三保小 恩田小 荏田西小
本牧中 中和田中 小田中 西柴中 西本郷中 市ヶ尾中 中川西中
- 4 内容
 - (1)事務局挨拶
 - (2)講演 「VUCA社会に求められる探究×SDGs」
～『国連・ESDの10年』の経験を活かし、SDGsの本質に向き合う～
講師 東京都市大学 教授 佐藤 真久 氏
 - (3)講演を基にしたグループ協議
 - (4)まとめ



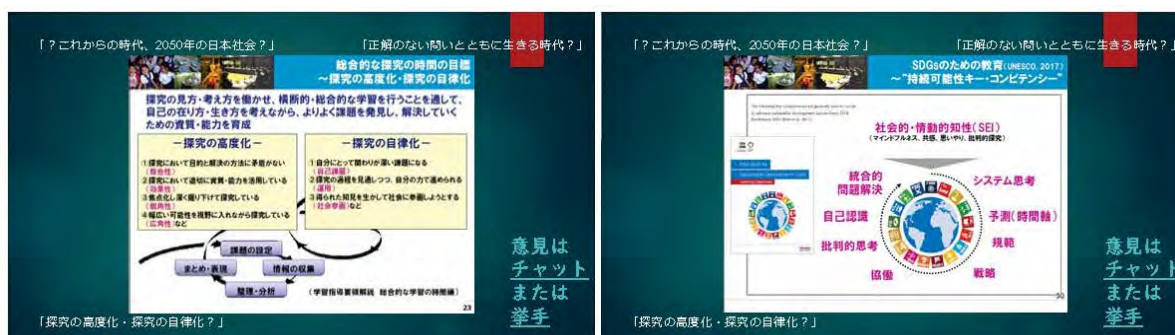
<第1回研修会 講演 アンケート>

- ・国際バカロレアのカリキュラムが参考になると感じました。
- ・失敗や試行錯誤を私たちも子どもたちも恐れない。
- ・今までやってきた活動を改めてSDGsの視点で捉え直す、整理する。
- ・地域の課題からグローバルな視点へつなげていく仕掛けを考える。
- ・子供たちが視野を広げる(広角性)ときに、SDGsがヒントになる。
- ・SDGsは目標の一つになると感じた。
- ・それぞれの問題のつながり、数年のつながりを意識する。
- ・社会的情動的知性の世界の動向をもっと知りたい。資質能力ベースでESDがとどまってしまっはつまらない。
- ・探究の自立化のために、待つ。こどもたちの気づき、学びを「つなげる」工夫を考えたいです。
- ・何か活動する際に、自分ごととして、自己課題をもって取り組んでいけるように、思考する時間をもたせる。
- ・まずは自分自身の変容が必要。大人の方が変われない。
- ・SDGsをつなげる。失敗、壁をもたせる
- ・グローバルな問題を如何に個人の日々の行動の変容につなげていくか。
- ・しかけて まって ほめる の循環が大切なのは。マルチプル・インテリジェンスの考え方も参考になるかもしれません。

<第1回研修会振り返り（チャット）>

第1回 SDGs達成の担い手育成（E S D）推進校情報交換会（オンライン）

- 1 日時 2020年9月16日（水）15：30～16：45
- 2 参加方法 Zoom
- 3 参加校
幸ヶ谷小 羽沢小 みなとみらい本町小 永田台小 南本宿小 三保小 恩田小
西本郷中 市ヶ尾中 東高校
- 4 内容
8月28日（金）に行った第1回研修会（オンライン）の内容をチャットの記録を基に振り返りながら、座談会形式で参加者の意見交流を行った。



< 第1回情報交換会資料（抜粋） >

- ・自分の学校の課題が見つかりました
- ・各学校のSDGsの取組のアイデアを知りたかったです
- ・高校生にとっても素直な気持ちややってみようという好奇心が大切です
- ・中学校では、世界の課題を子どもたちが、自分ごととして捉えて、自らの行動を変えていくことが、大切だと実感しました
- ・対話をすることで、自分の学校で大事にしていることが見えました。ありがとうございました。
- ・E S Dについて各校がどのように捉えているか、勉強になりました。変容という言葉が多くあったと思います。
- ・自分にもできることがあるという自信をつけてほしいと考えています。
- ・中学校や高校の目指す子どもの姿を知ることができました。小学校として、そこにつなげるために豊かな経験を積ませることが大切だと感じました。
- ・テレビドラマなどにもSDGsが出てくるようになって、子どもたちにとっても随分身近になってきていると感じます。他校の実践を、色々知りたいです。
- ・小、中、高と学びをつなぐことが大事だと改めて思いました。
- ・また、教員の皆さんにはE S Dは特別なことではなく先生方の日々の教育活動そのものという点を発信していきたいと考えています。
- ・これからも小中学校との連続性を大切にしていきたいと考えています。
- ・お互いの少し先の姿を見ることができてすてきですね。
- ・小中学校と連携できたらとおもいます。

< 第1回情報交換会振り返り（チャット） >

令和2年度 第2回 SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校研修会（オンライン）

1 日時 2020年9月30日（水）15：30～16：45

2 参加方法 Zoom

3 参加校

神奈川小 幸ヶ谷小 羽沢小 永田台小 相沢小 大門小 港南台第三小 三保小 恩田小
本牧中 小田中 市ヶ尾中 東高校

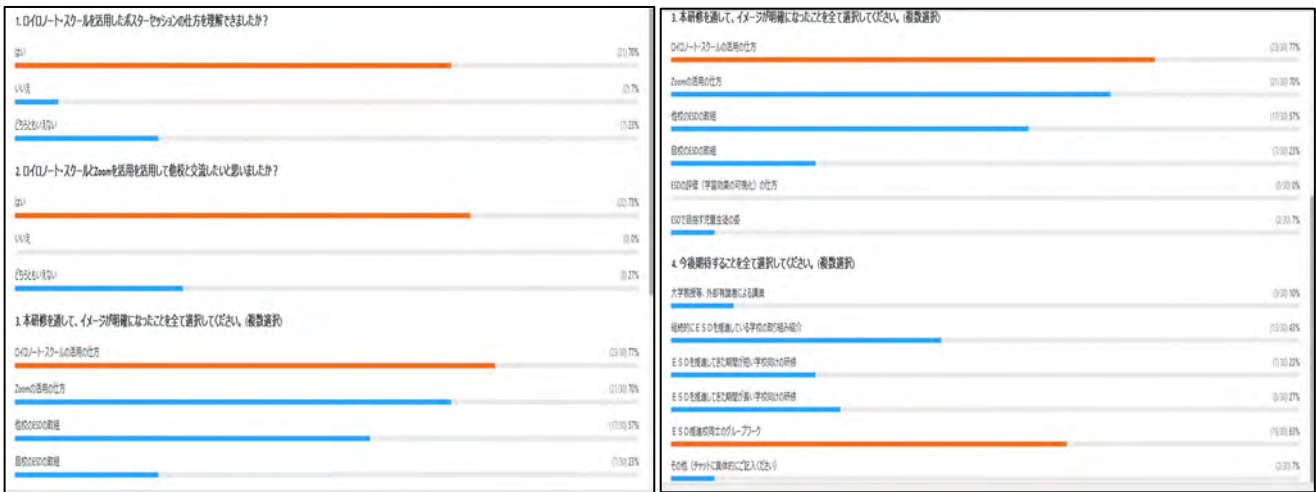
4 内容

(1)趣旨説明

(2)ロイロノート・スクールとZoomを活用したポスターセッション体験

講師 株式会社LoiLo 上原 浩平 氏

(3)まとめ



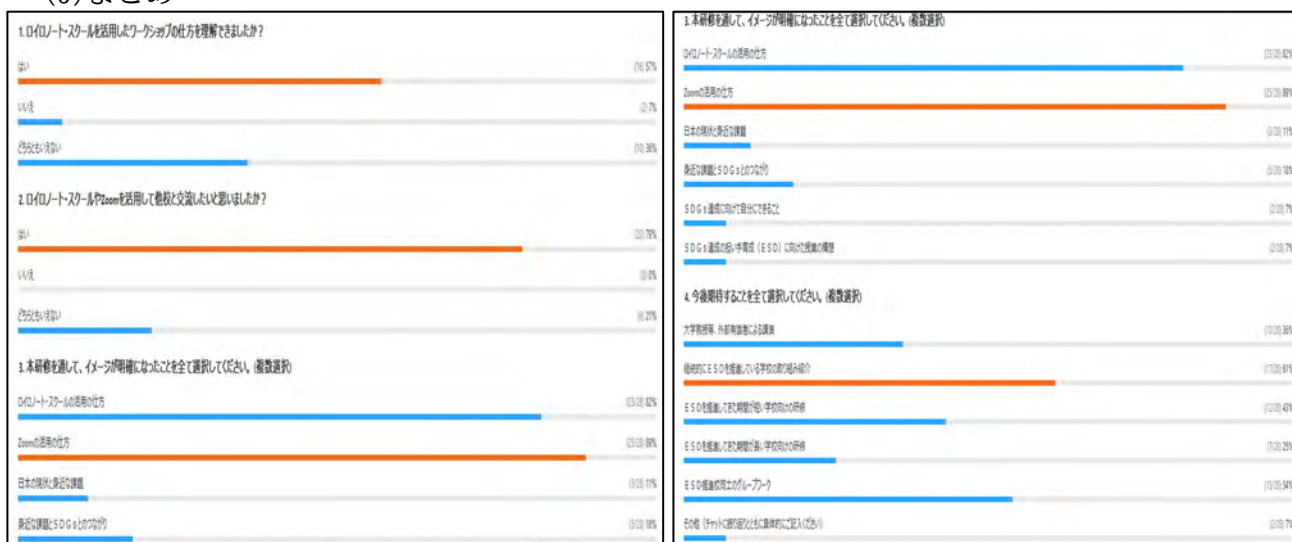
<第2回研修会アンケート結果>

- ・ロイロについて学びました。ありがとうございました。グループご一緒した小中の先生方ありがとうございました。引き続き宜しくお願いします。
- ・大変勉強になりました。次回もよろしくお祈りします。
- ・児童・生徒同士の交流が大事
- ・本日はありがとうございました。ロイロノートの使用方法も含めて、参考になりました。
- ・初めてロイロを使いました。もう少し自分自身の学びが必要だと感じました！
- ・ロイロノート使ってみます。やってみないと分かりませんね。
- ・とてもよい経験、学びになりました。ありがとうございました。
- ・相沢小は、環境ジャーナリストの竹田さんと、オンラインでやりとりしました。
- ・ロイロノートの使い方をこれからも学んでいく必要があると感じました。
- ・将来的には外国の生徒と本校の生徒でオンラインミーティングをさせたい
- ・大変勉強になりました。活用するために、自分自身の勉強も必要だとも思いました。
- ・ロイロの使い方もっと勉強したいと思います。
- ・ありがとうございました。ロイロについて勉強したいです。他校の取組も勉強になりました。

<第2回研修会振り返り（チャット）>

第3回 SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校研修会（オンライン）

- 1 日時 2020年10月28日（水）15:30～16:45
- 2 参加方法 Zoom
- 3 参加校
神奈川小 幸ヶ谷小 永田台小 南本宿小 相沢小 大門小 三保小 恩田小 荏田南小
本牧中 東高校
- 4 内容
 - (1)趣旨説明
 - (2)ロイロノート・スクールとZoomを活用したワークショップ体験
 - (3)まとめ



<第3回研修会アンケート結果>

- ・話し合いのテーマが興味深かったので、ロイロをスムーズに使えたら、もっと有意義だったと思いました。
- ・異校種の交流は、楽しい。
- ・初めて使用しましたが、使い方がよく分かりました。子どもたちの方が操作や使い方をすぐに習得するのではないかと思います。授業で活用できるように勉強します。
- ・より効果的な使用方法が分かり、よかったです。
- ・ロイロノートの使い方がまだまだ分かっておらず、研修本来の趣旨であるESD推進校のみなさんとの情報共有や議論ができませんでした。勉強します。
- ・まずは慣れていくことが大切だと思いました。ホスト側の準備（グループ分けなどが）大変そうだと思います。
- ・機械の操作に四苦八苦しましたが、とにかく触ってみることが大切だと感じました。
- ・子どもが使えるようになるには、かなり時間が掛かると感じました。今日は、みなさんと交流できてよかったです。ありがとうございました。
- ・校種を超えた交流を楽しみに実践を積み重ねていきたいです。ありがとうございました
- ・全員が使いこなせるまでは、かなりの時間を要すると思いましたが、授業の中で活用できたら便利だなと思います。テーマについては、もっと話したかったです。ありがとうございました。

<第3回研修会振り返り（チャット）>

第4回 SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校研修会（ハイブリッド）

- 1 日時 2020年11月19日（木）15:30～16:45 （受付：15:15～）
- 2 場所 ニュースパーク（日本新聞博物館） 2階イベントルーム
横浜市中区日本大通11
- 3 参加方法 会場へ集合または、Zoom
- 4 参加校（下線はZoomによる参加）
神奈川小 幸ヶ谷小 羽沢小 日枝小 中尾小 南本宿小 相沢小 大門小 港南台第三小
三保小 恩田小 荏田西小 本牧南小
中和田中 西柴中 西本郷中 市ヶ尾中 中川西中 東高校
- 5 内容
 - (1) SDGs達成の担い手育成（ESD）の推進について事務局説明
 - (2) SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校担当者の情報交流
 - (3) 事務連絡



<第4回研修会（ハイブリッド） 事務局説明 情報交流>

SDGs達成の担い手とはどんな児童生徒ですか？	SDGs達成の担い手育成に向けた授業とは？
<p>自分の言葉で話せる子ども、 新しい状況に置かれたときに、 なんとかなりに進もうと行動する子ども、 自分の変容を認識し、成長を 喜べる児童。</p>	<p>・コロナ状況下で子どもを 十分考慮した上で、たかたか 他校とつながる授業 生活経験以外でSDGsの 視点を教材研究し、単元をこ (国語は1年生、SDGsにまつた 教材作成)</p>
<p>今日の情報交換会で考えたことをお書きください。 ・最近、Zoomでハイブリッドでちょっと悲しい思いを（操作がうまく） 今日は、どうにか他校の先生とリアルに話せる喜びを味わ ることができました。ありがとうございました！！</p>	

SDGs達成の担い手とはどんな児童生徒ですか？	SDGs達成の担い手育成に向けた授業とは？
<p>何にこにも 自ら考え、発信し、 話し合い、つながりながら、 行動にうつせる児童。</p>	<p>児童が主体性を大事にし、 ファシリテーターとしての立ち位置で 可視化する授業（ときには しゃべりタイム） (技術、ツール等)は提供済み</p>
<p>今日の情報交換会で考えたことをお書きください。 ・話しを聴いていろいろ気づきがあったり、次への発展につながるア クション、とても有意義だったと思います。</p>	

- ・意見交流した学校と似た取組が多くて、色々参考になりました。
- ・他校の取組を聞き、新規校としてこれからやるべき方向が少し見えてきました。個々の取組を全校のものにしていくにはどうしたらいいかということが、本校の課題です。
- ・他校でやっている取組などを知ることができ、とても参考になりました。
- ・他校の先生と交流ができ、大変有意義な時間でした。本校の実践と重なることも多く、これまでやってきたことの意義が深まり、自信につながりました。

<第4回研修会振り返り（振り返りカード チャット）>

本年度の ESD 推進校

横浜市立永田台小学校
横浜市立幸ヶ谷小学校
横浜市立市ヶ尾中学校
横浜市立東高等学校
横浜市立三保小学校
横浜市立羽沢小学校
横浜市立日枝小学校
横浜市立恩田小学校
横浜市立荇田西小学校
横浜市立港南台第三小学校
横浜市立南本宿小学校
横浜市立みなとみらい本町小学校
横浜市立大門小学校
横浜市立中和田中学校
横浜市立西本郷中学校
横浜市立西柴中学校
横浜市立神奈川小学校
横浜市立白幡小学校
横浜市立中尾小学校
横浜市立相沢小学校
横浜市立本牧中学校
横浜市立小田中学校
横浜市立中川西中学校

(2020 年度指定 23 校)

本報告書の執筆・作成協力（第 1 章以外）

東京都市大学大学院 環境情報学研究科 (横浜市 ESD 推進コンソーシアムコーディネーター)	教授 佐藤 真久
東洋大学社会学部社会学科 大学院社会学研究科 (横浜市 ESD 推進コンソーシアム委員)	教授 米原 あき
東京大学大学院教育学研究科	准教授 北村 友人
東京大学大学院教育学研究科	特任助教 佐々木 織恵
東京大学大学院教育学研究科	特任研究員 八木 恵理子

編修・発行 横浜市教育委員会事務局学校教育企画部小中学校企画課
横浜市 ESD 推進コンソーシアム

この冊子は FSC 認証紙を使用しています。

編集・発行／横浜市教育委員会事務局小中学校企画課
〒231-0005 横浜市中区本町6-50-10 横浜市ESD推進コンソーシアム
E-mail: ky-esd@city.yokohama.jp 2021年2月